

松本市乗鞍観光センター再整備基本構想・基本計画

令和 5 年5月

－ 目 次 －

	ページ番号
1. 基本構想・基本計画について.....	3
1.1. 目的.....	3
1.2. 対象範囲	4
1.3. 実施内容	5
2. 現状把握	7
2.1. 乗鞍高原について.....	7
2.1.1. 乗鞍高原の概要	7
2.1.2. 乗鞍高原の気象	9
2.1.3. 乗鞍高原の地形・地質	10
2.1.4. 乗鞍高原の動植物	13
2.1.5. 乗鞍高原の変遷	15
2.1.6. 乗鞍高原における中部山岳国立公園の範囲	17
2.1.7. 地域の現状(観光／人口減少／産業等)	18
2.1.8. 中部縦貫自動車道等高速交通網の構築によるアクセス環境の変化.....	20
2.2. 現状把握に基づく課題	21
3. 上位の政策・計画等の整理.....	22
4. 鈴蘭地区(観光センター及びその周辺)の現況と課題.....	25
4.1. 鈴蘭地区の特色	25
4.1.1. 鈴蘭地区開拓・開発の歴史.....	25
4.1.2. 乗鞍高原の主要施設及び地域資源	27
4.1.3. 乗鞍高原の体験価値等地域資源の特性・分布.....	29
4.2. 既存施設の現状と課題.....	30
4.2.1. 観光センターの現状と課題	30
4.2.2. 周辺施設の状況	37
4.2.3. 環境省令和 2 年度乗鞍高原再整備基本計画における鈴蘭の施設評価	41
4.3. 計画地周辺の特性・課題	42
4.3.1. ヒアリングによる課題・意見把握	42
4.3.2. 現地調査による特性・課題把握.....	46
4.3.3. ワークショップ等による課題・意見把握.....	55
5. 観光センター及び周辺市有地の基本構想	71
5.1. 基本的な考え方.....	71
5.2. 課題・目指すべき方向性・コンセプト	71
5.3. ランドスケープを活かした地域拠点とその周辺の在り方	76
5.4. 拠点としての土地利用(事業用地)の検討.....	79
6. 乗鞍観光センター再整備基本計画	84
6.1. 基本的な考え方.....	84
6.2. 拠点施設に導入すべき機能の検討	84

■ワークショップによる導入機能のまとめ	85
6.2.1. ゼロカーボン拠点機能	85
6.2.2. 案内・誘導機能.....	85
6.2.3. 交通機能	86
6.2.4. 滞在・交流機能.....	87
6.3. 駐車場の検討.....	88
6.4. 最適な環境配慮型二次交通システムの導入検討と拠点施設との関係性検討.....	91
6.5. 配置計画の検討	93
6.6. 建築計画の検討	96
6.7. 施設における ZEB 化導入計画	108
7. 管理運営方針の検討.....	109
7.1. 駐車場有料化の検討	109
7.2. 車中泊問題の解消の検討.....	109
7.3. 拠点施設の管理運営	109
8. 概算事業費.....	110
9. 事業スケジュール	110
10. 資料編	111

1. 基本構想・基本計画について

1.1. 目的

中部山岳国立公園乗鞍高原は、令和3年3月環境省が主体となり「のりくら高原ミライズ」(乗鞍高原の目指すべき地域ビジョン)が策定され、併せてのりくら高原ミライズ構想協議会が設立されました。現在、関係行政機関及び地元関係者が地域ビジョンの実現について議論を進めています。環境省では国立公園において、先行して脱炭素化に取り組むエリア「ゼロカーボンパーク」への登録を推進しており、こうした取組みが評価され乗鞍高原(松本市)が全国第1号ゼロカーボンパークとして登録されました。

一方、乗鞍高原の利用拠点となる鈴蘭地区においては、松本市乗鞍観光センター(以下「観光センター」とします。)の老朽化、バスターミナル機能の不便さなど十分なサービスを提供できていない現状があります。そこで、のりくら高原ミライズの目指すビジョン“「環境・暮らし・観光」の3要素を基盤とし、それぞれが相互作用しながら持続可能な地域社会を形成していく”を基本とし、乗鞍高原の現状と課題を整理するとともに、地域関係者・関係行政機関・関係団体と今後の鈴蘭地区の在り方について議論し、各者で合意できる観光センターの在り方を整理します。

整理した在り方を踏まえ、取り組むべき事項(ハード・ソフト)をまとめた乗鞍ゼロカーボン拠点機能を併せ持つ松本市乗鞍観光センター再整備基本構想・基本計画を策定するものです。

対象範囲は図 1-1、1-2 に示す中部山岳国立公園内の鈴蘭地区です。

[illegible]

1.3. 実施内容

(1) 現状把握

乗鞍高原の概要、取り巻く環境の変化(成り立ち・地域の現状と課題等)について、文献・既存資料、関係者へのヒアリング等に基づき俯瞰的な視点で整理します。松本市総合計画を始めとする上位計画や関連する政策等について調査・整理します。

(2) 現況調査

乗鞍高原の特色、ランドスケープ、体験価値等の基本条件・資源及びゲートウェイとしての鈴蘭地区の在り方に関する現状と課題について、現地調査と関係者へのヒアリングにより把握します。また、既存施設の利用実態及び施設状況を調査・整理します。

(3) 観光センター及び周辺施設の現状の課題整理と在り方の検討

- ア 乗鞍高原全体における地域拠点としての位置付け、在り方
- イ 地域拠点、ネットワーク、交通拠点、アクティビティ拠点としての在り方
- ウ 拠点エリアの候補地の検討
- エ ランドスケープを活かした地域拠点とその周辺の在り方

(4) 観光センターへの導入機能、ゼロカーボン拠点施設としての在り方の検討

- ア 観光センター・バスターミナルの導入機能、コンセプト、規模、配置計画、将来変化に対応できる在り方
- イ ゼロカーボン拠点施設としての在り方
- ウ サイト構想検討のための社会実験等
- エ 最適な環境配慮型二次交通システムの導入検討と拠点施設との関係性検討
- オ 滞留拠点としての観光センター・バスターミナルの配置構想の検討
- カ 施設におけるZEB化(※)導入検討
- キ 事業計画スケジュールの検討

(5) 関係者へのヒアリング及びワークショップ等の議論による意見収集

(6) 概算事業費の算出

基本構想及び基本計画に基づき、概算事業費を算出します。

(7) 報告書等の作成

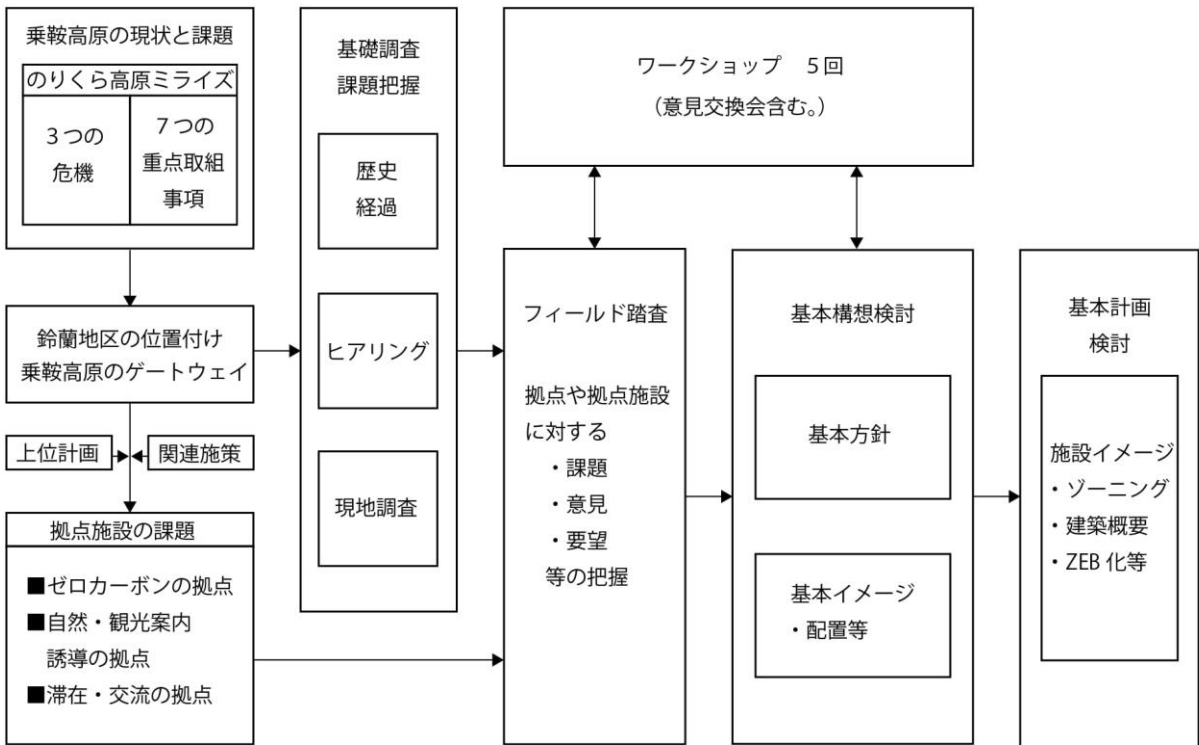
調査目的、項目・方法及び調査結果の総合的分析・検討を踏まえ、計画策定の基本方針及び計画等の内容・調査結果等について取りまとめます。

以上のとおり、「のりくら高原ミライズ」を踏まえ、上位計画・政策との整合を図りながら、ワークショップ等による関係者の意見を反映させた基本構想・基本計画としてまとめます。

※ZEB化

ZEBはNet Zero Energy Building(ネット・ゼロ・エネルギー・ビル)の略称で、「ゼブ」と読みます。ZEB化とは、快適な室内環境を実現しながら、建物で消費する年間の一次エネルギーの収支をゼロにすることを目指した建物にすることです。建物の中では人が活動しているため、エネルギー消費量を完全にゼロにすることはできませんが、省エネによって使うエネルギーを減らし、創エネによって使う分のエネルギーを創ることで、エネルギー消費量を正味(ネット)でゼロにすることができ(環境省のHPを参考に作成)。

図 1-3 進め方のフローチャート



2. 現状把握

2.1. 乗鞍高原について

乗鞍高原は、松本市安曇地区の西部に位置し、南東には奈川地区、西は岐阜県高山市と接する場所にあり、中部山岳国立公園の最南部を占めています。乗鞍岳の標高は 3025.7m であり、火山としては、富士山、御嶽山に次いで日本で 3 番目の標高を誇っています。乗鞍高原は、乗鞍火山ののびやかな山麓にあり、古代には放牧や信仰の地として、近世には林業、大正期に入るとスキーも行われるようになり、特に高度経済成長期以後はスキーの他、山野草、ハイキング、避暑、紅葉、温泉を楽しむ観光地化が進展しました。

近年は、乗鞍岳のマイカー規制による訪問者の減少、スキー人口の減少、一の瀬で牛の放牧が行われなくなるなどの変化も見られる一方、ヒルクライムのサイクリストにとって聖地としての立ち位置を確立する動きもみられます。令和 3 年には地元の方々の議論をもとに、のりくら高原ミライズを策定し、目指すべき地域のビジョンを共有し、持続可能な発展に向けた取組みが行われています。

2.1.1. 乗鞍高原の概要

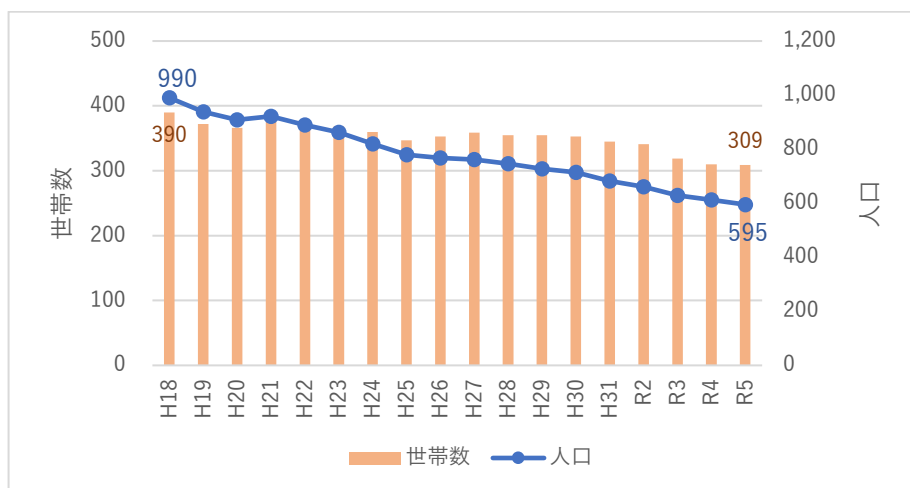
■乗鞍高原の位置

松本市街地から西南西に直線距離で約 33km の距離にあり、飛騨山脈の最南部に位置しています。大都市圏からは、直線距離で東京から約 200 km、大阪から約 250km、名古屋から約 125km となっています。

■乗鞍高原周辺の世帯数と人口の動態

大野川区町会の世帯数と人口の変化をみると、世帯数は過去 17 年で 81 世帯の減少、人口は 395 人の減少となっており、地域全体の過疎化が進んでいます。

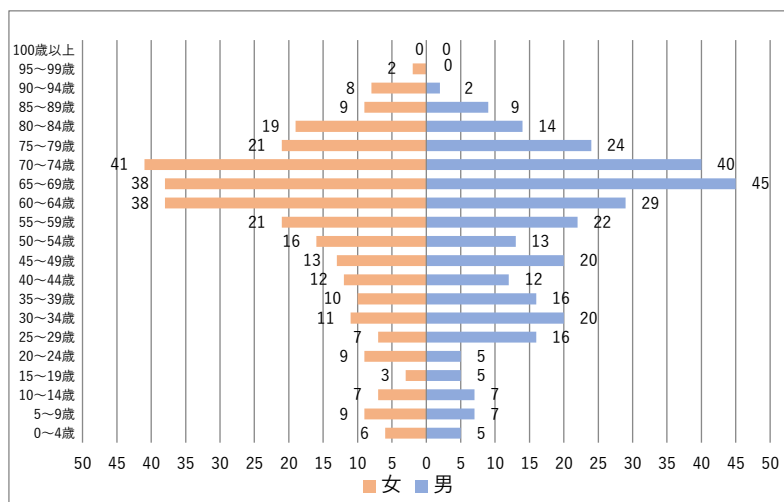
図 2-1 大野川区町会の世帯数と人口



データ出典:松本市 HP 各年 1 月 1 日登録人口

令和 2 年の国勢調査における大野川調査区の人口(総計 539 人)及び白骨調査区の人口(総計 72 人)を合計し、男女 5 歳階級別の人口ピラミッドを作成すると、60～74 歳の人口比率が他の世代に比べて人口が大きいことが分かります。令和 2 年の国勢調査による 65 歳以上の人口割合を示す高齢化率は 30.9%となっており、高齢化への対応も課題となっています。

図 2-2 大野川・白骨調査区の人口ピラミッド

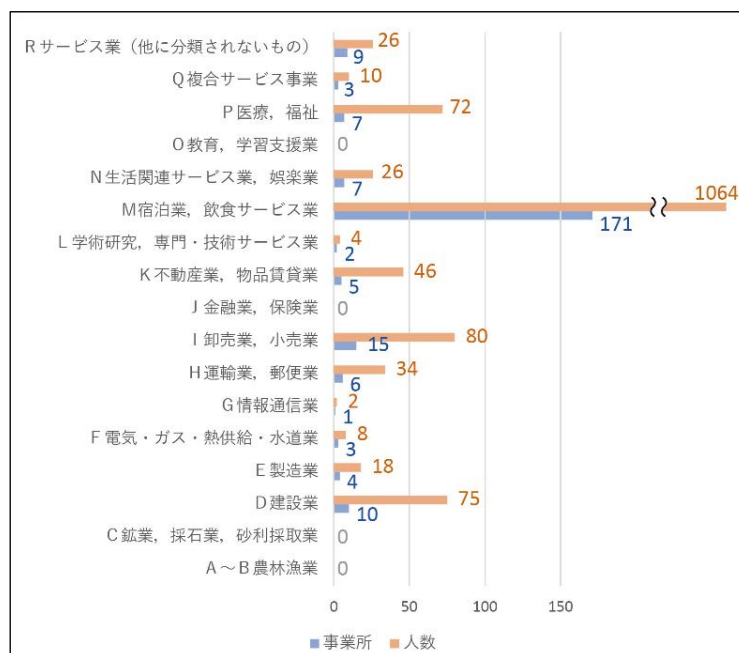


データ出典: 令和 2 年度国勢調査

■乗鞍高原を含む安曇地区の産業の状況

安曇地区の事業所数及び就労人数が多いのは宿泊業・飲食サービス業ですが、2016 年の経済センサス活動調査においては、2014 年の経済センサス基礎調査に比べて宿泊業・飲食サービス業の事業所数は 14 件、就労人数は 85 人の減少となっており、人口減少対策として、雇用創出、確保が課題となっています。

図 2-3 安曇地区における事業所数及び就労人数



データ出典: 経済産業省 経済センサス活動調査 2016

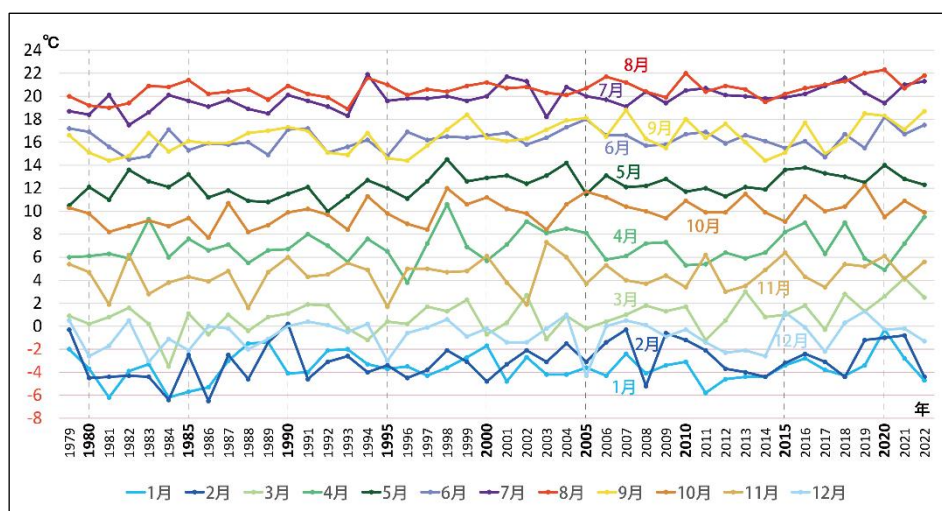
2.1.2. 乗鞍高原の気象

■近年みられる乗鞍高原の気候の変化

観光センター付近は標高約 1450m で高原らしい冷涼な気候です。そのため夏は避暑地として、冬はウインタースポーツの適地となっています。しかし、近年、地球温暖化の影響による夏場の猛暑や冬場の雪不足などがみられるようになっていきます。

乗鞍高原に近い奈川観測所の過去の月別平均気温の変化を見ると、全体的に上昇傾向にあります。乗鞍高原の鈴蘭付近は奈川観測点の標高より 400m ほど標高が高く、地形的な条件も異なりますが、気温の上昇傾向は同様に変化していると推測されます。

図 2-4 奈川観測所の月別平均気温の推移

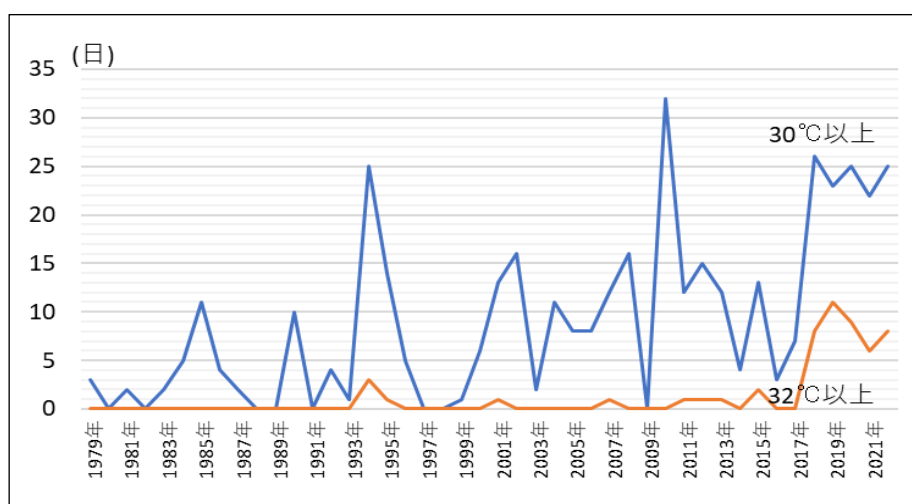


データ出典: 気象庁

■標高 1000m でも真夏日が増加

過去には 30℃以上の気温をほとんど観測しない年も数年ごとにみられていましたが、近年は30℃が 20 日以上、32℃以上が5日以上観測され、温暖化している傾向にあります。

図 2-5 奈川観測所の最高気温 30℃以上と 32℃以上の年間日数の推移



データ出典: 気象庁

2.1.3. 乗鞍高原の地形・地質

■地質の特徴と火山としての乗鞍岳

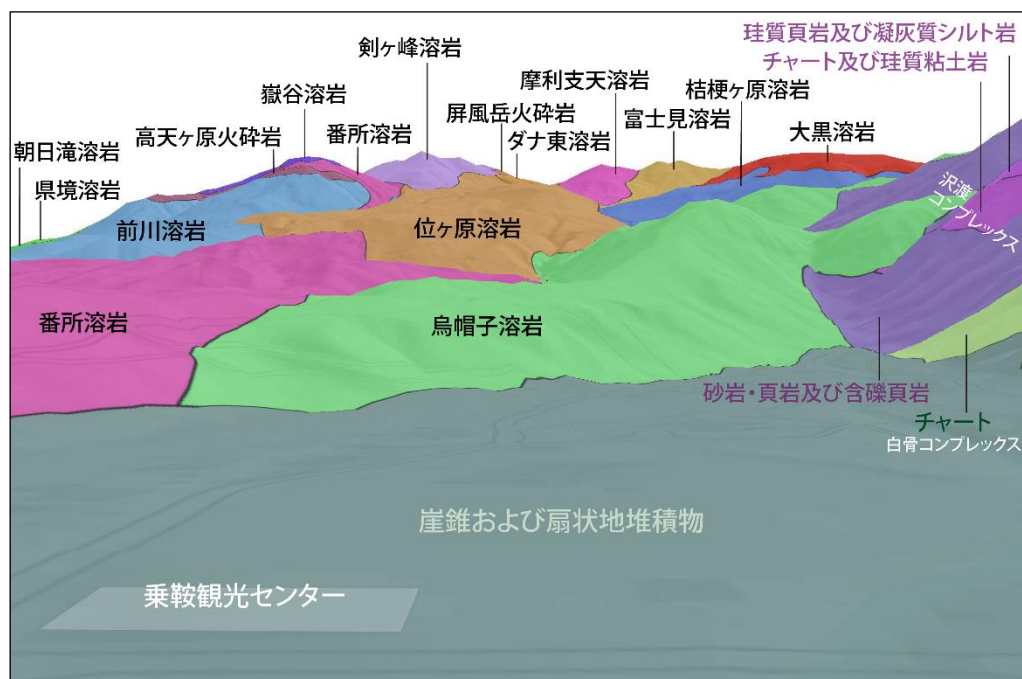
◇乗鞍火山の歴史

乗鞍高原周辺の地質は、ペルム紀から中生代ジュラ紀にかけての堆積岩である基盤岩としての美濃帯と、それにかぶさる新生代の乗鞍火山の活動による火山岩が主な地質を成しています。

乗鞍火山の活動は大きく 2 期に分類されます。古期は 128～125 万年前に始まり、92～86 万年前には千町火山体が形成され地質的には上部、中部、下部と分けられます。新期の活動では 32～12 万年前の烏帽子火山体を形成した火山活動、その後 10 万年前から現在までに権現岳・高天ヶ原火山体、恵比須火山体、四ツ岳火山体による火山活動があり、現在の乗鞍岳が形成されています。

新期の火山活動のうち、烏帽子火山体下部の烏帽子溶岩がスキー場の鳥居尾根やその下のゲレンデ付近の地形をつくり、10 万年前以降の権現池・高天ヶ原火山体の番所溶岩が流出し乗鞍高原の広い範囲を覆う地形となりました。その後は位ヶ原溶岩等も流出しています。1 万年前以降も権現池付近から 9600 年前、9200 年前にマグマ噴火があったと考えられており、比較的新しい溶岩も見られる場所です。7300 年前以降は、少なくとも 9 回の噴火イベントがあり、その内 1 回はマグマを伴う噴火であったと考えられていますが、ほとんどは水蒸気噴火であるとされます。約 2000 年前の恵比須岳の噴火は、マグマ噴火であったとする報告もありますが、活動履歴が最近 1 万年よりも古い可能性が高いとも言われています。地質図を立体化すると鈴蘭付近からは乗鞍火山の活動による様々な溶岩が望めることがわかります。

図 2-6 鈴蘭付近から乗鞍岳方向を見たときの立体地質図



国土基盤情報、地質調査所発行地質図を基に作成

◇現在の火山活動

乗鞍岳は活火山に分類され、100 年及び 1 万年の活動指数が低い活火山として活火山ランク C の指定を受けています。歴史時代には噴火の記録は見つかっていませんが、明和 2(1765)年には山頂周辺で火山ガスが放出したと想定される記述が残されています。活動度は低いですが、活火山であるため日頃からの防災への意識向上や対策が必要となっています。

◇乗鞍高原に見られる最古の地質となる基盤岩

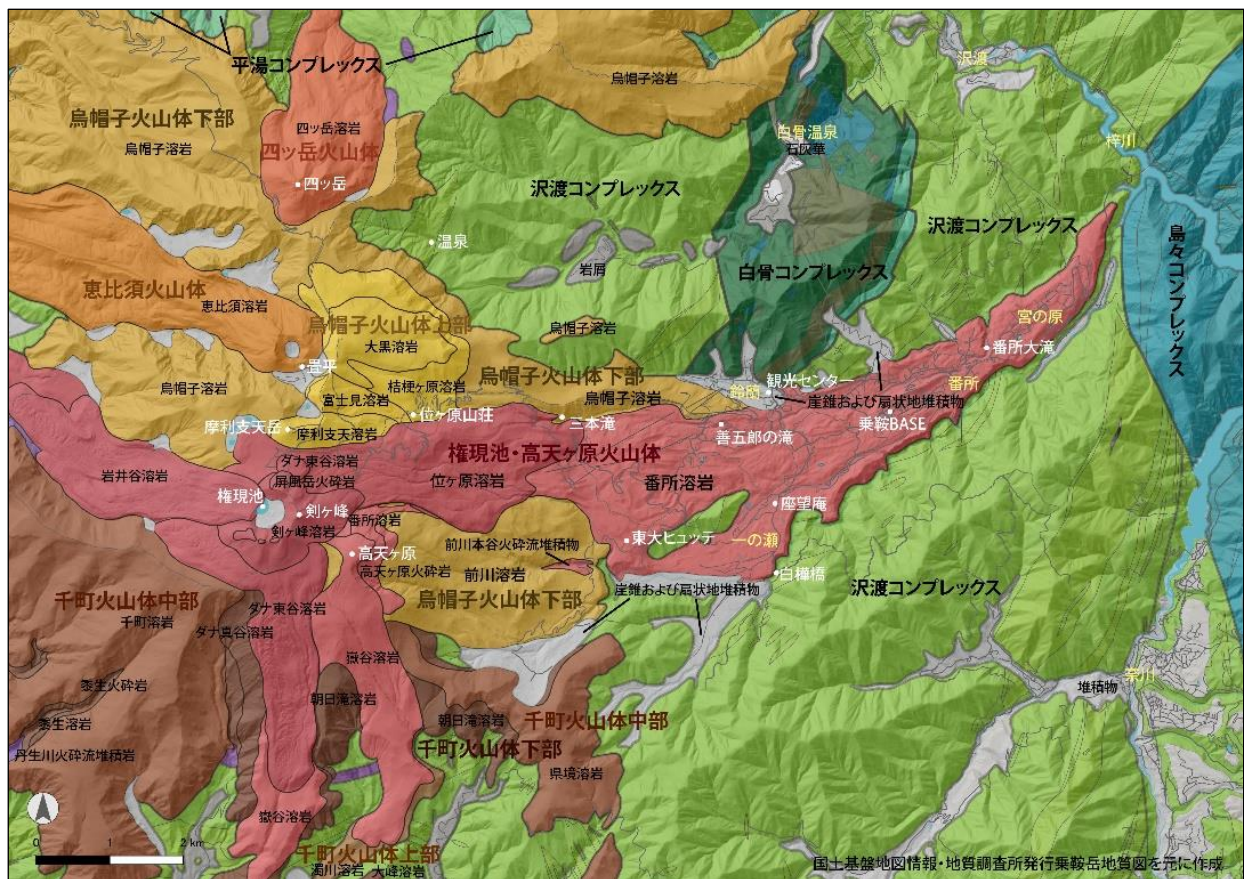
乗鞍火山の溶岩の下にある基盤岩は、美濃帯と呼ばれる地質体です。美濃帯の地質は、頁岩や砂岩、チャート及び珪質粘土岩等を主体とする沢渡コンプレックスと、それより古いチャートや石灰岩が主体の地層ですが、衝上して沢渡コンプレックスの上部地層となった白骨コンプレックスが鈴蘭付近で境を成しており、共にチャートや緑色岩、石灰岩などが複合した地質となっています。

◇鈴蘭地区の地質

観光センターや宿泊施設、家屋がある比較的平坦な所やなだらかな谷地のエリアは、崖錐又は扇状地堆積物とされ、急傾斜の斜面崩壊や土砂の堆積により形成されたと考えられています。

なお、観光センター周辺は崖錐又は扇状地堆積物の地層ですが、どの程度の堆積深度があるかは不明であり、地中熱利用が容易かどうかは、ボーリング等による調査が必要です。

図 2-7 乗鞍高原周辺の地質概略図

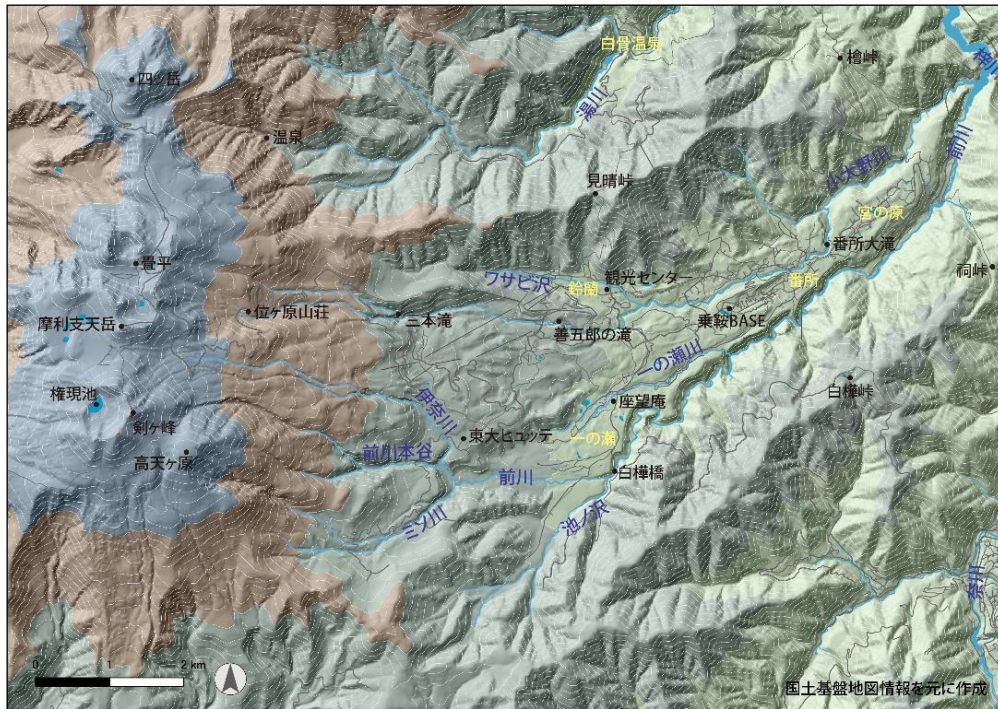


地質調査総合センター地質図、国土地理院基盤地図情報を利用して作成

■溶岩を主体とする地形の特徴

剣ヶ峰 3,026m を主峰とし、複数の峰からなる乗鞍岳や乗鞍高原の特徴的な地形は、火山活動によって生まれました。また、小大野川や前川の浸食により深い谷が形成されています。若い火山でもあるため、火山地形がよく残る所も多く、溶岩地形は乗鞍高原の特徴的な地形です。

図 2-8 陰影起伏図

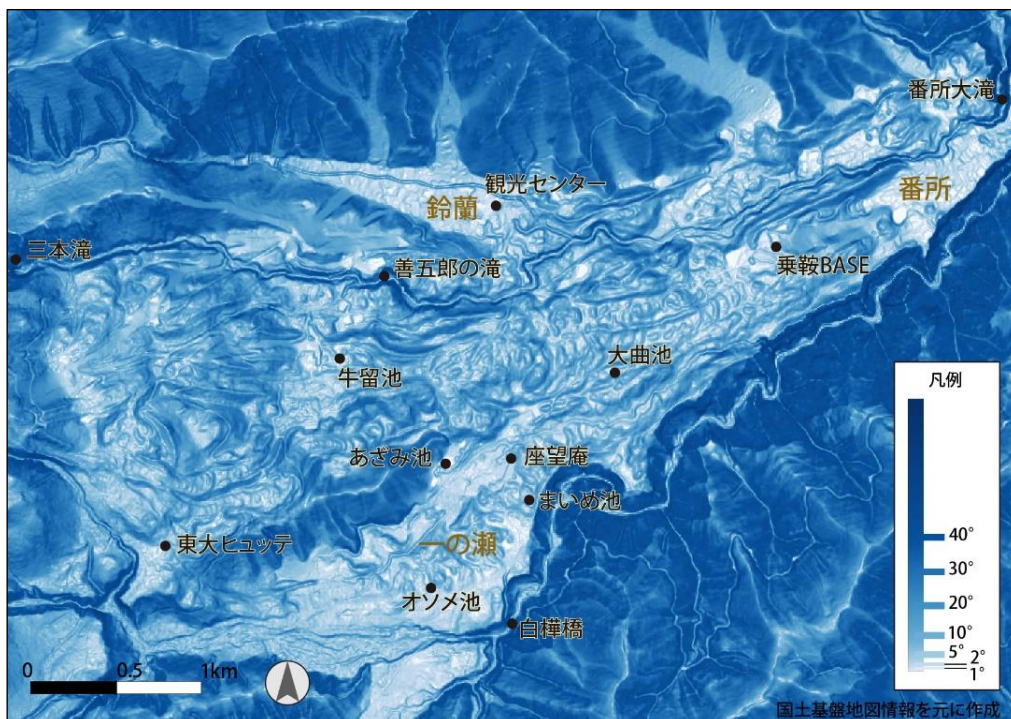


国土基盤情報を基に作成

■乗鞍高原の傾斜の特徴

5mメッシュの標高データを使って傾斜図を作成すると、一の瀬からいがやレクリエーションランド(乗鞍 BASE)にかけての緩斜面には凸凹地形が残り、溶岩による地形が残っていることがわかる一方、鈴蘭付近の緩傾斜地は、東に向かって段差状に傾斜が下がっており凸凹が少なく、土砂の流入や崩落によって生まれた地形であることが推測できます。

図 2-9 傾斜量図



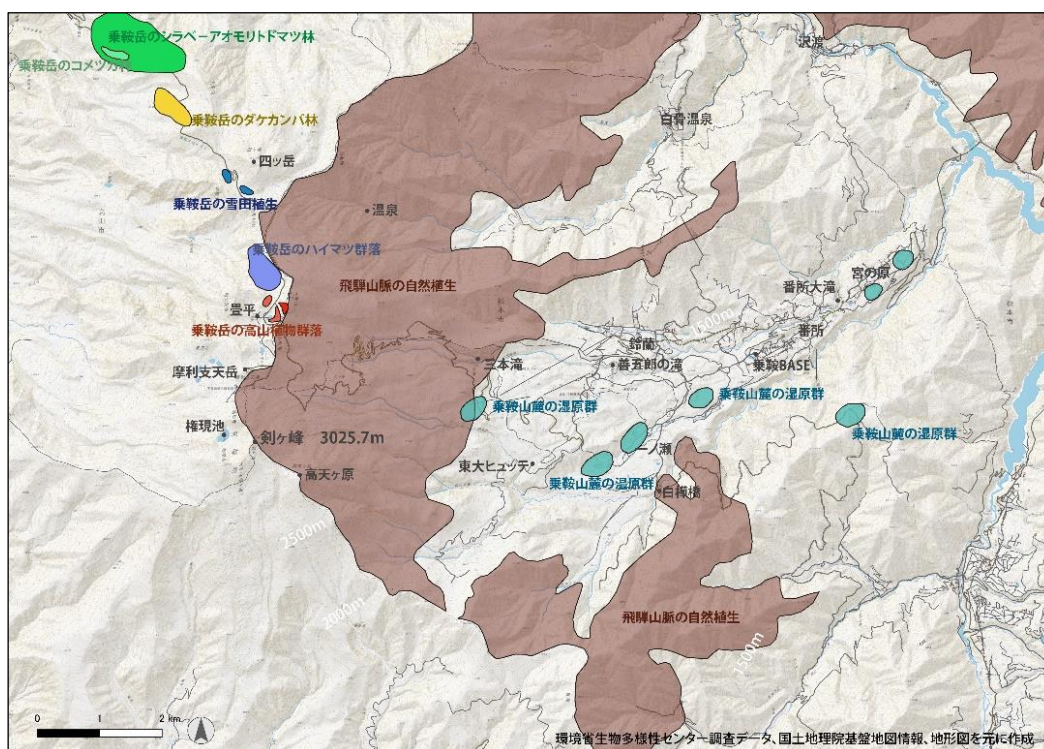
国土基盤情報を基に作成

2.1.4. 乗鞍高原の動植物

■特定植物群落の指定

環境省の自然環境保全基礎調査における特定植物群落としては、乗鞍岳の長野県側は飛騨山脈の自然植生として一体的に広く指定されています。また、高原部においては、乗鞍山麓の湿地群として7か所が指定されています。岐阜県側は、乗鞍岳の高山植物群落、乗鞍岳のハイマツ群落、乗鞍岳の雪田植生、乗鞍岳のダケカンバ林、乗鞍岳のシラベアオモリドマツ林、乗鞍岳のコメツガ林の6種が指定されています。

図 2-10 乗鞍高原周辺における特定植物群落



環境省自然環境保全基礎調査データ、国土基盤情報を基に作成

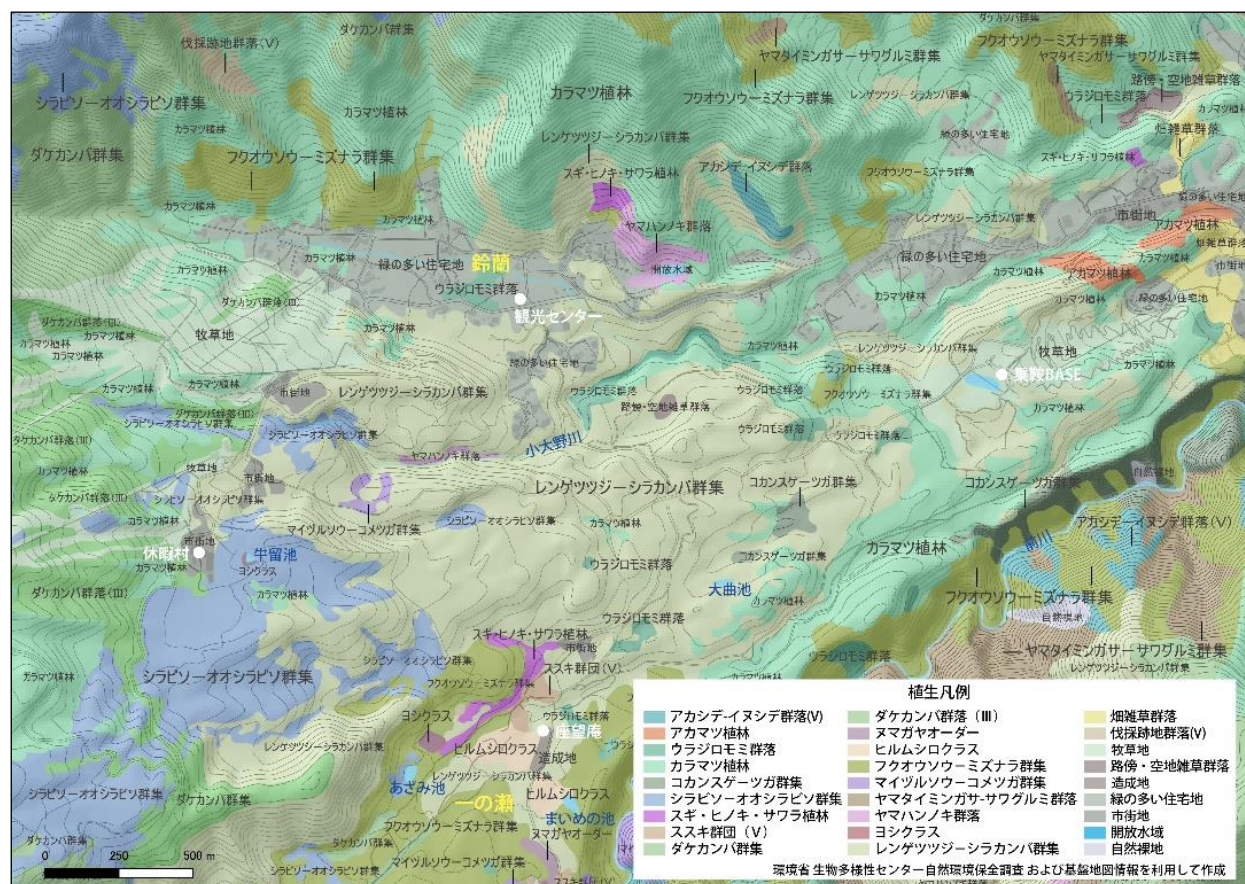
■鈴蘭周辺の植生

環境省生物多様性センターの 2.5 万分の1植生調査をみると、観光センター周辺は緑の多い住宅地やウラジロモミ群落として分類されています。鈴蘭周辺においては、レンゲツツジ-シラカンバ群集、フクオウソウ-ミズナラ群集、ヤマハンノキ、カラマツ植林といった分類がなされています。

観光センター周辺のワサビ沢近くには、カラマツ、ヤチダモ、シナノキ等の高木やマユミ等の中低木が見られます。長野県乗鞍自然保護センター(以下「自然保護センター」とします。)裏の森には、ヤチダモやカラマツ等の高木が見られます。また、自然保護センター周辺の湿地帯部には自然保護センターのスタッフや地元の方々によって貴重な植物も管理されており植物園として歩行通路も設けられています。

一方、特定外来生物に指定されているオオハンゴンソウは乗鞍高原にも見られ抜き取り駆除が必要となっています。産業管理外来種であるハリエンジュ、重点対策在来種であるイタチハギ等の生態系被害防止外来種リストに載る植物も鈴蘭周辺に広く見られ、イタチハギは旧湯けむり館跡地などにかなりの数が見られる状況です。その他フランスギク等の問題視されている外来種も多く侵入している状況です。

図 2-11 植生図



環境省自然環境保全基礎調査データ、国土基盤情報を基に作成

■鈴蘭周辺の動物

近年、鈴蘭周辺では、蕎麦等を餌に求めツキノワグマ、ニホンザルが頻繁に出没しています。その他動物として、ニホンカモシカ、タヌキ、キツネ、アナグマ、ノウサギ、リス、ヤマネ、ネズミ類、外来のハクビシンが生息しています。また、外来コウモリ類も多種生息しており、なかでも環境省の絶滅危惧 II 類(VU)、長野県の絶滅危惧 IB 類(EN)に指定されているクビワコウモリは、乗鞍高原を繁殖地としています。クビワコウモリに関しては、クビワコウモリを守る会が 30 年以上にわたり生態調査、保護活動を行っています。

野鳥としては、シジュウカラ、アオジ、アカハラ、ムクドリ、キセキレイ等多様な種が生息しています。

昆虫としては、コヒョウモンモドキなどヒョウモンチョウ類やヒメギス、イブキギス等の山地草原にすむ昆虫類が生息しています。高山トンボであるカオジロトンボやルリイトトンボが池や湿地に生息しており、これらは日本における分布の西南限となっています。また、山地草原に住むエゾアカヤマアリの生息も特徴的なものです。

■生態系や動植物生息状況の把握

鈴蘭周辺の貴重な動植物を守るために、動植物の詳しい生態について、専門家を交えて定期的に調査し、乗鞍高原の理解向上や魅力を伝えるために知見を蓄える必要があります。

2.1.5. 乗鞍高原の変遷

■縄文時代

安曇村史を見ると、縄文時代から乗鞍高原には人が住んでおり、位沢遺跡、檜ノ木遺跡、鈴蘭小屋遺跡などの遺跡が存在しています。

■古代、信仰の地

乗鞍岳は古来には位山とも呼ばれ、霊山として信仰を集めた山であり、平安時代中期に成立した古今六帖には、「衣手の色まさりつつ信濃なるくらゐの山は君がまにまに」と謳われています。『日本三代実録』の貞観 9(826)年の条によると、梓水神の叙位の記述があり乗鞍岳に鎮座する神社として信仰されていました。また、近世には乗鞍岳は修験の場としても立山や有明山と同様に利用されてきました。

■中世～近世

中世には街道が大野川や番所を通り沢渡に抜け、安房峠から平湯方向に通じており、武田信玄もこの道を通り飛騨に侵攻しています。近世の街道としても飛騨街道として松本から稲核、入山、大野川、安房峠を経由して高山に抜ける道が利用されていました。寛政 2(1790)年の幕府の街道政策により、飛騨街道は街道としては廃止されてしまいましたが利用は続いていたようです。

近世には大野川には杣人が住み林業が盛んでした。木材が豊富なため製炭業も行われ、近年まで一の瀬には炭窯があり大野川区が炭の生産を行っていました。江戸時代、絹機の糊付にも利用されていた蕨粉の生産も盛んで、蕨粉の原料を取った後のコガスと呼ばれる繊維は水に強く腐りにくいため、つるべ縄や魚網などに利用されていました。標高が高く冷涼な気候のため、栽培できる作物が限られ農業生産は当時から苦労が多かったようです。

■鉱山の歴史

鈴蘭近くには武田信玄が鉄砲の玉向けの鉛の採掘を始めたとされる大樋銀山跡があり、鉛や亜鉛だけでなく銀の産出もありました。昭和の時代になっても戦中頃まで採掘が度々行われてきましたが、その後は廃鉱となりました。昭和 19 年頃からは、マンガン等の採掘が付近で行われ索道も作られました。また、蛭窪では明治初期から石灰岩を掘削し、焼窯をつくり肥料用の石灰を終戦後も生産していましたが、輸送が大変で長くは続きませんでした。

■居住地としての乗鞍高原

居住地としては乗鞍おろしと呼ばれる乗鞍岳から吹き下ろす冷たい風を避けるため、前川に下る斜面沿いの大野川や中平に集落が作られてきました。高原部には冬季以外に利用する出作り小屋があるのみでしたが、明治後半になると番所への冬季の居住が試みられ、大正時代から高原部への移転が盛んになりました。観光が盛んになると、元々の集落であった大野川や中平の居住は減り、高原部が居住地としても主流となっていきました。

表 2-1 大野川区の各集落の戸数の変遷

集落名		明治20年	大正10年	昭和10年	昭和44年	昭和52年	昭和55年	昭和60年
親村	大野川	64	38	28	16	5	0	0
	中平	40	28	26	11	9	5	9
宮ノ原		0	0	0	31	55	55	32
番所		(10)	23	50	78	80	80	83
檜ノ木坂		0	0	0	12	21	21	32
鈴蘭		0	1	2	33	63	63	70
白骨		5	6	6	13	19	19	15
桧峠		(12)	2 (10)	2 (7)	0	0	0	0
祠峠		10	10	10	0	0	0	0
沢渡		(5)	12	80	54	37	37	36

出典：北アルプス乗鞍物語 p23,昭和 56 年

■スキー場の発展

大正時代に入ると、山岳スキーの場として乗鞍岳は広く知られるようになりました。大正 6 年 1 月、飯山中学に在学していた斎藤正人が一本杖スキーを持ち込んだことから始まり、大正 13 年頃から乗鞍高原でスキーが一般化し始めました。昭和 11 年、第1回乗鞍岳滑降競技大会が開かれるなど、次第にスキー人気が高まり、昭和 12 年、日本の冬季オリンピックに札幌、日光と共に乗鞍高原も誘致に乗り出しましたが、日中戦争が開戦したことでオリンピックが中止となりました。昭和 13 年、オリンピック銀メダリストの猪谷千春が群馬県から乗鞍高原に移住し、いがやスキー場周辺を切り開いてスキーの練習をしていました。

昭和 36 年、乗鞍観光株式会社が乗鞍 A 線リフトを架設し、乗鞍において初となるリフトのあるスキー場が開設されました。昭和 38 年、乗鞍高原国民休暇村が開設され、その後スキー場も徐々に拡張していきました。昭和 63 年 12 月、猪谷千春が練習していた斜面に、いがやスキー場が竣工し、平成 4 年にいがやレクリエーションランドが竣工しました。スキーブームとともに平成 2 年までリフトの新設やゲレンデ拡張が行われました。

■観光施設整備の経緯

スキー以外にも乗鞍高原では様々な観光関連事業が行われてきました。昭和 51 年に開催が始まったマウンテンサイクリングレースは、現在「乗鞍ヒルクライム」として継続し、日本で最も長い歴史をもつヒルクライムレースとなっています。

昭和 55 年、県民広場事業として自然保護センターと乗鞍レクリエーションセンター（体育館）が開館し、昭和 59 年にサイクリングロードが完成しました。昭和 61 年 12 月、本計画の建替対象となっている観光センターが竣工しました。昭和 63 年、乗鞍高原リゾート開発計画の構想がありましたが、平成 2 年に計画実行が断念された経過があります。

■温泉

昭和 51 年 11 月、乗鞍高原温泉引湯工事が竣工し、併せて翌年銀山荘が改装されるなどして、乗鞍高原は温泉地となりました。平成 2 年湯けむり館開業、平成 8 年鈴蘭の温泉掘削など、温泉地としての整備が進みました。また、平成 25 年 4 月に湯けむり館は現在の場所に移転されました。

■道路の整備

昭和 15 年 大野川・金山間の道路開通

昭和 17 年 畳平に陸軍乗鞍航空実験所が開設。岐阜県の平湯峠・畳平間の道路開通

昭和 26 年 鈴蘭まで定期バス運行開始

昭和 33 年 三本滝・畳平間の道路建設工事が起工

昭和 38 年 三本滝・畳平間開通(現在の乗鞍エコーライン)

昭和 39 年 三本滝・畳平間、バスの運行開始

昭和 47 年 林道安曇奈川線(上高地乗鞍スーパー林道)が有料道路として開通

昭和 48 年 平湯峠・畳平間の道路を乗鞍スカイラインとして整備

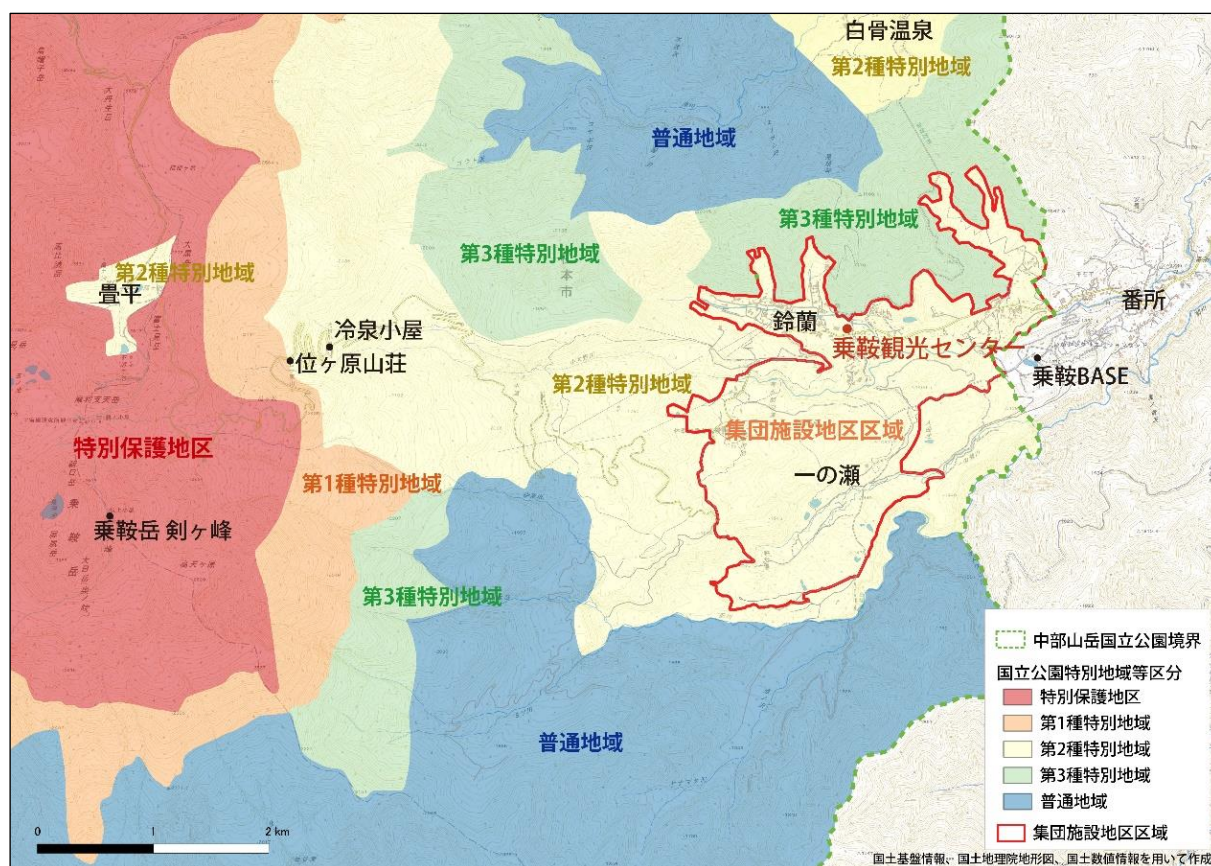
平成 15 年 乗鞍スカイライン、乗鞍エコーラインのマイカー規制開始。現在まで継続中

平成 20 年 林道奈川安曇線、無料化

2.1.6. 乗鞍高原における中部山岳国立公園の範囲

乗鞍高原は、中部山岳国立公園の最南部に位置し、いがやレクリエーションランド(乗鞍 BASE)周辺より西側が国立公園に指定されています。鈴蘭周辺や一の瀬などは、第2種特別地域に指定され、集団施設地区に設定されています。

図 2-12 中部山岳国立公園及び特別地域等の指定状況



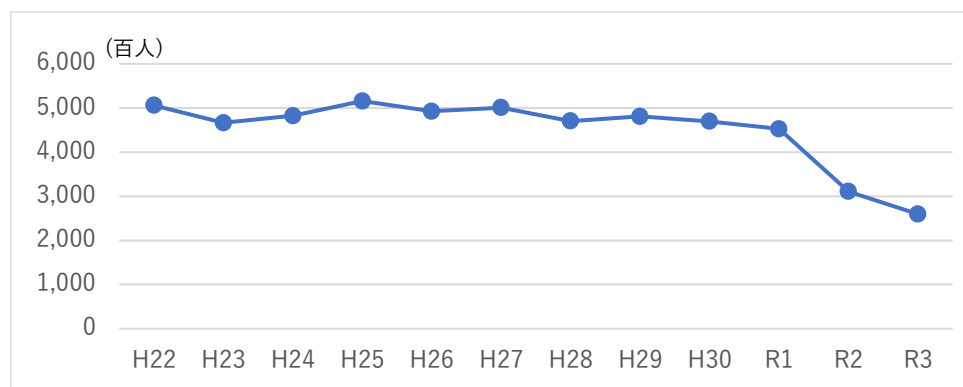
国土基盤情報、国土地理院地形図、国土数値情報を用いて作成

2.1.7. 地域の現状(観光／人口減少／産業等)

■乗鞍高原の観光客数

図 2-13 は乗鞍高原の年間観光客数の推移を示したものです。平成 22 年から令和元年までほぼ横ばいで推移していますが、令和 2 年以降は急激に減少しています。これは新型コロナウイルス感染症の流行が原因と推測できます。

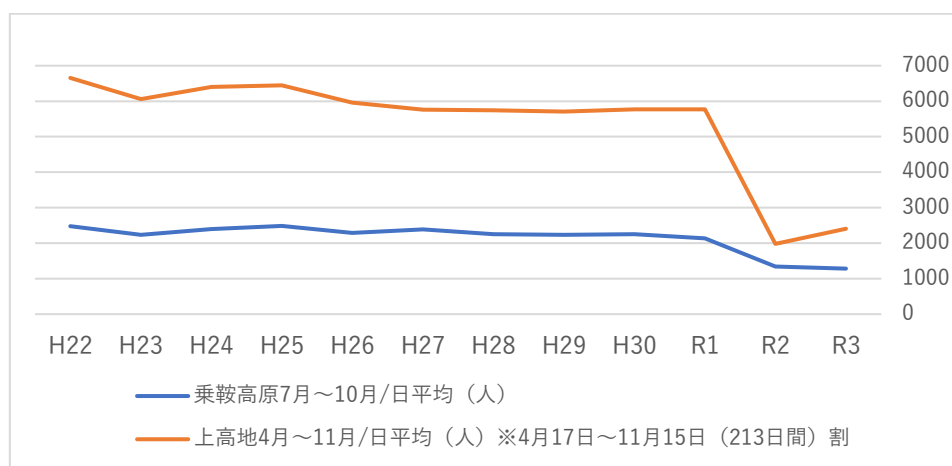
図 2-13 乗鞍高原の年間観光客数の推移



データ出典:長野県観光地利用者統計を基に作成

また、図 2-14 は上高地開山時期(4 月～11 月)と乗鞍エコーライン開通時期(7 月～10 月)の日平均観光客数を示したものです。上高地、乗鞍高原ともに令和 2 年以降、観光客数が減少していますが、上高地と比較して乗鞍高原の減少幅は小さくなっています。

図 2-14 上高地開山時期・乗鞍エコーライン開通時利用客数(日平均・人)

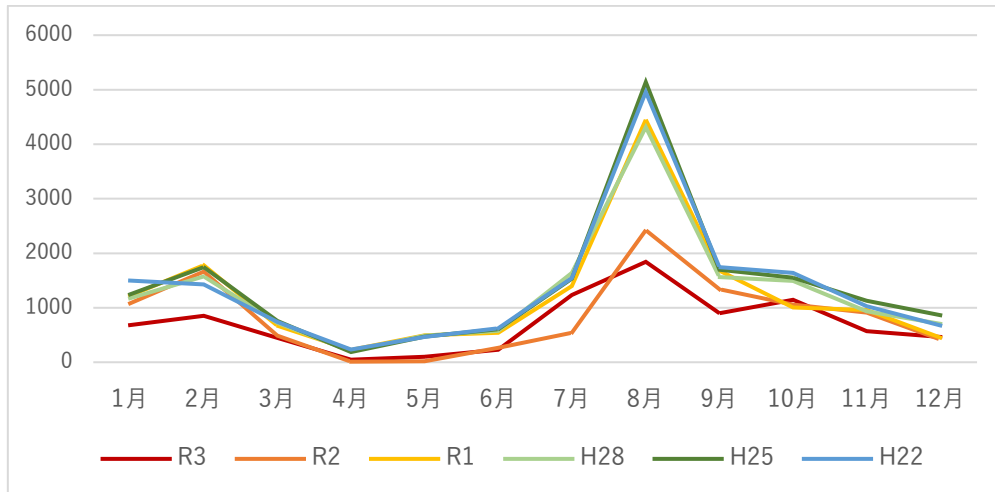


データ出典:長野県観光地利用者統計を基に作成

■乗鞍高原と周辺観光地における観光客数季節変動の比較

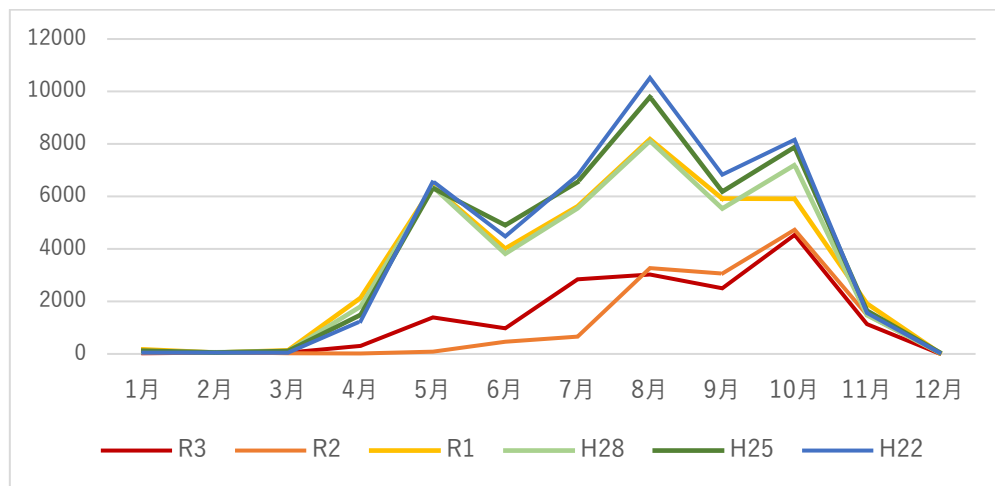
図 2-15～17 は乗鞍高原、上高地、白骨温泉の月別日平均観光客数を示しています。上高地や白骨温泉は季節の変動が小さいのに対し、乗鞍高原は夏から秋にかけて突出して多く、年間の偏りが著しいことがわかります。乗鞍高原においても通年利用されるような対策が求められます。

図 2-15 乗鞍高原 月別日平均観光客数



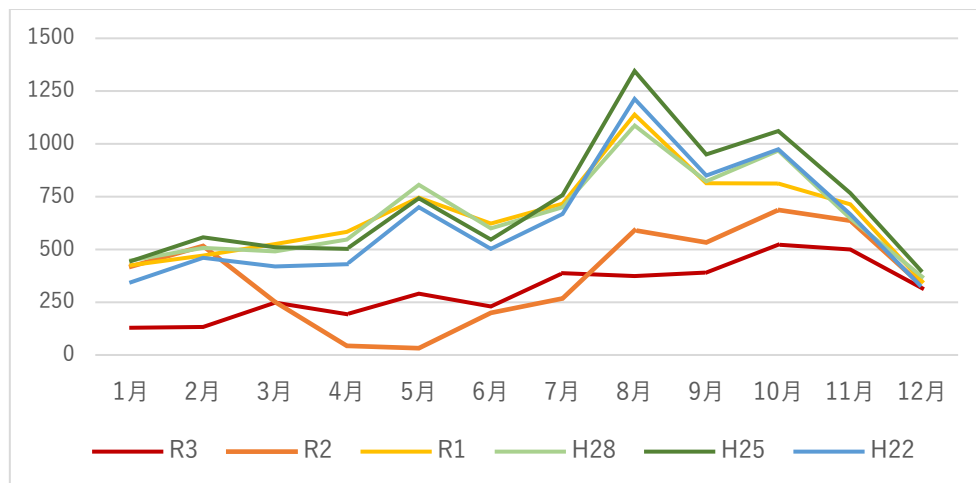
データ出典:長野県観光地利用者統計を基に作成

図 2-16 上高地 月別日平均観光客数



データ出典:長野県観光地利用者統計を基に作成

図 2-17 白骨温泉 月別日平均観光客数



データ出典:長野県観光地利用者統計を基に作成

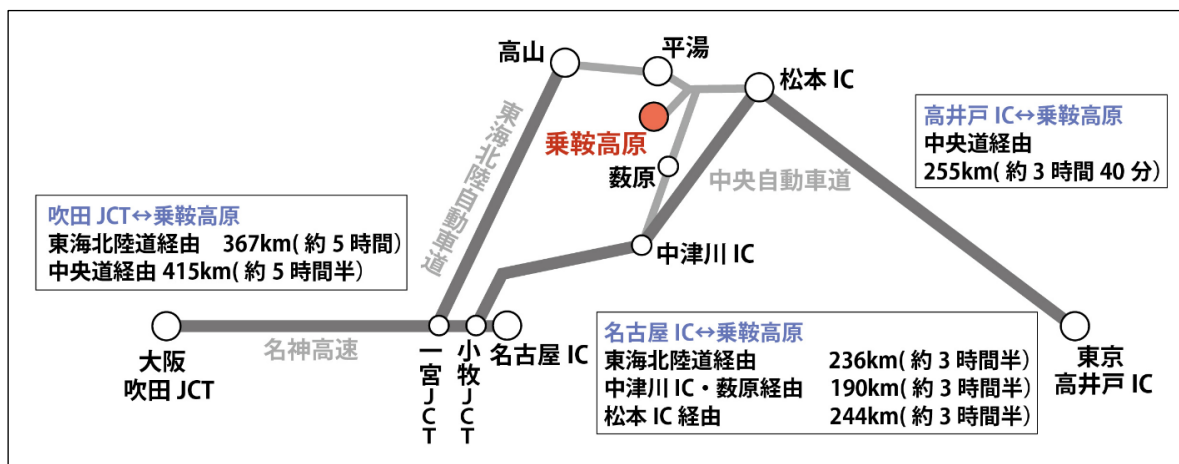
2.1.8. 中部縦貫自動車道等高速交通網の構築によるアクセス環境の変化

■大都市圏から乗鞍高原へアクセスする主要道路の現況

現在の広域道路網における、三大都市圏周辺からの距離と所要時間は下記図 2-18 のとおりです。

中部縦貫自動車道や狹隘区間の多い国道 158 号の奈川渡改良等の整備が進むことで、各地からのアクセスの向上が期待されます。

図 2-18 乗鞍高原までの現在の距離及び所用時間(自動車)



■乗鞍高原へのアクセス道路の整備状況

松本波田道路は、仮称・松本 JCT—仮称・波田 IC 間の延長 5.3km で事業が進められています。県道波田北大妻豊科線の改良工事を進められ長野自動車道と乗鞍高原のアクセス向上が期待されます。

国道 158 号においては、小雪薙トンネル、ずみの窪トンネル、入山トンネルは幅が狭いため渋滞発生箇所となっています。これを解消するため、現在、奈川渡改良(全長 2.2km)事業が進められています。また、狸平トンネルが掘削中であり、令和 7 年 1 月の完成を目指して工事が進められています。

図 2-19 国道 158 号の改良事業



2.2. 現状把握に基づく課題

前述までの現状把握に基づいてまとめた主な課題は以下のとおりです。

《暮らし》

- ・人口減少の緩和、若い世代の居住と活躍を促す仕事や雇用の創出と確保

《自然や地域の歴史を活かし、四季を通じた魅力の創出による誘客》

- ・四季を通じた誘客力の向上、特に 4 月から 6 月までの落ち込みの激しい時期における魅力の創出
- ・乗鞍火山を代表とする地質や地形を楽しむ仕掛け作り
- ・乗鞍高原の歴史を分かりやすく伝える工夫
- ・乗鞍岳の眺望や乗鞍高原の美しさを磨く景観形成

《自然保護・環境保全》

- ・夏や冬の高温化等、不安定化する気候変化への対応
- ・動植物の生息状況や変化の把握と自然保全の取組みの拡充
- ・自然保全・環境維持に係る維持費の確保
- ・乗鞍高原の特徴的な動植物の情報発信や、動植物の生息状況が理解できる工夫

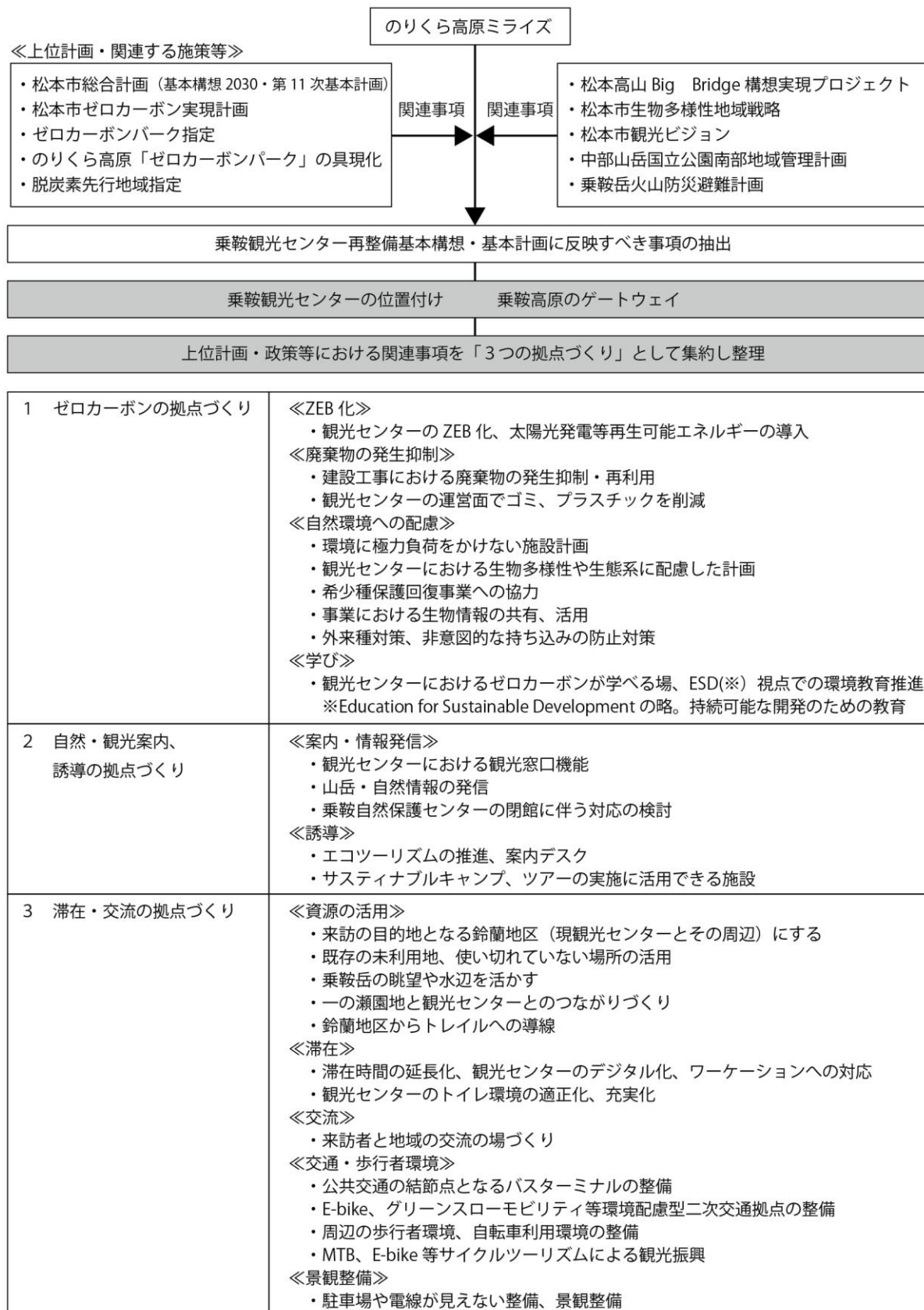
《高速交通網の時代に対応したアクセス向上》

- ・道路整備による乗鞍高原へのアクセス向上のチャンスの活用

3. 上位の政策・計画等の整理

本基本構想・基本計画では、「のりくら高原ミライズ」、その他の上位計画・政策から複数の関連事項を抽出し、「3つの拠点づくり」として、図 3-1 のとおり整理しました。

図 3-1 上位計画・政策等の整理



「のりくら高原ミライズ」からの反映事項は以下のとおりであり、その他の上位計画・政策からの関連事項の抽出結果は資料編に付しています。

■のりくら高原ミライズ

のりくら高原ミライズ構想協議会 令和3年3月22日策定

乗鞍高原地域における自然環境、暮らし、観光の危機的な状況(※)の中で、乗鞍高原の理想像(ビジョン)やその達成に向けた基本戦略等についてまとめ、乗鞍高原関係者一同が協働で地域づくりをしていくための指針として活用するものです。松本市乗鞍観光センター再整備基本構想・基本計画の直接的な上位階層にあるビジョンです。

※乗鞍高原の3つの危機

- 1 地球環境問題の影響又は社会の変化等により豊かな自然環境が失われる危機
- 2 少子高齢化、人口減少等により、安心・安全な暮らしが失われゆく危機
- 3 豊かな自然観光資源を活かしきれず、山岳観光地として持続できなくなる危機

のりくら高原ミライズ	松本市乗鞍観光センター再整備 基本構想・基本計画の課題
【目指すビジョン】 「環境・暮らし・観光」の3要素を基盤とし、それぞれが相互作用しながら持続可能な地域社会を形成 【重点取組事項】 1 乗鞍高原からはじまる地球環境問題解決への挑戦 ・利用拠点施設の完全ゼロカーボン化の推進 ・利用拠点施設の脱プラ化推進 2 人と自然がつながる賑わいのある地域づくりへの挑戦 ・乗鞍高原のゲートウェイとして鈴蘭地区(観光センター及び自然保護センター周辺)の滞在空間の上質化に挑戦 ①のりくら高原地域の観光の窓口(最初に訪れる場所)として必要な機能 ◎観光と暮らしの情報発信 ◎地域内二次交通の拠点 ②観光と生活の交流拠点・賑わいの場として必要な機能 ◎飲食店・直売所・商業施設・ATM ◎住民と観光客のふれあいの場 ③その他意匠等 ◎鈴蘭地区から乗鞍岳を展望できる施設 ◎駐車場や電線が見えない整備 ・自然、文化、歴史などの乗鞍らしさを今後も伝承できる空間として、一の瀬地区の上質化に挑戦	・完全ゼロカーボン化の推進 ・運営面における脱プラ化推進 ・本基本構想・基本計画においても、鈴蘭地区を乗鞍高原のゲートウェイと位置付けます。 ・鈴蘭地区の滞在空間の上質化の検討 ・観光の案内窓口機能 ・来訪者と地域の交流拠点となる機能 ・乗鞍岳の眺望の活用 ・駐車場や電線が見えない整備の推進 ・一の瀬園地と観光センターとのつながりづくり

3 移動の障壁を取り払う環境配慮型二次交通システム構築への挑戦

- ・E-bike、グリーンスローモビリティ等環境配慮型二次交通システムの導入検討

4 乗鞍岳を象徴とした世界に誇れる高原景観形成への挑戦

- ・各眺望スポットでの景観再生に必要な整備

5 四季を通じて人が絶えないトレイルづくりの挑戦

- ・鈴蘭地区からトレイルへの導線確保
- ・MTB、E-bike 等サイクルツーリズムによる観光振興
- ・拠点トイレ、トイレ環境の適正化

6 ワークーションの推進により新たな利用価値の創出に挑戦

- ・各利用拠点到ワークスペースの設置を検討

7 乗鞍高原の魅力を最大限に表現するプロモーションへの挑戦

- ・E-bike、グリーンスローモビリティ等環境配慮型二次交通システムの導入

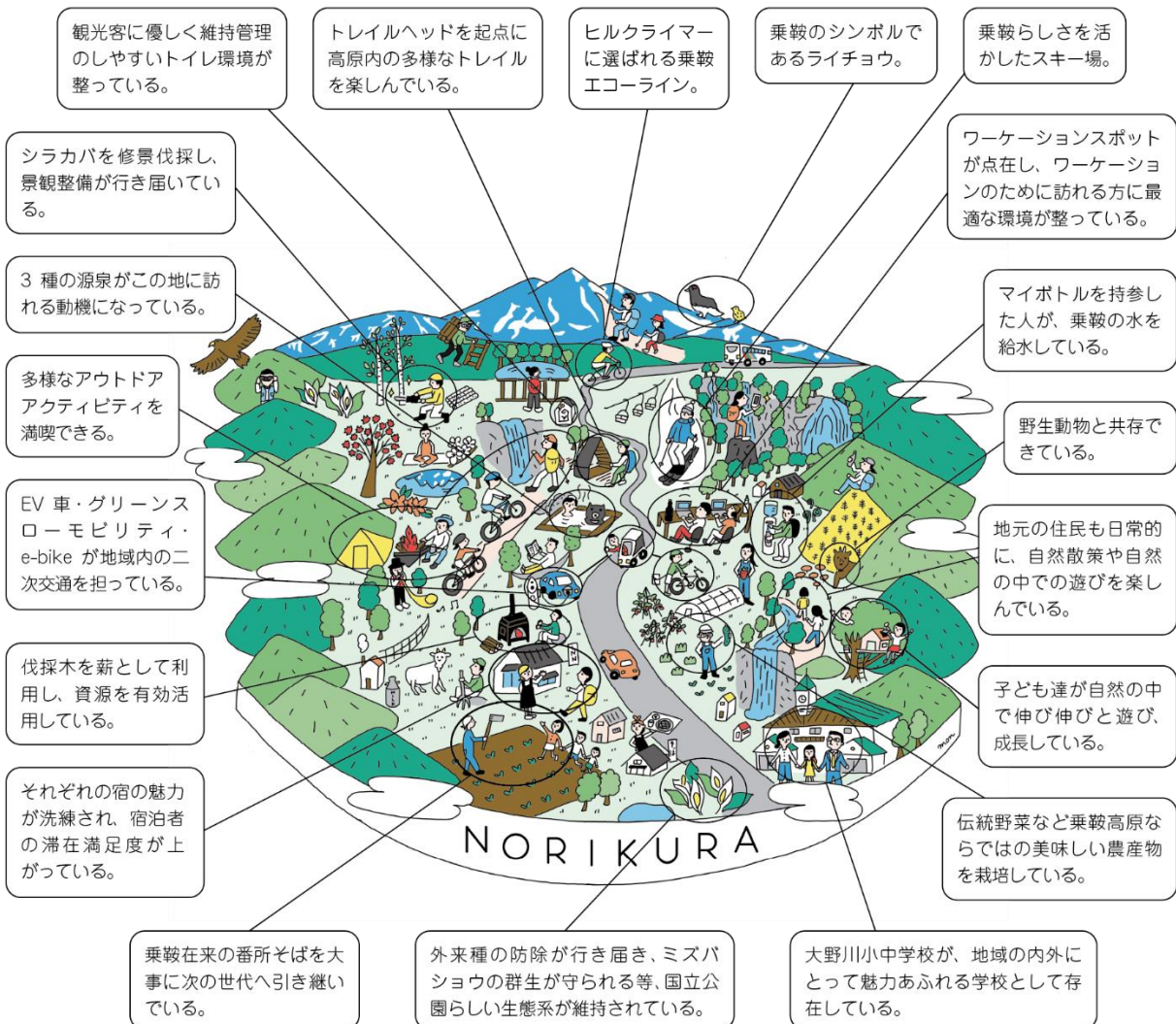
- ・眺望スポットの創出、景観再生に必要な整備

- ・鈴蘭地区からトレイルへの導線
- ・MTB、E-bike 等サイクルツーリズムによる観光振興

- ・拠点トイレ、トイレ環境の適正化

- ・ワークスペースの設置

のりくら高原ミライズのビジョンイラスト



4. 鈴蘭地区(観光センター及びその周辺)の現況と課題

4.1. 鈴蘭地区の特色

4.1.1. 鈴蘭地区開拓・開発の歴史

鈴蘭地区(観光センター及びその周辺を以下「鈴蘭地区」とします。)の開拓・開発の歴史及び昭和 40 年代以降の行政の総合計画等において目指していた開発ビジョンについて概要を整理します。

■鈴蘭地区の開拓・開発の歴史

江戸時代、大樋銀山の採掘が盛んな頃は、鈴蘭地区に多くの人が暮らしていたとされます。銀山の採掘が下火になった後は、仙人や農業など春から秋の季節的利用と出作り小屋だけで、居住の場としては明治後期以降までは冬期の居住地となる人家がありませんでした。鈴蘭地区の戸数は明治 20 年に 0 戸、大正 10 年に 1 戸との記録があります。大正期以降、乗鞍高原でもスキーが行われるようになり登山人口も増え、大野川や中平といった集落から高原部への移転も盛んとなり、昭和 15 年には大野川から金山まで道路も開通しました。鈴蘭地区では昭和 30 年代半ば頃までは鈴蘭小屋と出作り小屋がいくつかあった程度でしたが、昭和 36 年にスキー場のリフトが開設された後は観光地化が進み、昭和 45 年にはシャレー乗鞍、昭和 48 年には銀山荘が開業するなどその他多くの宿泊施設が開業しました。

また、昭和 47 年の上高地乗鞍スーパー林道開通、昭和 51 年の温泉の引湯、昭和 55 年の自然保護センター開館、昭和 61 年の観光センター開館、平成 2 年の旧湯けむり館開業(旧湯けむり館は平成 25 年に現湯けむり館に移転)など、宿泊施設、観光施設が多数立地し乗鞍高原の中核的な存在となりました。さらに、東京大学宇宙船観測連絡所、信州大学乗鞍寮など大学関係の施設も設置され、学生や研究者も頻繁に滞在し大学とも関連の深い地区となりました。

日本のスキー人口は、平成 5 年にはピークに達し、平成 10 年の長野オリンピック開催を過ぎると減少を続け、その影響から近年は宿泊施設の休業や閉館も多くなっています。一方、昭和 51 年には乗鞍高原サイクリングフェスティバルが始まり、現在は乗鞍ヒルクライムとして日本で最も長い歴史を持つ代表的な山岳レースに成長するなど、乗鞍高原は山岳サイクリングのメッカとなっており、鈴蘭地区はその拠点となってきました。

平成 15 年に乗鞍エコーライン、乗鞍スカイラインのマイカー規制が始まると、観光センターは畳平行きのバスの乗り換え拠点となり現在に至っています。

また、鈴蘭地区周辺では、蕎麦の栽培が行われていましたが、観光業が盛んになると次第に減少し、最近はサルによる食害が増えたことから、栽培はほとんど見られなくなりました。

昭和 21 年頃の写真



昭和 29 年頃鈴蘭周辺



出典：自然保護センター展示

■過去の行政の計画等における乗鞍高原のビジョン

昭和 35 年の国民所得倍増計画に伴う余暇の利用促進と観光ブームの到来により、乗鞍高原開発が本格化しました。昭和 38 年の乗鞍高原夏季学生村の開設、乗鞍岳への道路開通、国民休暇村のオープン、ダム completion が観光立村への飛躍点となりました。(※)

昭和 44 年の地方自治法の改正により、市町村が基本構想を定めることが義務付けられたことから、その後の基本構想を参照することで、乗鞍高原の観光開発はどのようなビジョンのもとに行われてきたのかを知ることができます。その他の資料も含めて入手できたものを中心に概要を整理します。詳細は資料編に付しています。

※『安曇村誌 第三巻 歴史下』p113-114 を参照

参考とした行政の構想・計画等

- ・長期振興計画(昭和 47 年 1 月) 安曇村
- ・第 3 次安曇村総合計画 (平成 2 年 3 月) 安曇村
- ・第 4 次安曇村総合計画 (平成 12 年 3 月) 安曇村
- ・平成 13 年度乗鞍高原集団施設地区再整備基本計画(平成 12 年 3 月) 環境省中部地区自然保護事務所
- ・平成18年度乗鞍地域まちづくり基本計画 (平成 19 年 3 月) 松本市

年表

1970 年代

- ・過疎化の中で観光産業を育成するため、県道乗鞍岳線等の道路交通網整備、大型スキー場や温泉開発等の観光開発を推進

1990 年代

- ・高速交通網、社会の多様化の中で滞在型を目指すリゾート開発指向とスキー場開発
- ・乗鞍リゾート開発と乗鞍ロープウェイは構想のみ
- ・猪谷スキー場周辺をいがやレクリエーションランドとして整備

2000 年代

- ・観光客の減少、マイカー規制の中で、エコツーリズムの導入や新たな観光施設の検討

大きな流れとしては、スキー場、温泉等、他地域に競合が多い分野から、乗鞍高原にしかない体験型、エコツーリズム型の重視にシフトしたことが分かります。

4.1.2. 乗鞍高原の主要施設及び地域資源

■地域の主要施設

鈴蘭地区は、乗鞍高原の中でも比較的なだらかな土地が広がっており、宿泊施設の多くはこの付近にあります。また、白骨温泉や奈川への交通の要衝となっています。

鈴蘭地区の周辺には、乗鞍岳頂上、三本滝、一の瀬及び周辺の散策路、善五郎の滝、いがやレクリエーションランド(乗鞍 BASE)、番所大滝等の観光目的地がありますが、乗鞍高原が緩やかな斜面となっていること、各目的地間が離れていることから、バスや自動車が主な移動手段となっています。

図 4-1 乗鞍高原の主要施設等



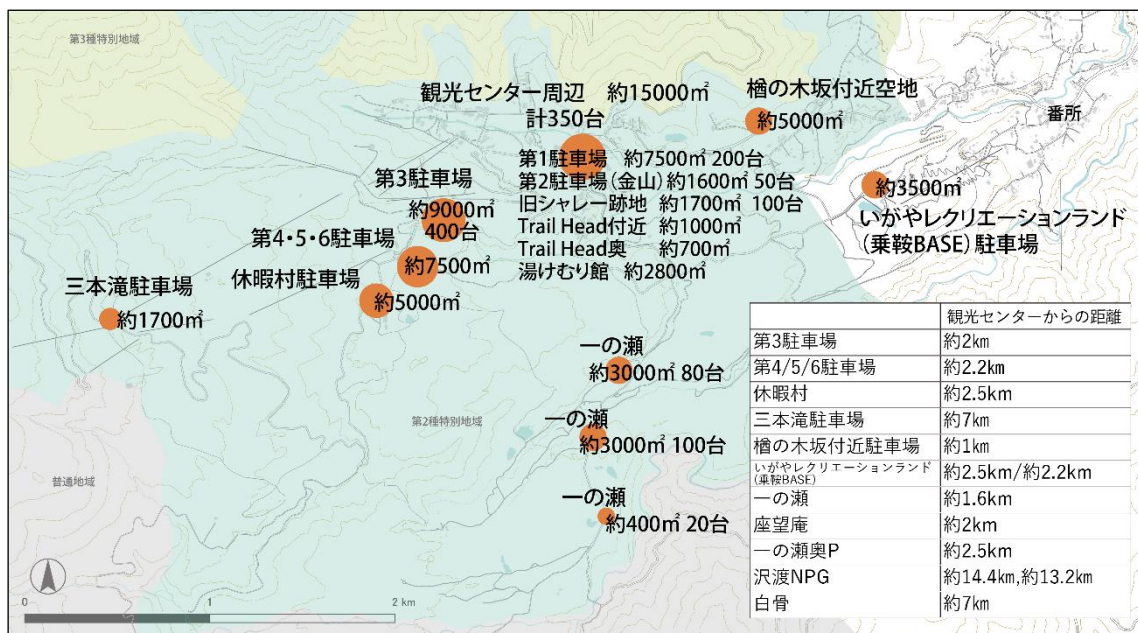
表 4-1 観光センターからの距離と標高差

地点	標高(m)	乗鞍観光センターとの距離(km)	標高差(m)
中平県道急カーブ付近	1,165	5.4	291
梓水神社入口	1,188	4.7	268
ふれあいパーク乗鞍	1,217	4	239
番所大滝駐車場	1,261	3.5	195
体育館	1,325	2	131
乗鞍BASE	1,376	2.3/2.6※県道経由	80
一の瀬	1,440	1.7	16
座望庵	1,446	2	10
観光センター	1,456	0	0
スキー場入口	1,475	0.6	19
善五郎の滝駐車場	1,513	1.2	57
休暇村	1,594	2.6	138
東大ヒュッテ口	1,645	3.7	189
三本滝駐車場	1,806	6.9	350

■駐車場

鈴蘭地区は、乗鞍高原の利用拠点として駐車場が多く配置されています。しかし、駐車場が目立つ場所に配置されているため、訪れた方々から無機質な駐車場エリアとしてのイメージを持たれてしまいます。鈴蘭地区には乗鞍岳の素晴らしい眺望があり、それを活かすため、駐車場を分散配置すること、眺望を楽しむ場からは駐車場、道路を見えないようにする工夫が求められます。

図 4-2 駐車場の立地



第1駐車場



シャレー跡地臨時駐車場



第3駐車場



第7駐車場(休暇村駐車場)



4.1.3. 乗鞍高原の体験価値等地域資源の特性・分布

■四季を通じた多様なアクティビティ

乗鞍高原には季節に応じた様々なアクティビティがあり、多様な過ごし方を提供できます。グリーンシーズンのアクティビティとしては、山頂方面でのトレッキング、一の瀬周辺の散策のほか、いがやレクリエーションランド(乗鞍 BASE)で様々な体験ができます。また、鈴蘭地区からの遊歩道を整備することで、自然を観察、散策しながら観光目的地に移動することができるようになります。

図 4-3 分布図

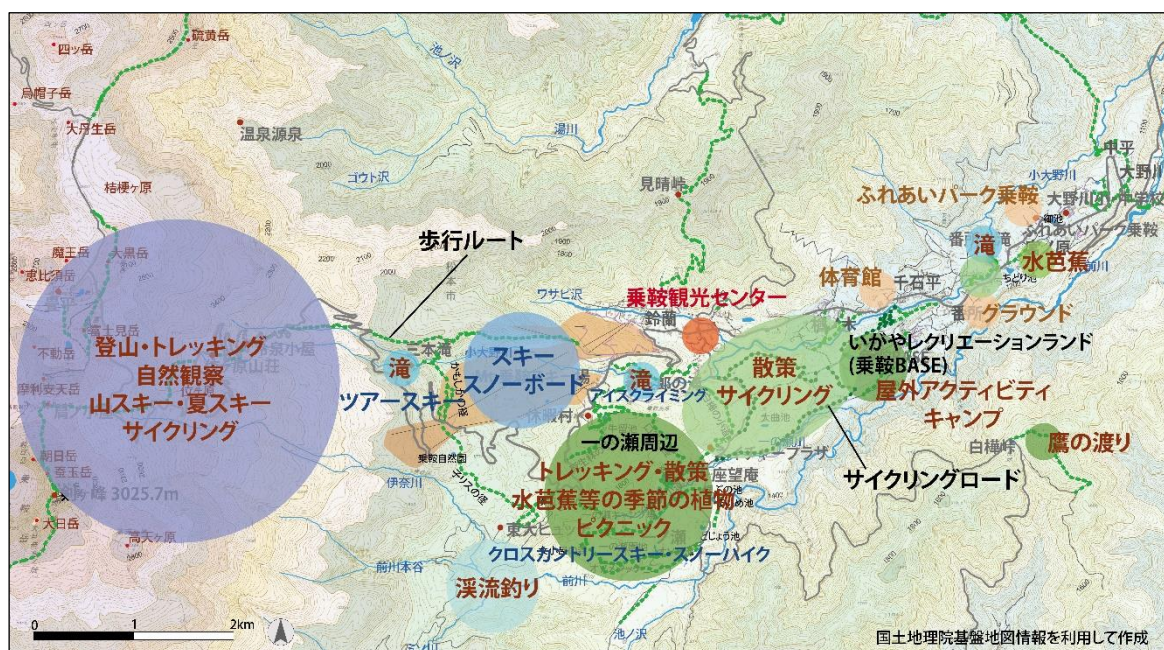


表 4-2 季節ごとの主なアクティビティ一覧

		1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
山頂方面	春山バス																																				
	山頂バス																																				
	エコラインサイクリング																																				
	ツアースキー																																				
	登山 (グリーンシーズン)																																				
	高山植物 (花)																																				
	紅葉																																				
	クロスカントリースキー																																				
乗鞍高原	スノーハイク																																				
	ハイキング・トレッキング																																				
	サイクリング																																				
	シャワークライミング																																				
	温泉																																				
	乗鞍BASE																																				
	キャンプ																																				
	新緑																																				
	水芭蕉																																				
	レンゲツツジ																																				
	山野草 (花)																																				
	紅葉																																				
	溪流釣り																																				
	クビワコウモリ生息																																				

4.2. 既存施設の現状と課題

4.2.1. 観光センターの現状と課題

観光センターの現状を調査し、課題と次に活かすべき事項を整理します。

図 4-4 乗鞍観光センター周辺の施設立地状況



施設の現状

目的: 地域住民の生活文化の向上と観光事業の振興

業務: 観光案内、飲食(食堂、カフェ)、お土産の販売、会議室の貸出

竣工: 昭和 61 年 (1986 年) [築 36 年] 鉄筋コンクリート造 2 階建て地下 1 階 約 1540 m²

用途: 観光案内所、売店、飲食店、食材工房、貸会議室、貸ホール、貸事務所、消防積載車置場

利用者: 平成 30 年度 (2018 年度) 25,936 人、令和元年度 (2019 年度) 29,260 人、
令和 2 年度 (2020 年度) 13,042 人 (コロナ禍)

GW 後、シャトルバスの運行が始まる 7 月までは閑散期です。

管理状況: 指定管理方式

- ・食堂(直営事業) 27 席 5 月～10 月末まで営業(9:30-16:00)、1,500～1,800 人/月利用
- ・土産販売(自主事業)
- ・レンタル e バイク(アプリで予約) 10 台(格納は 1F 小会議室で対応)
- ・カフェ

老朽化: [建築] 2 階を平成 16 年に内装改修。屋根材の腐食、屋外デッキの劣化

[設備] 平成 7 年にトイレの改修。詰まりがあったり水の流れが悪い状況

段差等: エレベーター無し、ユニバーサルデザイン非対応

お客様の声: 「古い」「観光センターなのに観光案内ができていない」「どこに行ってもいいかわからない」
「建物として分かりにくい」「デッキに屋根が欲しい」など。

その他: 風が強いのでパラソルの設置は無理、現状施設のメインシーズンは 7～10 月

■眺望や景観

県道側から観光センターを見ると建物が背を向けていて圧迫感があります。また背景の乗鞍岳や豊かな緑を隠しています。乗鞍に訪れた第一印象をより良いものとするなら、施設の再配置が必要です。

デッキで休憩する際、屋根がなく、さらに駐車場のアスファルトからの照返しがあるので、居心地を良くする必要があります。

県道側からの景色



屋根のない休憩所



■分かりやすい建物

仕切りや柱が多いため施設内外の見通しが悪くなっています。どこに何があるか施設全体を見渡せるような工夫が必要です。

開口部(窓、出入口)が小さい



出入口の隅にある観光案内所



玄関から離れたバスチケット窓口



見えにくいバスチケット窓口



■眺望

緩やかに傾斜している地形のため、乗鞍岳の眺望に適した場所ですが、高木や人工物により視界が遮られています。居心地を良くするため、眺望を確保する必要があります。

正面の高木が眺望を遮っている様子



バスが眺望を遮っている様子



図 4-5 地形と観光センターからの乗鞍岳眺望



グーグルを利用して作成

■屋外デッキ

屋根がないため、日差しの強い日には暑くてゆっくりできない、雨天時には使えないという問題があります。また、大雨が降ると駐車場から観光センターに水が集まり池のようなになるため、雨水処理の改善が必要です。

雨天時の様子



日除けの傘を差しながら休憩する様子



大雨の様子①



大雨の様子②



■自転車利用

乗鞍岳へ登るサイクリストの多くは、観光センターを発着場所としています。しかし、駐輪場所が 10 台程度と少ないことや更衣室がないため車の中で着替えるなど不便さを感じています。

スタンド式の自転車置き場



建物に立て掛けている自転車



■ヒルクライム大会

観光センターの駐車場はヒルクライム大会の受付、待機、出走の場所となっているため、多人数が集中することへの対応が必要となります。

大会当日の選手集合の様子



競技終了後戻って計測結果待ちや休憩



受付をしてスタート地点に移動



会場にはメカサポートや売店のテント



■売店・飲食

現状の用途は売店、食堂、カフェが主となっています。利用者の多くは、バスの待合時間に利用しています。

バスの降車口から入るとすぐにある売店



カフェは中と外デッキにテーブル席がある



■1階貸会議室

レンタル e バイク置き場、貸会議室になっています。あまり観光客の利用には使われていません。

レンタル e バイク置き場



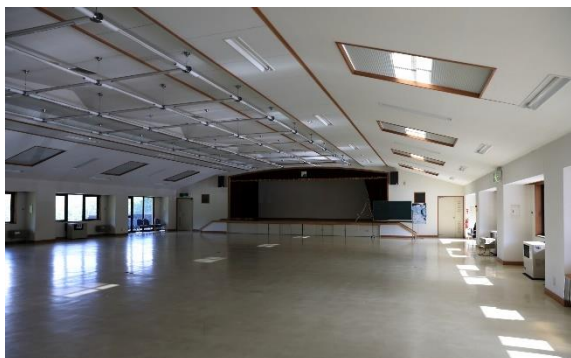
和室の貸会議室



■2階貸ホール

多目的ホールは地域の会合や修学旅行等に使われていますが、使用頻度は年 10 回程度と多くはありません。

2 階多目的ホール



2階からの様子



■トイレ

平成 7 年に改修され、1階が男子(小 4、大 2)・女子(2)、2階が男子(小 4、大 2)・女子(3)です。外部トイレは鈴蘭公衆トイレとして平成 7 年に整備されました。

通年で 24 時間使える鈴蘭公衆トイレ



■冬季の利用

現在の観光センターはシャトルバスが終了する 11 月から 3 月までの冬季はほぼ閉館しています。

冬季の様子



■バス乗り場

バス乗り場は観光センターから離れた位置にあり、ハイシーズンには屋根がない場所まで列になるなど快適な待合所になっていません。また、交通動線と歩行者動線が分離されていないため歩行者の安全性も不十分です。

観光センターと離れている待合所



バス乗降の状況



図 4-6 バスターミナル乗降場所とバス動線の現況



■観光センターと駐車場の課題のまとめ

観光センターと駐車場の課題	
分かりやすさ	・利用者にとって分かりやすい建物づくり
快適なバス乗り場	・分かりやすく、安全に利用でき、快適な待合のあるバスターミナル
眺望や景観の創出	・乗鞍岳が正面に見える出会いの場としての眺望・景観対策 ・乗鞍岳の眺望を取り入れた計画
居場所づくり	・車中心の場から人の居場所がある場への転換 ・ゆっくり過ごせる飲食サービスの場づくり ・雨の日に過ごせる場所づくり ・修学旅行等大人数でも使える施設
自転車利用への配慮	・自転車通路、濡れない自転車置き場、着替え等自転車利用者への配慮 ・ヒルクライム大会に対応できる計画 ・e バイク等レンタルへの対応
地域の活力を活かす	・調理工房等地域の方々が取り組める場の確保
質の高いトイレ整備	・ナショナルパークのゲートにふさわしい質の高いトイレ整備
冬季利用への対応	・冬季にも利用者を増やしていける施設
雨水排水への配慮	・大雨の時に雨水排水ができる配慮

4.2.2.周辺施設の状況

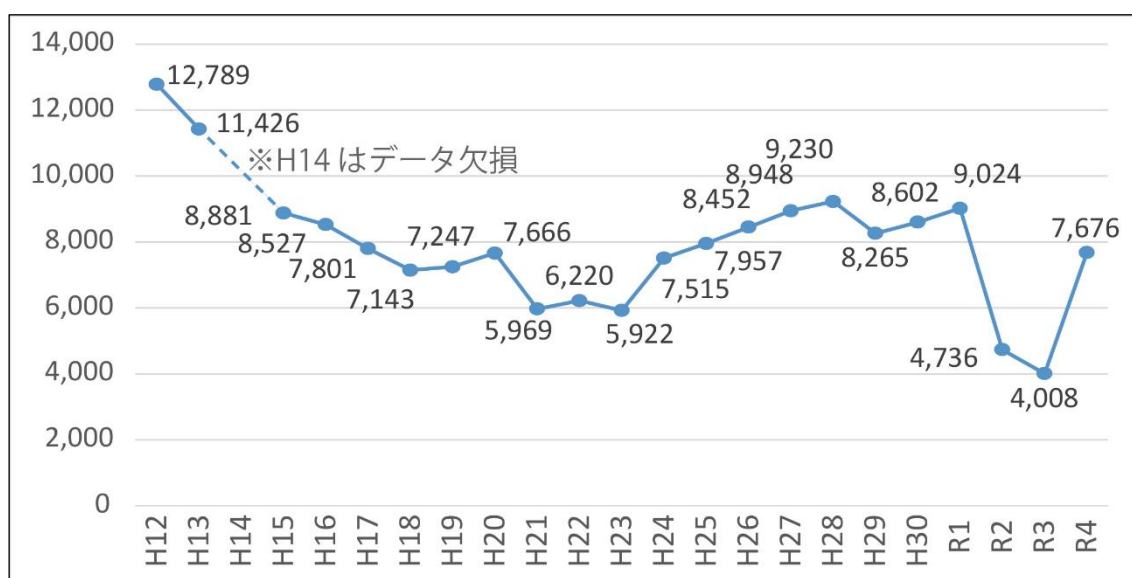
■自然保護センター

昭和 55 年 6 月に開館した自然保護センターは、開館時期を4月中旬～11月中旬（祝日を除く水曜日は休館）とし、乗鞍高原の自然保護や自然や歴史を伝える展示や活動を行っています。また、周辺の植生管理、自然教室や木工ワークショップ等の体験型コンテンツも提供するなど乗鞍高原の自然や歴史の魅力を伝えるビジターセンター的機能を担っていますが、建物の老朽化等の問題もあります。

また、北隣にはバットハウスが 1996 年、こうもりの会により設置され、少数ながらクビワコウモリの住处として利用されています。

来館者数は、平成 24 年頃まで減少していましたが、令和元年までは徐々に増加傾向にありました。令和 5 年 1 月 12 日の本計画策定のための意見交換会において、長野県自然保護課から自然保護センターを終了する方針が説明されました。

図 4-7 自然保護センターの来館者数変遷



自然保護センター



自然保護センターの周囲



展示室



バットハウス



■スキー場

標高差が約 500mあり、休暇村グレンデ等を合わせると 20 を超えるコースと、8 機のリフトが設置され、標高も高く雪質にも恵まれたスキー場となっています。スキー人口が減少し、シーズン中に運休するリフトもあります。

チケットセンター



スキー場と乗鞍岳



■湯けむり館

乗鞍高原温泉を引き湯し、屋内風呂、露天風呂、飲食施設が備わっています。足湯スペースも屋外に設けられていますが、配管の傷みにより現在は利用できなくなっています。

改築前の湯けむり館は、露天風呂から乗鞍岳が綺麗に望めたという評価がありましたが、現在の湯けむり館は立地する場所の標高や位置により乗鞍岳の稜線の見える範囲が狭くなっています。将来、湯けむり館を改築する場合には乗鞍岳の眺望も考慮してほしいとの声もきかれます。

湯けむり館



湯けむり館の足湯



■銀山公園

かつて近くにあった大樋鉱山にちなんで名称が付けられた公園です。利用は少ないですが、乗鞍岳が見渡せる立地であり、活用方法を検討する必要があります。

銀山公園



銀山公園からの乗鞍岳



■トレイルヘッド・電気自動車充電施設

観光センター南側の駐車場には、トレイルヘッドと電気自動車充電施設が設置されています。トレイルヘッドは一の瀬方面への散策の起点となる場所であり、散策の案内と地元の方々と製作されたゲートが設定されています。駐車場に囲まれた場所であるため、観光センターの建替えに合わせ、より乗鞍高原散策の魅力を伝えられるような周辺景観にも配慮したトレイルヘッドが望まれています。また、本計画においても、電気自動車の利用促進を図るため充電設備の提供を行う必要があります。

充電施設



トレイルヘッド



■散策ルート

歩行ルートとしては、ワサビ沢沿い、トレイルヘッドから一の瀬方向、サイクリングロード兼用の歩道、自然保護センター横の散策路がありますが、ネットワーク化されておらず周囲を散策する行動はそれほど見られない状況です。鈴蘭地区としてもそぞろ歩きを楽しめるような散策周遊できる快適な歩行ネットワークの形成が必要です。

一の瀬方向への散策路・自転車道



ワサビ沢の散策道



旧湯けむり館跡地の園地



ノーススター前の整備された園地



■大学関連施設

旧湯けむり館の東側には東大乗鞍観測所鈴蘭連絡所があり、少し離れた所には信州大学の乗鞍ステーションがあるなど、大学関連の施設が近隣に複数存在しています。研究等も行われている場合があり、大学とも可能な場合には連携し、乗鞍高原の魅力や研究成果の発表等を鈴蘭でも伝えていくことが必要です。

東京大学乗鞍観測所鈴蘭連絡所



■周辺施設の課題のまとめ

周辺施設の課題	
自然保護センター	・ビジターセンター的機能を担っていますが、建物の老朽化や展示物の古さが問題です。 ・敷地が湿地的で湿度が高いという問題があります。
乗鞍スキー場	・利用者が減少しシーズン中運休するリフトもあります。
湯けむり館	・泉質の関係で設備の老朽化が進んでいます。 ・旧湯けむり館は乗鞍岳が見えましたが、現在は見えません。 ・将来、改築する場合には眺望考慮の声が多く聞かれます。
銀山公園	・乗鞍岳の眺めが良いですが、利用が少なく活用が望まれます。
トレイルヘッド・電気自動車充電施設	・トレイルヘッドは駐車場が近く景観配慮が望まれます。 ・電気自動車充電施設も景観配慮、数量の充実が求められています。
散策ルート	・散策周遊できる快適な歩行ネットワークの形成が必要です。
大学関連施設	・近隣に複数存在し、大学との連携等の検討も必要です。

4.2.3.環境省令和2年度乗鞍高原再整備基本計画における鈴蘭の施設評価

環境省令和2年度乗鞍高原再整備基本計画策定業務報告書では、アンケートと現地調査を行った上で、鈴蘭の施設についての評価が行われています。

観光センターに対するアンケートでは、観光センターに何があるかわからない、古くて暗い、土産物が少ない、地図がない、問い合わせに対する回答が不明瞭、観光センターのバス停をツアーバスが利用できないといった意見が得られています。

環境省 令和2年度乗鞍高原再整備基本計画における鈴蘭の施設評価

名称	評価		(わかりやすさ・使いやすさ・課題等)
案内所（乗鞍観光センター）	×	改善が必要	老朽化している
休憩所（カフェ・食堂）	×	改善が必要	目の前の駐車場が眺望の質を下げている
案内所（観光案内）	×	改善が必要	メインの駐車場に面しておらず、位置がわかりにくい
トイレ	○	充足している	やや老朽化しているが利用上の問題はない
駐車場	×	改善が必要	駐車ルールは定められていない（一時的に渋滞する）。一般車、バス、タクシーの動線が入り乱れ、安全上の問題がある
案内図標識	×	改善が必要	老朽化、設置位置が悪く、認識しにくい。統一デザインではない
バスターミナル	△	将来的に対策が必要	バスと乗用車が混在し、安全ではない。バス待ちの人が滞留する
自然保護センター	△	将来的に対策が必要	老朽化、展示内容が古い
バットハウス		—	解説がなく、何の施設なのかわかりづらい

環境省令和2年度乗鞍高原再整備基本計画策定業務

4.3. 計画地周辺の特性・課題

4.3.1. ヒアリングによる課題・意見把握

ヒアリングは計画地周辺の課題について概要を把握するため、地域在住の方々約20人に話を聞きました。日々乗鞍高原について感じていること、暮らし、乗鞍高原のアイデンティティや観光、また鈴蘭地区と観光センターの役割や将来像などについて、多く聞かれた意見・要望から課題をまとめました。

■ヒアリングに基く課題のまとめ

課題のキーワード：「自然資源を活かす」、「人が主人公」、「中心・拠点づくり」

1 乗鞍高原の自然を伝え、大切にし、磨くこと。	}	自然資源 を活かす
2 景観づくりに配慮すること。		
3 鈴蘭は人が主人公の場所とすること。	}	人が主人公
4 鈴蘭に乗鞍の中心をつくること。		
5 新たな拠点施設は、多様な機能や役割を担い柔軟に利用できること。 ・案内拠点、交通拠点、交流拠点、アクティビティ・活動拠点など	}	中心・拠点 づくり
6 雨の日に過ごせる場所づくり		
7 拠点施設の適切な運営		
8 ゼロカーボンの推進		
9 いずれ老朽化する湯けむり館の次の改築場所も考えるべき。		

■出された意見・要望・課題

分類	意見・要望・課題
自然を大切にし、磨く	【乗鞍岳を活かす】 ・乗鞍岳はゆったり、穏やかで雄大 ・乗鞍岳が良く見えるようにする ・乗鞍岳は唯一無二 【自然を活かす】 ・乗鞍高原は観光で食べていくしかなく、他の商売は成り立たない。 ・根本にあるのは乗鞍高原の自然 ・ありのままの自然を磨くことが必要 ・乗鞍高原には落ち着ける潜在的なオーラがある。 ・乗鞍高原も新しい時代の中で発展途上、未来に向かっての余白が必要 ・視点場を大切にすることが必要 ・新しい拠点施設は自分が変わるきっかけになるような施設に ・淹めぐりは魅力 【樹林の管理】 ・全体に木が生えすぎている。
一の瀬園地の在り方	【昔の風景が良かった】 ・昔の一の瀬園地の風景は良かった。地元の人に愛されていた。 ・一の瀬園地はみんなの思い出、好きな場所

	【座望庵を活かす】 ・座望庵が使われていない。ゆっくりする場所が欲しい。 【一の瀬園地と観光センターとのつながり】 ・観光センターとグリーンスローモビリティで結ぶと良い。
乗鞍高原の暮らし	【自分の時間が持てる所が良い】 ・乗鞍高原は自分の時間が持てるのが良い。 ・ペンションバブルは忙しくて幸せではなかった。 ・絶景の中で暮らせるのが良い。疲れたらいつでも癒せる。 【子育ての問題】 ・過疎なのに保育園待機問題がある。 【冬の暮らし】 ・冬は寒すぎる。
まちづくりへの思い	【まちの中心をつくる】 ・鈴蘭のメインストリートがなくなり、元気がない。 ・観光センターの場所はこれからの中心地になるようにする。 ・鈴蘭はこれからの観光の中心にする。 ・銀山公園がもったいない。 【乗鞍高原の宿泊施設の多様化を図る】 ・乗鞍高原のネックは宿泊施設がどんぐりの背比べ。高級ホテルから B & B まで選べる必要がある 【移住の受け入れ対応が必要】 ・民家が少なく移住できないので居住区域をつくるべき。
人が主人公の場所に	【景観への配慮】 ・駐車場は見えない所にする。 【歩いて巡る環境づくり】 ・車を置いて歩く。 【ゆっくり過ごせる場・居場所づくり】 ・ゆっくり過ごせる場にする。 ・拠点施設は人がいるべき場所にする。
乗鞍自然保護センターの自然を伝える役割	【乗鞍高原の自然を伝える役割を担っている】 ・自然保護センターのコンテンツは良い。 ・自然保護センターは雨でも過ごせる施設になっている。 ・自然保護センターと観光センターの連携がとれていない。
拠点施設の在り方・機能は多様	【目的・滞在できる施設に】 ・観光センターの場所の、落ち着けて、平たい、開いている、乾いている、空が広い、居心地の良さをうまく活かして作って欲しい。 ・作りこむのではなく、歩いて感じてもらうようにする。 ・乗鞍高原の自然や山遊びを楽しむ、感じる場にする。 ・乗鞍高原の恵みを楽しむ、味わう場にする。 ・今はくつろげる場所がない。 ・カフェやアクティビティを導入して目的地になるようにする。

	・飲食できる場所が欲しい。 ・レストランの機能は必要 ・座れる場所が欲しい。 ・滞在できる施設にする。(ハルニレテラスのように) ・滞在時間を使って、自然、レジャー、温泉、たき火等の情報を提供 ・宿に 15 時にチェックインして、その後外に出かけて過ごせる場所に 【基点・結節点とする】 ・周辺に流れていくきっかけとなるようなものにする。 ・居心地の良い広場+ビジョンのある建物+熱い事業者 【多様な機能・用途】 ・新しい拠点施設には色々な機能が必要 ・観光センターという名称はいらない。 ・買い物ができるが良い。 ・アウトドア用品、乗鞍高原オリジナルグッズのお店があると良い。 ・販売コーナーがある等、伝統野菜が残せる仕組みがあると良い。 ・地域の人が作ったものを販売できる場があると良い。 ・共同キッチンを出店等のチャレンジで使える場になると良い。 ・おかみさん工房の場 ・活動が見える場、ゼロラボなど活動の実験の場、その先にビジネス ・お試し移住等の宿泊できる場所があると良い。 【眺望】 ・眺望はキモ ・ガラス張りで外が見えるように ・冬景色を見せる。 【外部】 ・外部空間には構造物は作らなくて良い。 ・椅子、机が置いて自分のスペースを作れるようにしてほしい。 ・芝生の広場でアクティビティができるようにする。 ・芝生広場で MTB、キャンプ、カフェができると良い。 【建築・デザイン・内部】 ・自然に合う建物 ・平屋で分散型が良い。 ・地域材、木材を使ってほしい。 ・材の再利用など 30 年後を見据えたストーリーで作ってほしい。 【フレキシブルな間取り】 ・機能を集約して、中はゆるやかにつながるようにする。 ・広い空間をどういう風にでも自在に動かせるようにする。 ・機能と配置を固定するのではなく、自在に使えるもの 【交流の場に】 ・人と人が集まって楽しむ、語らう場にする。 ・地元の人がお茶や話ができるコミュニティスペース
--	---

	・シェアライブラリーがあると良い。 ・イベント、展示会等が開催できるように ・会議やコワーキングができるスペース ・地元の人が自由に使える場所であってほしい。 【使い勝手の良さ】 ・雨に濡れない機能が必要 ・大きくなくて、メンテしやすく、冬暖かいのが良い。 【クビワコウモリの保護を】 ・新しくできる施設にねぐら機能(バットボックス)が欲しい。
案内拠点にする	【乗鞍高原のスタート・ゴールにする】 ・鈴蘭は乗鞍高原の観光のスタートとゴール ・乗鞍高原のゲートの役割を果たす。 ・案内所がパツと分かるようにする。 ・案内デスクが必要 ・次にどこに行けば良いか分かる所 ・山の駅にする(おみやげではなく)。 ・魅力があるのに素通りされてしまうので、乗鞍高原のショールームの機能が欲しい。ショールーム→情報入手→アクションへつなぐ ・行く所がイメージできる写真パネルがあると良い。マップではイメージできない。
交通拠点の整備を	・交通のハブにする。 ・2年後に e バイクの乗り捨てシステムが予定されている。
アウトドア・アクティビティの拠点に	・アウトドアのハブにする。 ・中心の基地にする。
雨の日に過ごせる場所づくり	・拠点施設は雨でも過ごせるようにする。 ・雨の日に過ごせる場所、雨宿りできる場所が必要
拠点施設の運営が大事	【運営事業者】 ・観光センターを誰がやるのかは重要。設計に入る前に事業者を決める。 【稼ぐ施設】 ・駐車場の有料化など稼ぐ施設にする。
車中泊問題を解消する	・駐車場にゲートをつけて車中泊問題を解消したら良い。
景観づくりに配慮する	・生い茂った森を間引いてランドスケープを良くする。
ゼロカーボンを推進	・ゼロカーボン、減カーボンを進める。
湯けむり館の在り方を考える	・昔の湯けむり館は乗鞍岳が見えて良かった(今は見えない)。 ・湯けむり館の次の改築も考える。

4.3.2.現地調査による特性・課題把握

ヒアリングの結果を踏まえ、鈴蘭周辺を踏査して課題を把握しました。

■現地調査に基づく課題のまとめ

課題のキーワード：「自然資源を活かす」、「人が主人公」

- | | |
|--|------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none">1 鈴蘭地区はゆっくり過ごす機能が弱いため改善を図ること。2 周辺の活かされていない優れた自然資源を活かすこと。3 鈴蘭地区からの乗鞍岳の眺望を活かすこと。4 景観を阻害している道路標識やサインの改善を図ること。5 電線、電柱が眺望を阻害、ゲートウェイにふさわしい景観づくりをすること。6 眺望を楽しむべき乗鞍高原のゲートウェイとして、本来脇役である駐車場が一番目立っており、見えないよう改善を図ること。7 藪化や枝枯れの森、鬱蒼とした草地が多いため適切な管理をしていくこと。 | <p>人が主人公</p> <p>自然資源を活かす</p> |
|--|------------------------------|

■課題は鈴蘭地区の魅力の向上

◇滞在機能

宿泊施設が多く立地し、温泉施設もあるが、飲食施設は少なく、鈴蘭地区や観光センター周辺を散策したり、ゆっくり過ごすなど時間を使って楽しむ機能が弱く、改善することが求められています。

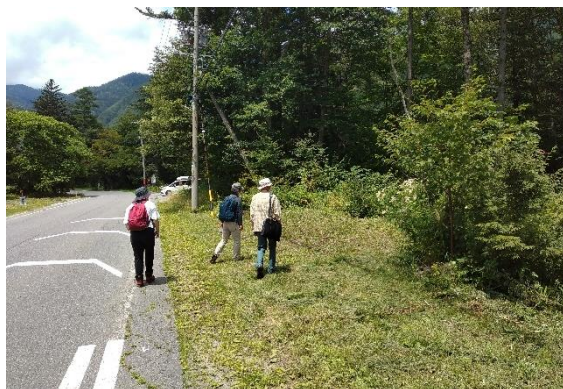
現在の観光センターの周辺は車が主人公



屋根のないデッキは暑くてゆっくりできない



歩道のない県道乗鞍岳線

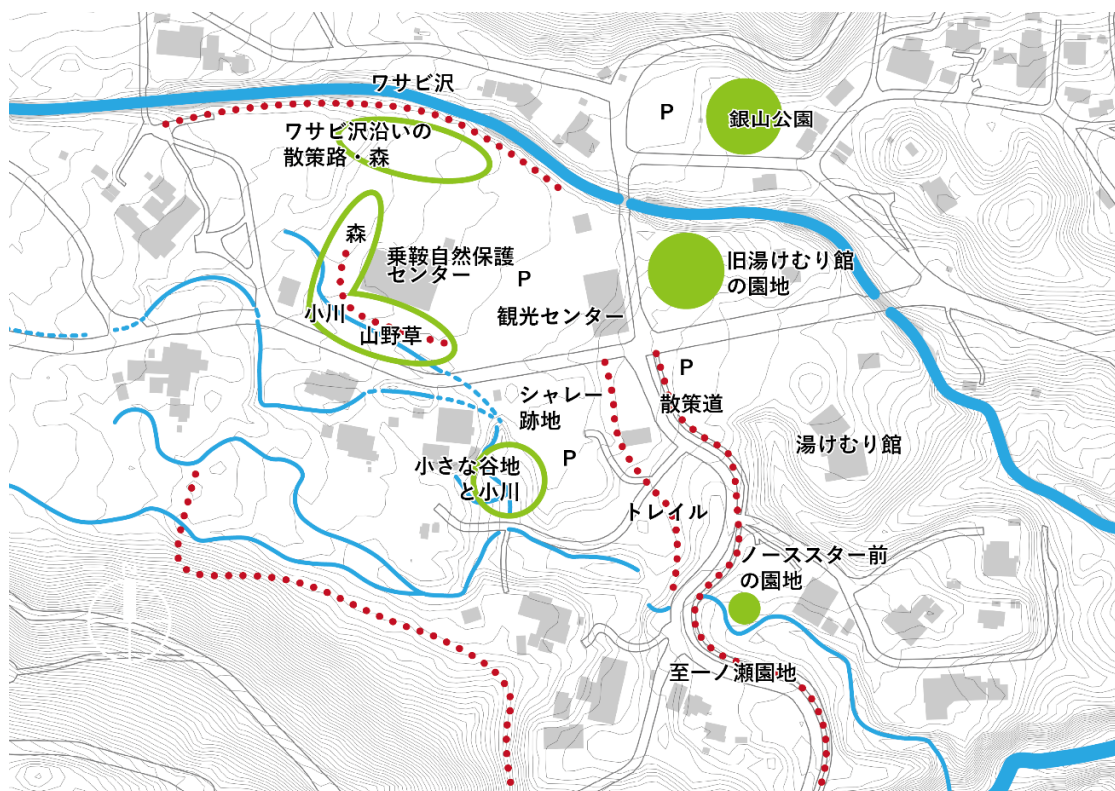


ワサビ沢の散策道が活かされていない



◇散策路のネットワーク

図 4-8 観光センター周辺の歩行路と居場所として魅力化できそうな場所



自然保護センター周辺には高層若しくは中間湿原が存在し、散策路も設けられ、外来種除去等の管理が行われています。

高山植物を満喫できる散策路



自然保護センターの道路を挟んだシャレー跡地駐車場のすぐ西側には、乗鞍高原らしい地形と小川、樹林を身近に体験できる場所があります。

シャレー跡地西側の小さな谷地



小川もあるが笹藪で良く見えない

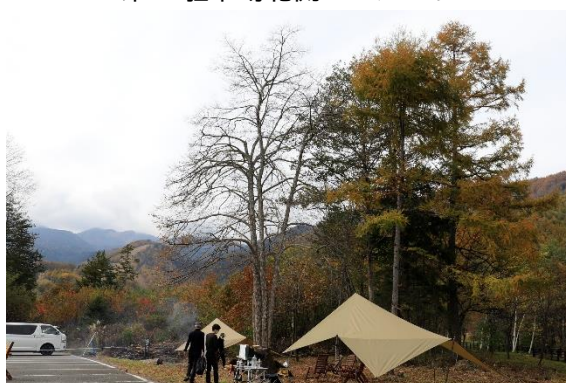


◇樹形の良い樹木を活かす

旧湯けむり館跡地のシナノキ



第1 駐車場北側のシナノキ



株立ちのシナノキなど計画地内には大径優良で個体樹形もよく、木陰も楽しめる樹木もあり、これを定置若しくは移植によりシンボルツリーとして活用することが望めます。

◇居場所をつくる

観光センター周辺で景色良く、心地良くゆっくりと過ごせる場が不足しています。乗鞍岳の眺望を楽しみながら焚火や薪ストーブを囲む居場所づくりの現地実験を行いました。

シナノキの下への居場所設置実験



旧湯けむり館跡地での居場所実験



◇ランドスケープ

計画地周辺の鈴蘭地区では、樹木が邪魔をしない場合には乗鞍岳を望むことができます。最高峰の剣ヶ峰だけでなく、乗鞍岳の山体を成す高天ヶ原や摩利支天岳、富士見岳、大黒岳等の稜線が全体的に見え、ある程度の山腹も視野に入ることが鈴蘭からの乗鞍岳の眺望としては重要となってきます。

乗鞍岳の眺望を綺麗に眺められるようにするには、仰角で約9°以内に眺望を遮るものがないことが必要となります。これは、視点場から50m離れた所で7.8m以上、100m離れた所で15.7m以上の範囲に樹木等の障害物がないことに相当し、乗鞍岳の優れた眺望を確保するためには、樹木や建造物等の高さや視点場との距離の関係を調整することが肝要です。また、視点の嵩上げやセットバック、林間を綺麗にししながら不要樹木の間伐を行うことによる眺望の確保が重要です。

図 4-9 乗鞍岳の地形と観光センターから乗鞍岳の眺望



地理院地図断面図を利用して作成

乗鞍岳の眺望を同じレンズと焦点距離で撮影し、比較すると、旧湯けむり館跡地の東の標高の高い所や銀山公園からは乗鞍岳の稜線が全体的に見え、電柱や電線、スピーカーのポール、駐車場等の景観阻害要因を除いては良好な眺望が得られる場所となっています。また、観光センターより北側の部分も比較的樹木に邪魔されず乗鞍岳の眺望がある程度よく見ることができます。また、県道からも乗鞍岳の眺望が綺麗に望め、乗鞍高原の印象にとっても重要な場所であるため、良好な沿道景観の創造が重要です。

乗鞍岳の眺望を活かして鈴蘭地区の魅力を高めるためには、乗鞍岳を望むための仰角の確保と、乗鞍岳の眺望と調和する美しい人工物を作ること、視野に入る樹木の適切な間伐や高木の高さのコントロールや樹形を綺麗に整えることを行い、美しいランドスケープを創造することが課題となっています。

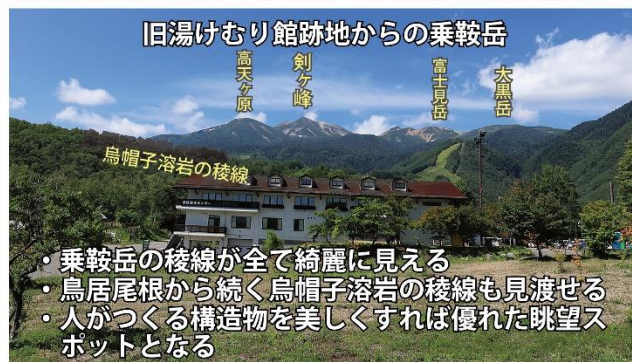
観光センターからは樹木で眺望が遮られる



駐車場の北側からは藪払い後眺望が改善



同じレンズ・焦点距離での乗鞍岳の眺望の比較

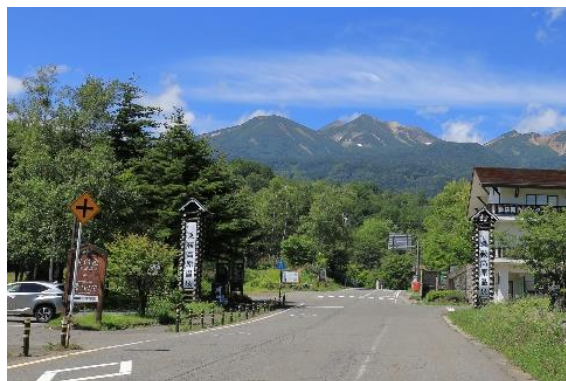


◇サイン設置状況と問題点

上空を覆い乗鞍岳の眺望を遮る交通標識



老朽化した看板



様々なサインが設置され混乱した印象を与えているため、必要な情報を整理し、総合的なサイン計画を立てた上で、必要最低限の大きさとで景観に良好なサイン設置を行う必要があります。

案内看板の乱立



文字が小さく分かりにくい案内看板



車向けの看板が、歩行者向けの文字サイズになっており分かりにくく、補助の立看板などが立ちやすい状況となっています。様々な看板があるため分かりにくく、伝えるべき情報を整理し、分かりやすく、景観としても良質なサイン設置を行うことが望ましいと考えます。

様々なサインの掲示



視認性に欠けるサイン



分かりにくい看板が多く掲示されています。乗鞍高原で共通化した集合看板を設置していますが、分かりにくい表示となっています。伝えるべき情報の整理と、歩行者向け、自転車向け、自動車向け等、見る側にとっての見やすさ、サイン自体の景観との調和を考えたサイン計画を行い、必要最低限のサイン掲示に留めるとともにサインの質を向上させていく必要があります。

◇電線・電柱類

電線類と電柱が眺めを阻害する場所が多く、乗鞍高原のゲートウェイとしては、地中化や見えにくい場所への移設など景観向上への対応が望ましいと考えます。

乗鞍岳の眺望を遮る架線



乗鞍岳の眺望を遮る架線



景観を阻害する架線



景観を阻害する架線



景観を阻害する架線



景観を阻害する架線、電柱



◇駐車場

現在の鈴蘭では駐車場が最も目立つ景観の一つとなっています。駐車場を無くすことはできませんが、乗鞍高原のゲートウェイにふさわしい眺望景観とするために、配置や規模の再検討、植栽や石垣、塀等で目隠しして直接駐車場が見えないようにする等の工夫が必須となっています。

また、冬季は積雪もあることから、除雪した雪の置き場を考慮する必要があります。

県道からの駐車场景観



駐車場が目立つ交差点



駐車場が目立つ交差点



駐車場が目立つ交差点と银山公園



银山公園からのバス駐車場



冬の駐車場状況



◇樹林及び草地の状況

鈴蘭周辺においては、1,500m近くの標高で山地帯、亜高山帯に構成される多様な植生分布が見られます。二次林で構成され、樹種は様々であり高木にはヤチダモ、ウラジロモミ、カラマツ、シナノキ、シラカンバ、ハンノキ、サクラ、スモモ、マユミ、ツリバナ等が見られ、高木、中木共に植樹された樹木も多く見られます。

健全な生育が阻害され全ての個体が小径のまま伸長し、積雪や強風により枝折れを起こしている樹木も多く、樹林の過密生育や、林帯の弱体化している所もみられ、高原の魅力を高める清涼感のある樹林とはなっていない状況です。樹林内の低層部、樹林や駐車場の周縁部は草地となっていますが、鬱蒼とした藪となっている所が多くて見通しもきかず、景観上のみならず、熊等の野生生物との突発的遭遇のリスクを高めている可能性があります。適切な間伐や枝透き、樹形の管理、下草刈りといった手入れが必要となっています。また、野生生物との突発的遭遇を防ぐ、開放的なグリーンベルトの設置を検討する必要があります。

駐車場脇の藪化した草地と密度の高い樹林



シャレー跡地は藪で奥の谷が見えない



4.3.3.ワークショップ等による課題・意見把握

■ワークショップの参加者

「のりくら高原ミライズ構想協議会」のメンバーを中心に、地域住民等が参加しました。

■ワークショップの名称

鈴蘭地区の役割を「乗鞍高原のゲートウェイ」としたことから、その具現化の取組みである本ワークショップの名称を次の通りとしました。

「乗鞍高原のゲートウェイづくりワークショップ」

■ワークショップのテーマとスケジュール

ヒアリングと現地調査で抽出した検討課題のキーワードは、「自然資源を活かす」「人が主人公」「中心・拠点をつくる」であり、これらをワークショップのテーマに取り入れ、議論を行いました。

- ① 自然資源を活かす……鈴蘭地区の自然資源を再発見しながら、その活かし方を考える。
- ② 人が主人公……鈴蘭地区における人の居場所づくりを考える。
- ③ 中心・拠点をつくる…乗鞍ゼロカーボン拠点機能を兼ねた観光センターの在り方、導入機能を考える。

■スケジュール

スケジュール	内容	上記テーマとの関係
第1回 9/6 観光センター2階 参加者 28 名	「居場所のある鈴蘭づくり-居場所をつくる・つなげる/ランドスケープ」 →参加者と周辺を巡って魅力を再発見し、その活かし方やアイデアを出し合う。	①②
第2回 9/29 観光センター2階 参加者 27 名	「10 年後の鈴蘭を描き、乗鞍ゼロカーボン拠点に必要なことを考える」 →具体的に導入すべき機能について考え、計画の検討に活かす。	③
第3回 10/23・24 観光センター周辺 参加者約 70 名	「居場所をつくる・つなげる/ランドスケープ 現地実験」 →自然を楽しむ居場所を実験的につくり、外構計画の検討に活かす。	①②
第4回 11/10 ふれあいパーク 参加者 36 名	「乗鞍ゼロカーボン拠点の基本方針について」 →拠点施設の在り方の基本方針と大まかな配置イメージを示し、意見を計画の検討に活かす。	①②③
第5回 1/12 ふれあいパーク 参加者 37 名	「整備計画案についての意見交換会」 →基本方針を踏まえた計画イメージを示し、意見を計画の検討に活かす。	①②③

■ワークショップで得られた課題・意見等

(1)第1回 居場所のある鈴蘭づくり -居場所をつくる・つなげる/ランドスケープ

ワークショップの成果
◇鈴蘭の活かしたい資源の共有 乗鞍岳の雄大な景色／樹形の綺麗な樹木や緑陰を楽しめる樹林／山野草の生息／綺麗な小川／満天の星空／散策が楽しめる自然環境／乗鞍高原ならではの火山の地形 ◇現状の課題の共有 ・鈴蘭地区を駐車場や車が主役の場所から、人が主役の場所にしていくこと。 ・心地よく過ごせる居場所や周りへの散策路を増やしていくこと。 ・心地の良い時間を過ごせる仕掛けをつくっていくこと。 ・雨の日や冬の寒い時期に過ごす仕掛けをつくっていくこと。 ・景観を良くする人工物よりも台無しにする人工物が目立つので景観の向上を図っていくこと。 ・藪や低木が密集し人を寄せ付けないため、手を入れ人が入れる場所にしていくこと。

出された意見・課題
① メインアプローチは自然豊かな乗鞍高原の玄関口にふさわしい景観整備 ・乗鞍岳をドーンと見せ、出会いの場にする。 ・周辺の電線、電柱、ガードレールなどの人工物に配慮 ② 乗鞍唯一の十字路を安全で分かりやすい案内整備 ・人と車が安全に、ストレス無く行き交う場とする。 ・看板や標識の視認性やデザインへの配慮 ・配置の工夫による動線及び場の分かりやすさ ③ 乗鞍高原の地形や環境、眺望を最大限活かし諸機能を再配置 ・乗鞍高原を満喫できる歩行者を主人公にした環境づくりやそのネットワーク化が必要 ④ 全体として歩く、座る人の目線を意識し、人が心地よく感じる環境づくりを大事にする。 ⑤ 現駐車場は自然を楽しむ場、眺望の場として活かす。 ・オープンな空(夜は星空)と乗鞍岳の山麓眺望を楽しむ自然豊かな場として活かす。 ・乗鞍岳の景観を阻害する建物類の在り方や池、足湯など ⑥ 自然保護センター周辺の景観整備 ・自然保護センター、バットハウス、電線等の景観対策 ・沢を活かした休憩スペース、日陰、ベンチ、池、歩道など ⑦ ワサビ沢周辺は水辺を活かす。 ・生い茂った植栽に手をいれ、遊歩道や木陰のベンチなど水辺を活かした憩いの場づくり ⑧ 湯けむり館跡地の整備 ・乗鞍岳の眺望地点としてウッドデッキを設ける。 ・眺望を阻害する観光センター、駐車場、電線等を見せない。 ・観光センターの候補地、EV等の2次交通、シンボル等、拠点として整備する。 ⑨ 観光センター西側にある乗鞍高原らしい谷とせせらぎの地形と緑陰を活かす。 ・藪や下草、間引き等の植栽管理により人が入れる素地を作る。 ・木陰での休憩や遊歩道、遊び場などのアクティビティに活かす。

2022.09.06

乗鞍高原のゲートウェイづくり

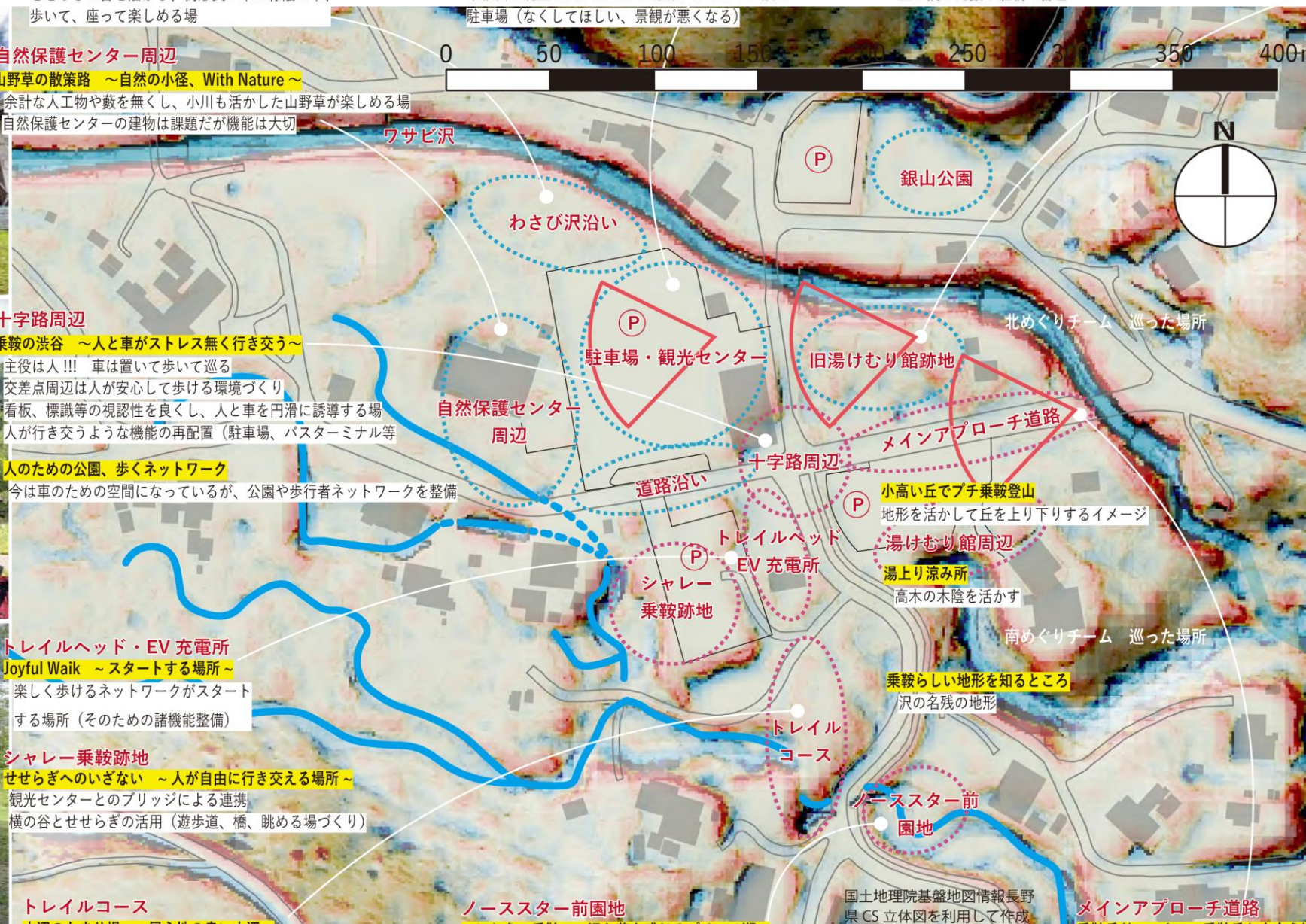
ワークショップ（第1回）

「居場所のある鈴蘭づくり」

～居場所をつくり・つなげる／ランドスケープ～

ワークショップの意見・提案プロット

写真撮影協力：セツ・マカリストーさん、上岡清美さん



北めぐりチームの意見のまとめ

- ・現駐車場は、オープンな空（夜は星空）と乗鞍岳の山麓眺望を楽しむ自然豊かな場として、乗鞍の景観を阻害する建物類やアスファルト等人工物のあり方、池、足湯などの提案
- ・ワサビ沢周辺は、生い茂った植栽に手をいれ、遊歩道や木陰のベンチなど水辺を活かした憩いの場づくりについて提案
- ・自然保護センター周辺は、建築物や電線等人工物のあり方、沢を活かした休憩スペース、日陰、ベンチ、池、歩道などの提案
- ・湯けむり館跡地は、乗鞍岳の眺望地点としてウッドデッキを設け、眺望を阻害する観光センター、駐車場、電線等を見せない提案。また、新しい観光センターの候補地、EV等の2次交通、シンボル等、拠点として整備する提案
- ・全体として、歩く・座る人の目線に対して見たくないものを引き算し、見て心地よいものを残す・作るをきちんとやって、人が心地よく感じる環境づくりを大事にする必要性など

南めぐりチームの意見のまとめ

- ・メインアプローチ道路では、乗鞍岳をドーンと見せ、出会いの場に。周辺の電線、電柱、ガードレールなどの人工物に配慮し、自然豊かな乗鞍高原の玄関口にふさわしい場づくりの提案
- ・乗鞍唯一の十字路は人と車が安全にストレス無く行き交う場。サインの視認性やデザイン、配置による動線、分りやすさなどの提案
- ・南めぐりの範囲には、乗鞍らしい谷とせせらぎの地形、緑陰があちこちにあり、やぶや下草の植栽管理により人が入れる素地を作り、木陰での休憩や遊歩道、アクティビティに活かす提案
- ・全体として、乗鞍高原の地形や環境、眺望を最大限活かしながら、既存の駐車場や観光センター、バスターミナル等の諸機能の再配置により、乗鞍を満喫できる歩行者を主人公にした環境づくりやそのネットワーク化の提案



(2)第2回 10年後の鈴蘭を描き、観光センター再整備に必要なことを考える

ワークショップの成果
◇10年後の姿の共有 ・乗鞍岳の眺望など、鈴蘭の風景が素晴らしい中でゆっくり過ごせる環境が実現しています。 ・アクティビティも充実し、誘う仕掛けが実現しています。 ・自然観察や自然の保全活動がなされ、乗鞍高原の自然が保たれています。 ・エネルギーや食など地産地消が進みサステナブルの先進地になっています。 ・ワーケーションに来るといような人となつたり、価値創造ができることなどが実現しています。 ◇導入すべき機能の共有 ① 案内・誘導機能 ・乗鞍を存分に味わうために自然に誘うビジターセンター的、案内機能やガイド拠点的功能は多くの方が必要だと考えています。 ・登山道や岐阜県側なども含めた乗鞍高原周辺全体の状況や情報が集約される仕組みが求められ、乗鞍高原の情報拠点として機能することが重要視されています。 ・乗鞍高原の魅力を伝える人の重要性、IT 技術も活用して必要な情報がきちんと届くような工夫も求められています。 ② 滞在・目的機能 ・鈴蘭で過ごす、散策する楽しみを作ること、地産地消によるレベルの高い食や雨の日でも時間を過ごせる図書館など鈴蘭で充実した時間を過ごせる工夫が求められています。 ・ワーケーション等、仕事をするのに快適な環境や、訪問者間や地元の人との交流を生む仕掛けも多い意見となっています。 ・子供向け、長期滞在者向けのサービスも求められています。 ③ 交通機能 ・乗鞍高原までの公共交通アクセスの利便性ととも、乗鞍高原内移動の二次交通をグリーンモビリティ化し、使いやすい交通手段の提供が求められ、鈴蘭が交通結節点として拠点的な役割を果たすことが求められています。 ・駐車場は乗鞍岳の眺望など自然景観を阻害しない工夫が重要視されています。 ④ ゼロカーボンパーク拠点 ・ゼロカーボンを目指した乗鞍高原の先進的なゼロカーボンの取組みの見える化、ゼロカーボンを進めるための理解を深められる工夫が求められています。 ・薪などの自然エネルギーを使いやすくする仕組み、ゴミなどバイオマス、水力などエネルギーの地産地消化を進めることが求められています。 ・ゼロカーボンだけでなく、環境保全をより進められる工夫も求められています。

出された意見・課題
① 案内・誘導機能 ・観光センター内に案内機能を一元化した総合案内機能が必要 ・最新情報、地域情報、ライブカメラ、災害・クマ等の危険情報を伝える。 ・エコツアー等のガイド拠点 ・案内表示・システムの導入 ・アクティビティ(トレイル、サイクリング、自然観察など)の案内・誘導

- ・自然観察や自然を理解するための分かりやすい情報発信、自然研究・情報蓄積機能
- ・自然やゼロカーボン、環境についての充実した蔵書等

② 滞在・目的機能

- ・乗鞍岳の眺望や自然景観を美しく眺められる居場所や散策路
- ・飲食しながらゆっくり過ごせる場
- ・時間を快適に過ごせる飲食機能(カフェ、レストラン)
- ・子供も楽しめる居場所・体験・遊びの機能
- ・アウトドアショップ、レンタルショップ
- ・おみやげ、農産物直売、食材、薪ステーション等物販
- ・ワーケーションが心地よくできる環境
- ・ライブラリー雨の日にゆっくり過ごせる場
- ・夜も楽しめる星空を眺めやすい工夫や焚火など
- ・長期滞在、打ち合わせなどにも対応する施設や食材等の販売機能
- ・地域の人が利用できる会議室、ギャラリー、活動拠点
- ・交流や出会いの場
- ・地元も使える山の図書館

③ 交通機能

- ・景観を阻害しない駐車場
- ・乗り換えの利便性があるターミナル機能(シャトルバス、路線バス、周遊バス)
- ・乗鞍高原へのアクセス性が高い公共交通
- ・交通のユニバーサルデザイン対応
- ・グリーンモビリティ化し、充実した二次交通
- ・周辺は徒歩や自転車で移動できる環境整備

④ ゼロカーボン・その他の機能

- ・ゼロカーボンの取組みの見える化
- ・薪やバイオマスなど自然エネルギー利用
- ・環境保全のための拠点的功能
- ・人のつながりを生む仕掛け

ワークショップの様子



出された意見のプロット

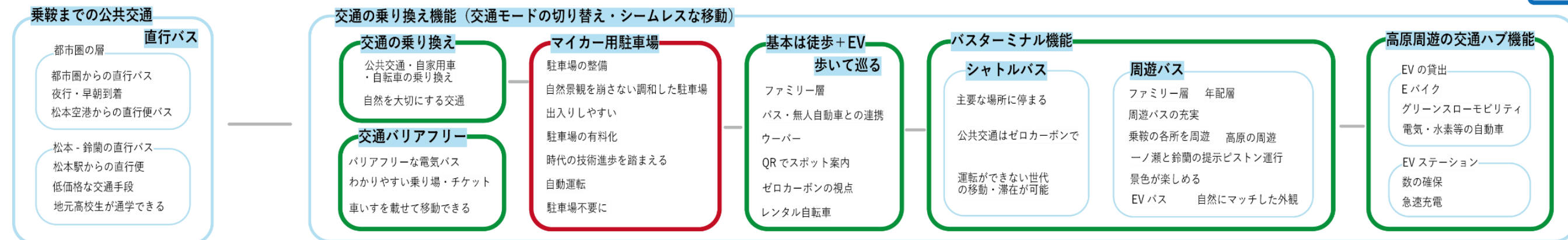


乗鞍観光センター再整備に向けた「乗鞍高原のゲートウェイづくりワークショップ」による意見のまとめ 機能及び連関図

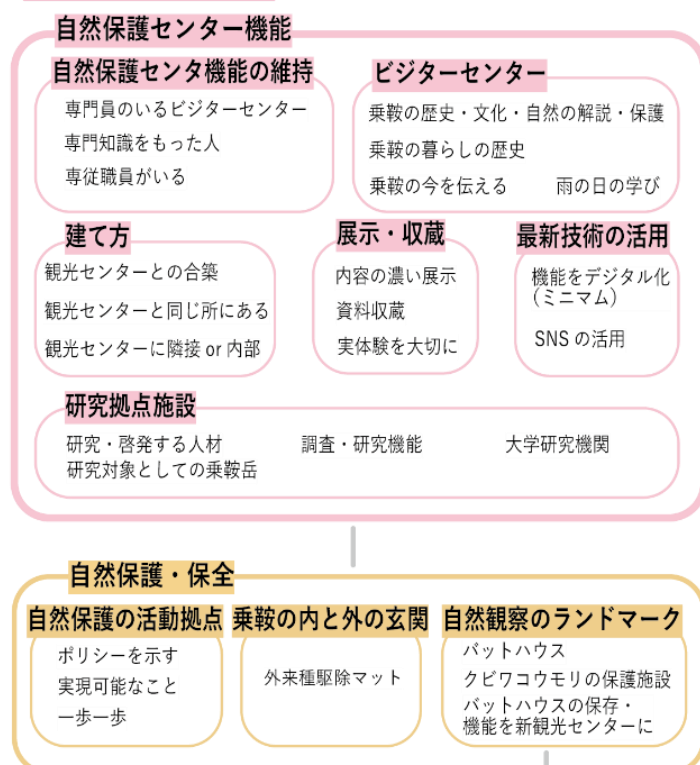


※ワークショップの意見をまとめたものであり、施設への導入が決定しているわけではありません。
※官民については厳密に分けているわけではありません。

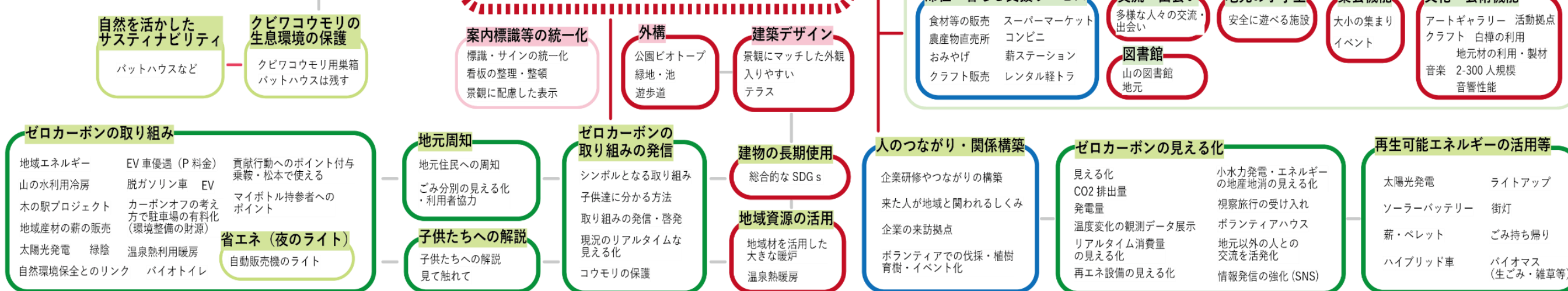
交通機能



案内・誘導機能



ゼロカーボン拠点機能



(3)第3回 観光センター周辺に居場所をつくる・つなげる/ランドスケープ 実験

ワークショップの成果

10月23日(日)、24日(月)に観光センター前駐車場の北側、旧湯けむり館跡地等で居場所をつくる・つなげる/ランドスケープづくりの実験を実施しました。

- ・タープを駐車場北側に2張、湯けむり館跡地に3張の計5張設営
- ・椅子やテーブル、薪ストーブなどを置き、来た方々がゆっくり過ごしながらか、話を聞きました。
- ・天候に恵まれ、この時期としては暖かく居場所実験日の中、タープの下やたき火、薪ストーブの周りで延べ70名近くの方がゆっくり過ごしました。
- ・乗鞍高原はいい場所、ゆっくり過ごせることは素晴らしいということを多くの方が笑顔で語り、鈴蘭の居場所としてのポテンシャルを感じました。
- ・40名の方がアンケートに答え、大自然を満喫できゆっくり過ごせる「場」と、イスやテーブル等のくつろぎの「設え」、外部から分かるタープ等による「可視化」の必要性が検証できました。

現地実験前の藪状の森



藪を刈った後の乗鞍岳の見える居場所



たき火のある居場所



薪ストーブを囲むと談話が弾む



居場所づくり実験

10/23(日)・24(月) 10:00-15:00

いつもは過ごしている方がいない場所なので、チラシを配ったり、説明をしたりして、居場所づくりの実験を観光センターの周辺で行い、コーヒーを飲みながら、語り合いながらと30分以上過ごしてくださる方が多い状況でした。中にはタープを目印に、こちらをつかって良いのですかと近寄って訪ねてきて、冠雪と紅葉の山に囲ま

れながらゆっくりと時間を過ごすご夫婦もいらっしゃいました。

観光センター周辺の環境はやはり素晴らしく、乗鞍で良い思い出となる時間を過ごすための居場所づくりの重要性が確かめられた実験となりました。



駐車場からみたタープの様子



道路から見たタープの様子



居場所実験の各所の写真



居場所実験の場所、タープは駐車場北側と旧湯けむり館跡地に設置



この時期の気温でも、陽があたり暖かいときは、タープの下で座ってゆっくり過ごす人も、焚き火の周りには、子どもたちも喜んで集まってきました。現代社会では、安心して焚き火や燠の光を楽しむこともなかなかしにくい経験になっていますが、今回の実験で、素敵な乗鞍時間を過ごすためにも火は大きな魅力を感じていてと再認識しました。



実験2日目の午後は様子を見て地元の方が多く集まってくれました。日が陰り少し寒くなりましたが、みなさん薪ストーブで暖をとりながら1時間ほどの井戸端会議に。いろんな話で盛り上がっていましたが、「こんな仕掛けがあると地元の人も集まることもできるし、観光客と交流もできそうで良いね」の感想も。

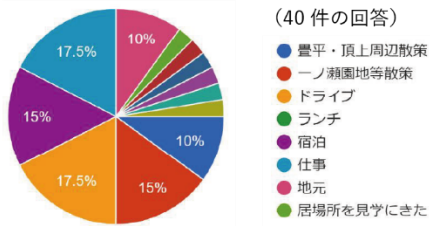
アンケートについて

居場所を体験した方にアンケートをお願いしたところ、40名の方がアンケートに協力して下さいました。

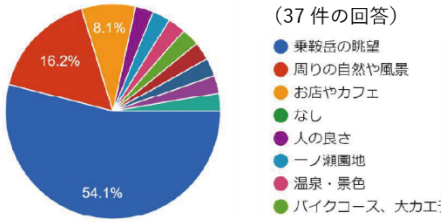
居場所で過ごして下さい下さった方々からは、やっぱり乗鞍はいい場所、ここでゆっくり過ごせることは素晴らしいということも多くの方が笑顔で語っておられました。乗鞍ゼロカーボン拠点計画は、ワークショップとともに今回の実験結果やアンケートも参考に策定を進めてまいります。

アンケート結果

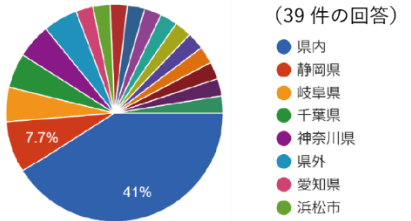
Q1 今回の乗鞍高原来訪の目的は何でしょうか？



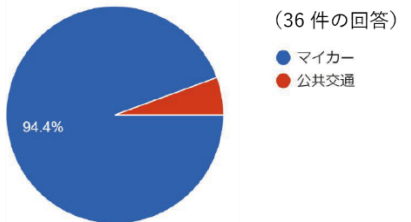
Q2 観光センター周辺（現在地周辺）で魅力を感じるところがありましたらお答えください。



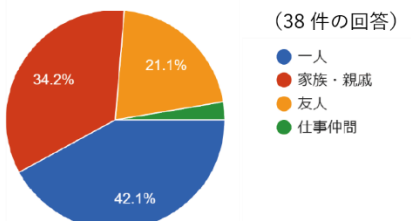
Q7 どちらからお越しになりましたか？



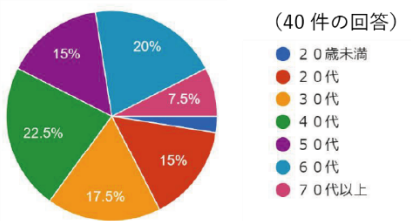
Q8 どのような交通手段でお越しになりましたか？



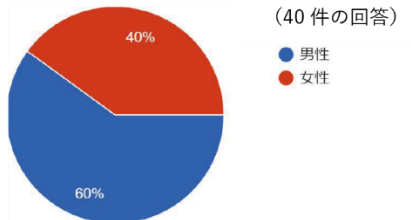
Q9 どなたとお越しになりましたか？



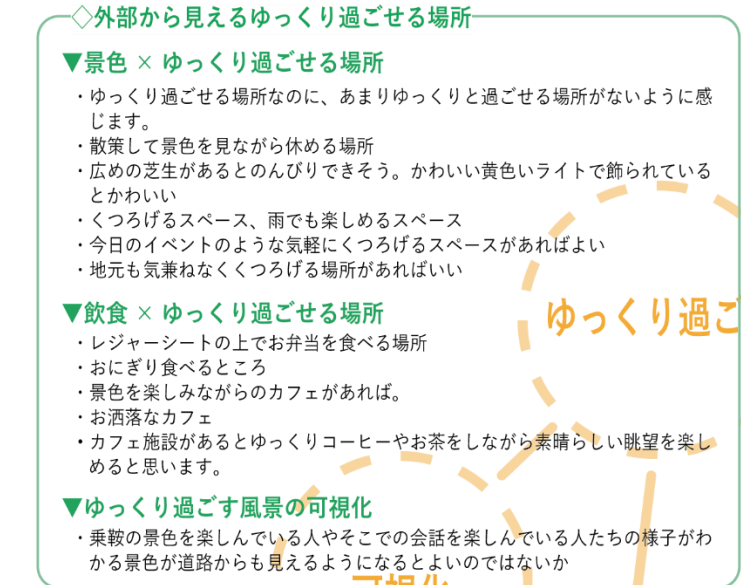
Q10 お答えいただいた方の年齢



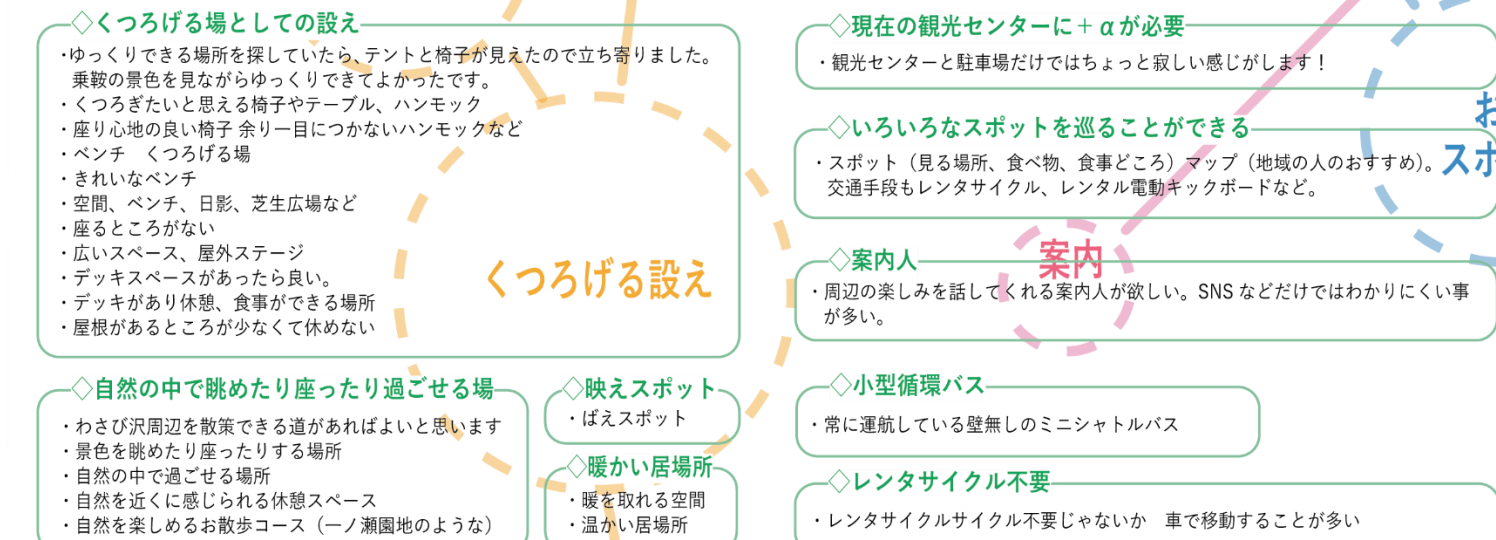
Q11 性別



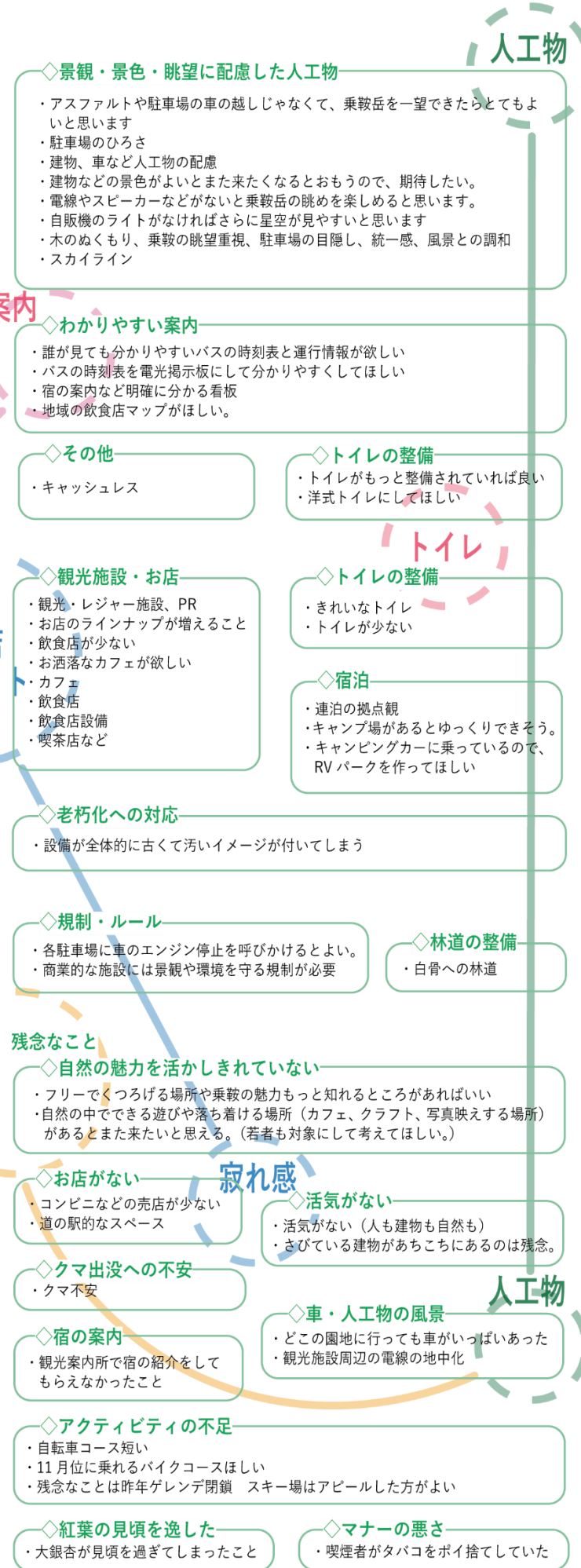
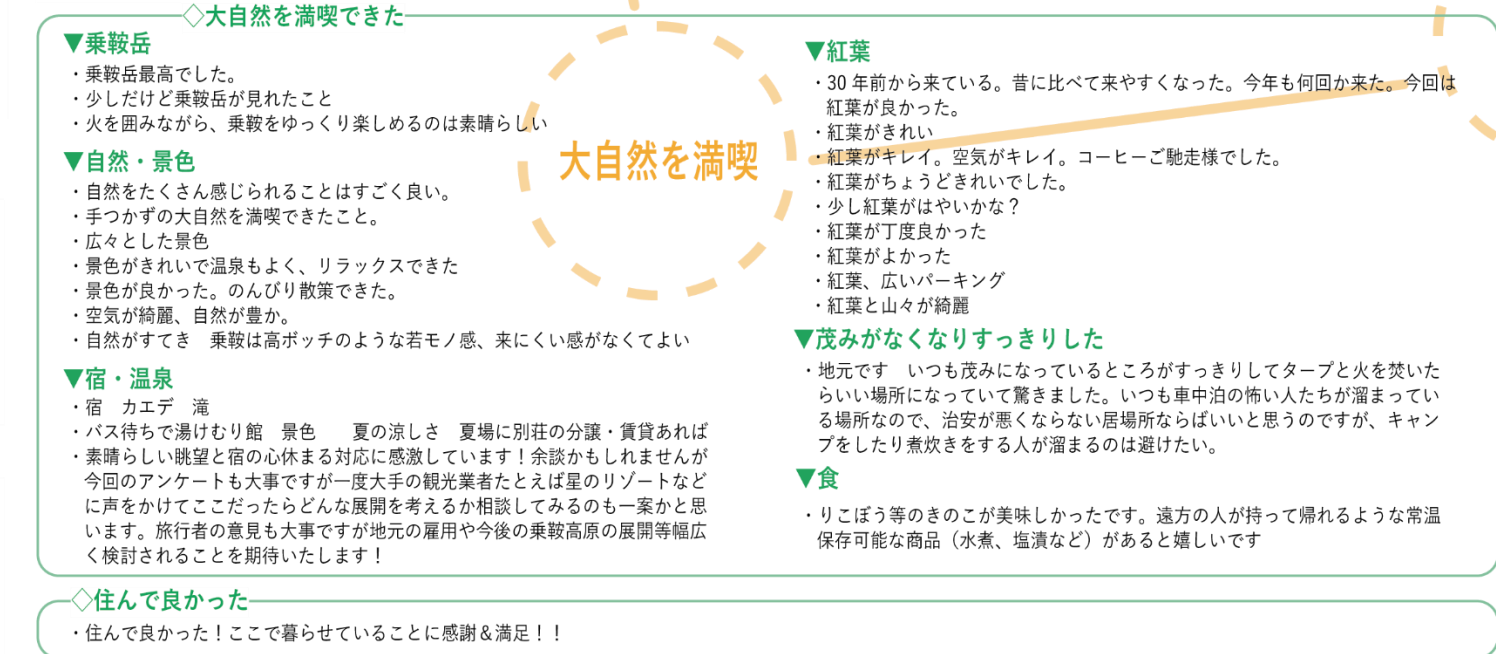
Q3 観光センター周辺で「もっとこうだったら良いのに!」と思う点は何でしょうか？



Q4 観光センター周辺で、ゆっくり時間を過ごすために必要なこと、現在足りないことはどのようなことだと思いますか？



Q5 今回、乗鞍高原に来てよかったと思うこと、逆に残念なことがありましたらお答えください。



(4)第4回 観光センター再整備の基本方針について

ワークショップの成果

◇目指すべき観光センター再整備の在り方についての基本方針(たたき台)の共有

- ① 自然に配慮した駐車場、ターミナル等乗り換え機能
- ② 分かりやすいワンストップの総合案内
- ③ アクティビティや自然体験の可視化・誘導
- ④ 自然を満喫しながらゆっくり過ごせる滞留機能
- ⑤ 人の流れや動きをつくる配置や連携
- ⑥ 持続的に周りへ波及させる
- ⑦ 人々の自然な交流を促す
- ⑧ ゼロカーボンを実践する
- ⑨ 将来の変化に柔軟に対応できる余地を残す
- ⑩ 使いやすく温かみが感じられるデザイン

ワークショップの様子



◇たたき台に対して出された意見・課題

- ① 自然に配慮した乗り換え機能について
 - ・バスターミナルの位置や規模等、自然共存型にするための検討
(位置についてどうなのか、自然への配慮になっていない。)
 - (広すぎる。位置・面積を縮小してほしい。)
 - (バットハウスとの距離をとる。)
 - ・バス待ちスペースには屋根を必ず付けてほしい。
 - ・グリーンスローモビリティの拠点がほしい。
 - ・グリーンシーズンだけでなく、四季を通じた利用の仕方の検討
 - ・駐車場を分散配置するメリット・デメリットの整理
 - ・駐車場と分かるような目印、標識を設ける。
 - ・車中泊の駐車場はない方が良い。
 - ・敷地内にも冬季対策等で 10 台程度の駐車スペースの確保についての検討
 - ・冬の駐車場の除雪しやすい配慮が必要
 - ・各駐車場にバイオトイレを設ける。
 - ・サイクリング大会ができるようにしてほしい。
 - ・駐輪場のスペースを多めにとってほしい。
 - ・駐車場からの移動はスロープや歩道橋で。
- ② 総合案内機能を中心とした機能構成について
 - ・建物に入ってパッと分かる内部配置や案内所だとすぐ分かるヘッド
 - ・総合案内には自然を案内できる人や機能、ツアーデスク
 - ・内部は柔軟な使い方ができるように余り仕切らない方が良い。
 - ・一方で使っていない時に閑散とした感じにならないよう配慮
 - ・イベントスペース、子供が遊べるスペースが欲しい。
 - ・ワークスペース、ラボ機能が欲しい。
 - ・雨の時に一般観光客が昼食を食べられる所が欲しい。

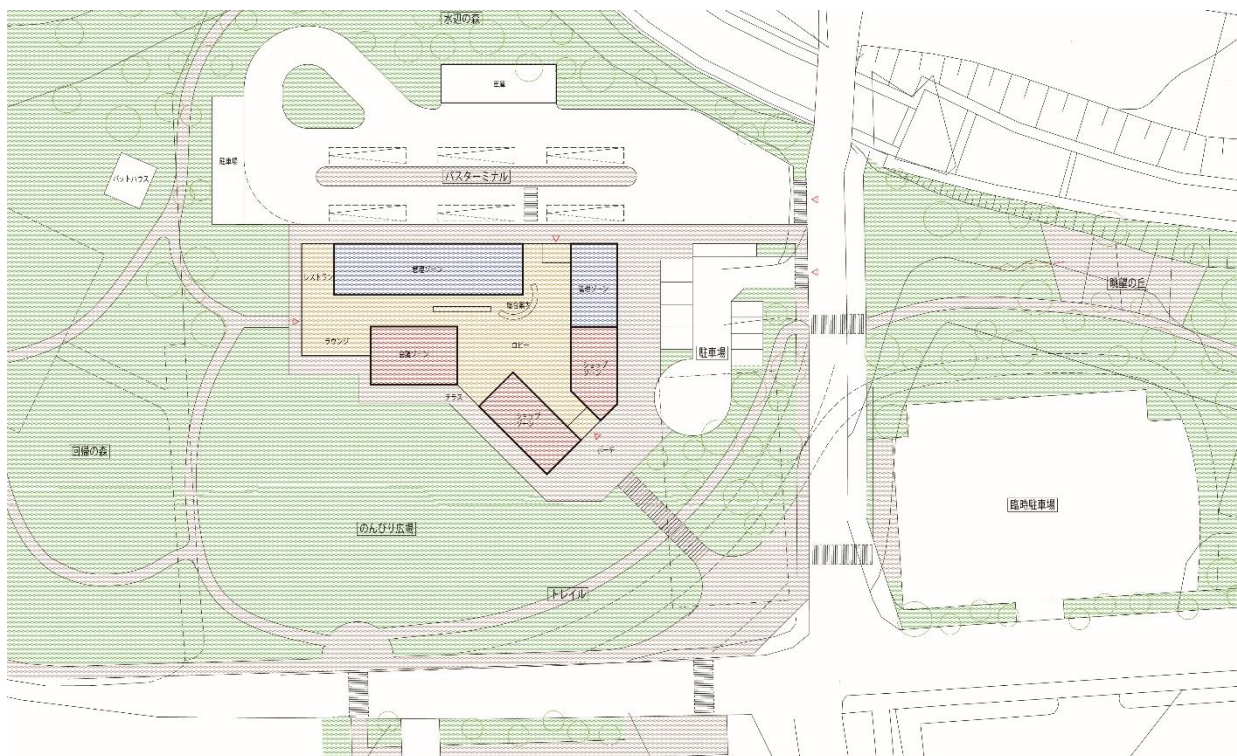
③ アクティビティ、自然体験への誘導について

- ・ビジターセンター機能の維持
- ・自然保護センターのグレードダウンはしない。グレードアップのために県の協力を。
- ・ビジターセンターの展示スペースはちゃんと専用のスペースにすべき。
- ・観光センターの片隅で自然を紹介するだけでは自然保護センターの機能を発揮できない。
- ・VR 等による自然解説をする。
- ・野生動物の専門家、解説員、ガイド、プロ、レンジャー等、人の配置が必要
- ・自然を保護する人、自然を調べる人の活動拠点が欲しい。
- ・雨の日でも自然を楽しめるような大きな窓が欲しい。
- ・レストランやカフェは大きな窓にする。
- ・テラスやデッキなど眺望を活かす設えは必要
- ・テラスの向きは山向きにする。
- ・屋根の上や階段テラスから山の眺望ができるように。
- ・展望デッキは24時間にすると良い。
- ・バットハウスは日本で唯一のこうもりハウスであることをアピールすべき。
- ・バットハウスの建替えとモニタリング

④ 広場・森・散策路等の外構について

- ・何でも木を切って見晴らしが良ければ良いのではない。
- ・地域の外に自然があるのだから、構内に無理に自然を作らなくて良い。
- ・旧湯けむり館跡地の駐車場は傾斜が危ないので平坦にする。
- ・希少動物への配慮
- ・トレイルヘッドへの分かりやすい誘導が必要

一例としての配置イメージ・施設ゾーニングイメージを共有し議論



ミライズ+9/6 ワークショップ1 《場》
「居場所のある鈴蘭づくり」

のりくら高原ミライズ

人と自然がつながる賑わいのある地域づくりへの挑戦

乗鞍高原のゲートウェイとして鈴蘭地区（観光センター及び自然保護センター周辺）の上質化

①のりくら高原地域の観光の窓口（最初に訪れる場所）として必要な機能

- ・観光と暮らしの情報発信
- ・地域内二次交通の拠点

②観光と生活の交流拠点・賑わいの場として必要な機能

- ・飲食店・直売所・商業施設・ATM
- ・住民と観光客のふれあいの場

③その他意匠等

- ・鈴蘭地区から乗鞍岳を展望できる施設
- ・駐車場や電線が見えない整備

■つなぐ場

① 情報（案内）、場所、アクティビティをつなぐ機能

- 観光と暮らしの情報発信・誘導・シンボル機能
- ▼乗鞍高原を楽しむ拠点としてのあり方

② 人と自然・地域をつなぐ、学びの機能

- 自然保護センターの機能・連携
- ▼必要な機能として残すべき
- ▼展示・規模の見直し
- ▼観光センターと自然保護センターの連携

③ マイカーからの乗り換え・駐車場機能

- 駐車場機能
- ▼観光センターと駐車場の関係
- ▼駐車場のキャパシティ
- ▼人・車の流れが生まれるような配置・仕組みづくり

④ 交通モードの切り替え、移動、アクティビティをつなぐ機能

- 地域内二次交通の拠点機能
- ▼ビジョンの共有が必要
- ▼チェックアウト後の午前中の観光需要への対応
- ▼シャトルバスなど
- ▼e バイク
- ▼歩く

■滞在・交流の場

① 心地よい滞在の場としての機能

- 乗鞍らしい火山地形を活かした居場所、散策路
- 人と車がストレスなく行き交える環境づくり
- 雨の日や冬の寒い時期に過ごせる仕掛けや場づくり
- ソフト・ハードを考えた「建物として魅力あるもの」に

② 生活と観光が共有できる交流機能

- 乗鞍高原の暮らしを感じ、知ることができる拠点
- ▼観光機能
- ▼暮らしと観光の観点をミックス
- ▼交流拠点機能
- ▼地場産の直売所
- ▼移住につなげる

■眺めの場

① 鈴蘭地区から乗鞍岳を展望できる機能

- 乗鞍岳の眺めを満喫できるランドスケープ
- 「広い空」を活かした開放的な場づくり

② 景観に配慮した整備

- 風景を阻害する人工物を見せない配慮、魅力的な建築

観光センター周辺確認

9/29 ワークショップ2 《機能》
「10年後の鈴蘭を描き、乗鞍ゼロカーボン拠点に必要なことを考える」

■交通機能

交通の乗り換え機能（交通モードの切り替え・シームレスな移動）

マイカー用駐車場 自然と調和する駐車場 駐車場の有料化

バスターミナル機能 シャトルバス 周遊バス 路線バス

高原周遊の交通ハブ機能 EVステーション EVの貸出

- ・交通バリアフリー
- ・基本は徒歩+EV
- 歩いて巡る

■案内・誘導機能

総合案内機能 案内機能を一元化（集中化・複合化）

- ・最新情報・地域情報
- ・自然情報ラウンジ
- ・災害・クマ等の危険情報
- ・案内表示・システム
- ・ボランティア案内
- ・アクティビティの案内・誘導
- ・エコツアー等ガイド
- ・宿泊予約の案内

自然保護センター機能

- ・自然保護センタ機能の維持
- ・ビジターセンター
- ・建て方
- ・展示・収蔵
- ・最新技術の活用
- ・研究拠点施設

自然保護・保全

- ・自然保護の活動拠点
- ・外来種駆除マット等乗鞍の内と外の玄関
- ・バットハウス等自然観察・保護のランドマーク

建築デザイン 外構

■滞在・目的機能

滞在の多様化

- ・乗鞍を眺める場
- ・ゆっくり過ごせる場
- ・星を眺める
- ・カフェ・レストラン
- ・アウトドアショップ
- ・レンタル
- ・ワークスペース
- ・ワーケーション・滞在受け入れ
- ・雨の日のアクティビティ
- ・自然保育園
- ・温泉入浴

滞在・暮らしの両方に関わる機能

- ・滞在・暮らし支援サービス
- ・集会機能
- ・図書館
- ・交流・出会い
- ・地元の小学生
- ・文化・芸術機能

■ゼロカーボン拠点機能

- ・建物の長期使用
- ・ゼロカーボンの見える化
- ・再生可能エネルギーの活用等
- ・地域資源の活用
- ・ゼロカーボンの取り組みの発信
- ・クビワコウモリの生息環境の保護
- ・人のつながり・関係構築
- ・自然を活かしたサスティナビリティ
- ・地元周知
- ・子供たちへの解説
- ・クビワコウモリの生息環境の保護

機能について意見交換

10/23・24 居場所の現地実験 《空間》
「居場所をつくる・つなげる/ランドスケープ」

のりくらのんびりサイト -乗鞍岳の麓でのんびり過ごす-

■屋外空間の計画検討のための居場所づくりの試行

- ・タープ等で遠くからでも居場所であることが分かる
- ・日陰や緑陰をつくる
- ・乗鞍岳の眺望を活かす
- ・下草を刈って視認性を良くする
- ・木のチェアーなどに座れる
- ・コーヒーやお茶を飲んでほっとできる
- ・たき火・薪ストーブのファイアープレイスを囲む

◇アンケート結果の概要

■観光センター周辺に望まれること

- ・景色を眺めたり、飲食をしながらゆっくり過ごせる場所
- ・人が楽しむ風景が外部から見えることも大事な要素
- ・買い物、食事、遊ぶ等滞留できること
- ・キャンプ、温泉、お店、アクティビティ等色々な楽しみ方ができること
- ・わかりやすい案内
- ・トイレの整備

■観光センター周辺でゆっくり過ごすために必要なこと

- ・くつろげる場としての設え
- ・自然の中で眺めたり、座ったり過ごせる場
- ・現在の観光センターに+αが必要
- ・いろいろなスポットを巡ることができる
- ・案内人
- ・小型循環バス
- ・観光施設・お店
- ・老朽化への対応
- ・アイドリングや景観に対する規制・ルール

■今回、乗鞍高原に来て良かったこと

- ・大自然を満喫できた
- 乗鞍岳
- 自然・景色
- 宿・温泉
- 紅葉
- きのこなどの美味しい食
- 茂みがなくなりすっきりした

乗鞍岳を眺めてのんびりする

■残念なこと

- ・自然の魅力を活かしきれていない
- ・活気がない
- ・お店がない
- ・車・人工物の風景
- ・クマ出没の不安
- ・アクティビティ
- ・紅葉の見頃を逸した
- ・宿の案内がなかった
- ・マナーの悪さ

乗鞍岳を眺めながら炉を囲む

乗鞍観光センター再整備の機能のあり方
《10本の柱》

乗鞍の自然、魅力、活動と人をつなぐ交差点
《ネーミングなど ○○○○○》

（1）自然に配慮した駐車場、ターミナル等乗り換え機能

- ・樹間駐車場（駐車場の有料化、車中泊サイトの検討）
- ・景観に配慮したターミナル（表からバスを見せない配慮）
- ・お迎え・結節点としてのシンボル性（交差点の改良等）

（2）わかりやすいワンストップの総合案内

- ・全体がパッと見渡せてわかりやすいラウンジ
- ・観光や旬な情報、災害・危険、地域情報等をガイドと表示により案内
- ・自然や環境、ゼロカーボンのライブラリー・学び場

（3）アクティビティや自然体験の可視化・誘導

- ・自然保護センター機能の維持・自然保護の活動拠点
- ・乗鞍の自然体験、ガイド
- ・登山道、草刈りなど管理・保全活動の拠点
- ・アクティビティを表に可視化、用具のレンタルにも対応

（4）自然を満喫しながらゆっくり過ごせる滞留機能

- ・乗鞍の眺望や自然を活かしたランドスケープ、人工物への配慮
- ・自然を満喫できる屋外・屋内の多様な居場所空間
- ・カフェ、飲食、暖炉があり自然とつながったラウンジ

（5）人の流れや動きをつくる

- ・駐車場の分散配置等、機能配置の工夫による人の流れ
- ・安全な行き来ができるウォーブルな環境デザイン
- ・一ノ瀬園地、乗鞍ベース、スキー場との連携の創出

（6）持続的に周りへ波及させる

- ・周辺へ伸びるトレイルや散策路等の歩行者ネットワーク
- ・事業者等が持続でき地域経済の循環につながる運営
- ・ミーティング等地域活動が育まれる場の創出

（7）人々の自然な交流を促す

- ・ラウンジなど誰もが自然に交流できる場づくり
- ・地域の方も共有できるワークスペース、多目的スペース
- ・自然の共有により心がオープンになれる屋外の居場所

（8）ゼロカーボンを実践する

- ・イニシャル・ランニングコストの縮減
- ・建物の長寿命化、ZEB化、木・石等地域材の活用
- ・ゼロカーボンの取り組みを発信する

（9）将来の変化に柔軟に対応できる余地を残す

- ・敷地条件等を踏まえた高耐久な建物
- ・将来の改変がしやすい仕切りすぎないプラン
- ・駐車場は簡易な樹間駐車で改変しやすいもの
- ・湯けむり館など将来の老朽化に伴う移転先

（10）使いやすく温かみを感じられるデザイン

- ・バリアフリー、ユニバーサルデザイン
- ・木のぬくもりを感じられる内外装
- ・利用者の視点に立った使いやすいデザイン

(5)第5回 観光センター再整備計画案についての意見交換

意見交換会のまとめ
◇自然保護センターの今後について 意見交換会の冒頭で、長野県環境部自然保護課新津課長から、観光センター再整備に伴う自然保護センターの今後について説明が行われました。 《長野県からの説明要旨》 自然保護センターは昭和54年に建設してから43年が経過し、施設の老朽化が進んでいることから、新センターの建設に合わせ、解体することとしました。 また、有効活用できる展示物の新センターへの移設や自然情報の発信方法等については、松本市と協議していきます。 なお、希少種保護など乗鞍高原における自然保護活動は、環境省等と連携し、今後も積極的に取り組んでいく考えです。 ◇意見交換会 意見交換会では、過去4回のワークショップ等の意見を参考に作成した整備計画の要旨案について、活発な議論が交わされました。 《計画全般について》 ・この地域は少子化が進んでおり、今回の施設の建替えは地元の活性化に繋がる計画として期待しています。 《自然保護センターについて》 ・自然保護センターは大事な施設。私たちのアイデンティティであり、存在することに大きな意味があると思います。センターはクビワコウモリの休憩場所にもなっており、本当に解体しなければならないのでしょうか。 ・自然保護センターの廃止は県民への説明が足りないのではないかと思います。 ・ビジターセンターの機能がゲートウェイとして重要な役割を持っていると思うので、人を強化してほしい。 《展示》 ・自然保護センターの展示物は新しい拠点施設には入りきらないと思います。展示物の移設の際は一の瀬や市の施設等への分散を考えた展示も考えてほしい。 ・予算は厳しいと思いますが場所を取らない方法として、可能であれば VR の活用などを検討してほしい。 《自然保護センターの活動やガイドの必要性》 ・自然解説パネル等二次元の展示物だけでは乗鞍高原の自然は理解できません。伝えていくにはガイドは必須であり、説明する人の配置などソフト面が重要だと思います。案内等の雇用の確保をお願いします。 ・子供たちの教育の観点から ESD(持続可能な開発のための教育)の拠点としてはいかがか。 ・乗鞍高原地域は自然保護レンジャーの保全活動が他地域に比べ積極的な地域。自然保護活動の拠点的功能が必要だと思います。 《貴重な動植物への配慮》 ・クビワコウモリのバウンディング調査等、継続して行える環境を保持してほしい。 ・雷鳥は乗鞍のシンボルであり、国を始め関係者が保護活動に取り組んでいます。インバウンドなど

上位計画・政策等

国の登録・指定

松本・高山 Big Bridge 構想

鈴蘭地区の面的な上質化、ワーケーションに適した地域づくり、自転車利用の適正化

中部山岳国立公園南部地域利用推進協議会 2021.2

ゼロカーボンパーク

国内第1号登録 2021.3

脱炭素先行地域指定 2022.4

環境省

のりくら高原「ゼロカーボンパーク」の具現化

太陽光・小水力等による脱炭素、脱プラ、地産地消、サスティナブルツーリズム、E-bike、薪活用等

松本市・大野川区・信州大学 2022.4

- 1. ゼロカーボンパークや脱炭素先行地域としての取り組みを積極的に推進していくこと
- 2. 乗鞍高原全体の総合案内と各所への誘導ができていないこと
- 3. 車中心の場になっているため、人の滞在空間・滞在時間が少なく、乗鞍高原を知る機会、消費の機会等を逸していること

現状の観光客の動きの構造 目指したいゲートウェイの構造

乗鞍高原の自然・魅力・活動と人をつなぐゲートウェイ

乗鞍高原のサステナブルな観光、環境、暮らしの循環づくりを楽しみながら実践、発信、共有する拠点

- 1. 地域の再生可能エネルギーや地域材の利用、建物の ZEB 化、ゼロカーボンの取り組みの実践と発信、体験の場
- 2. 観光、自然、歴史、アクティビティ、リアルタイム情報などワンストップの総合案内・表示、高原各所への誘導
- 3. マイカー駐車場や公共交通・グリーンスローモビリティのターミナルなど乗鞍高原らしい自然共生型の交通結節点の創出
- 4. 配置の工夫や周辺施設との連携、周辺散策路のネットワーク化などによる、人の流れや動きの創出
- 5. 自然体験、アクティビティ、遊び、のんびり過ごすなど、人が楽しむ風景を表に出し、人を誘う
- 6. 乗鞍岳の眺望や自然を活かしたランドスケープ等、自然を満喫できる場や雨の日に過ごせる場をつくり滞在時間を延長化
- 7. 多目的スペースやラウンジ、カフェなど来訪者と地域の方々 が共有でき、多様な交流、実験、実践等につながる場
- 8. 四季を通じた施設利用や事業継続、当事者意識の高い適切な運営等による持続的な波及効果
- 9. 自然景観に配慮した魅力的な外観、バリアフリーやユニバーサルデザインなど使いやすく、温かみが感じられるデザイン
- 10. 将来の湯けむり館の老朽化に伴う移転先、拠点施設の使い方の変更、季節による運営の変化等に対応できる可変性の確保

- ゼロカーボン拠点機能
 - ゼロカーボンの体験・学び・PR
 - ハード
 - ・長期使用できる建物
 - ・ゼロカーボンパークのシンボル
 - ・建物の ZEB 化
 - ・季節利用に応じた利用床の変容性
 - ・太陽光等再生可能エネルギーの利用、リアルタイムの表示
 - ・温泉、小水力発電等地域エネルギーの活用と地産地消の見える化
 - ・LED 等、高効率機器等の省 CO2 設備の採用
 - ・石・木等地域材の活用
 - ・夜間照明、自販機ライトの配慮
 - ソフト
 - ・エコツーリズムの推進
 - ・脱プラ・ごみゼロエミッション等の取り組みの推進・見える化
 - ・薪の調達等木の駅事業との連携
 - ・子供たちへの解説
 - ・ゼロラボ活動の拠点
 - ・ゼロカーボン研修の受け入れ
- 案内・誘導機能
 - わかりやすい案内標識・サイン
 - ・各種案内標識・サイン等の統一
 - ワンストップの総合案内と誘導
 - ・わかりやすい総合案内・ツアーデスクカウンター
 - ・全体がパッと見渡せるホール
 - ・自然・観光・地域・アクティビティやイベント、災害等の最新情報
 - ・事業者との連携
 - ・最新技術を活用したわかりやすい案内表示、ライブカメラ等の映像
 - ビジターセンター的機能
 - ・地域の自然・歴史・文化の紹介
 - ・展示・発信等最新技術の活用
 - ・自然観察・保護活動拠点
 - 災害時の避難誘導
 - ・指定避難所機能の確保
 - ランドスケープ・建築デザイン
 - ・自然と人に開かれた外構デザイン
 - ・自然に映える魅力的な建築
- 交通機能
 - 乗鞍高原らしい交通結節点
 - ・景観と安全に配慮した交差点改良
 - マイカー駐車場
 - ・環境負荷を低減する分散型駐車場
 - ・シャレー跡地をメインにした周辺駐車場の有効利用
 - ・道路横断等歩行者の安全確保
 - ・できるだけ車を見せない外構
 - ・有料化の検討、車中泊問題の解消
 - ・RV パークの検討
 - ・減滅する冬季利用への配慮
 - バスターミナル
 - ・環境に配慮した適正規模
 - ・バスを見せない配置
 - ・林道安曇川線の拡幅、機能的な動線（路線・シャトル・周遊バス）
 - ・快適な待合、早期利用への対応
 - 高原周遊の交通ハブ機能
 - ・グリーンズローモビリティの基点
 - ・格納庫、EV ステーション
 - ・電動自転車の貸出
- 滞在・目的機能
 - 多様な滞在・過ごし方の創出
 - ・自然を楽しむ姿やアクティビティが表から見える配置
 - ・のんびり広場など乗鞍岳の眺望・自然を満喫してゆっくりできる場
 - ・周辺の森や水辺を活かした自然観察、自然散策の場
 - ・地域の薪を使った焚火体験、テイクアウト、自然の中で遊べる場所
 - ・地産地消のカフェやレストラン
 - ・アクティビティや思い出を深めるショップ（レンタル、物販等）
 - ・ワーケーションの場にもなるラウンジ、ロビー、多目的ホール
 - ・雨の日に過ごせる薪ストーブのある場
 - ・ライブラリー（環境・地域・山等）
 - 滞在・暮らしの両方に関わる機能
 - ・講座、制作体験、展示、イベント、地域活動等ができる多目的スペース
 - ・子供たちの学びの場
 - ・WiFi、プレゼン設備等

散策路

ワサビ沢

藪状で人を寄せ付けない森

バットハウス

乗鞍自然保護センター

第一駐車場(200台)

野外トイレ

至白骨温泉

第2駐車場(50台)

銀山公園

林道 安曇奈川線

臨時駐車場(混雑期のみ)

乗鞍観光センター

← 至乗鞍エコーライン

県道乗鞍岳線

至松本

シャトルバス乗り場

路線バス乗り場

湯けむり館駐車場

湯けむり館

EV充電所

至一ノ瀬園地・奈川

トレイルヘッド

トレイル

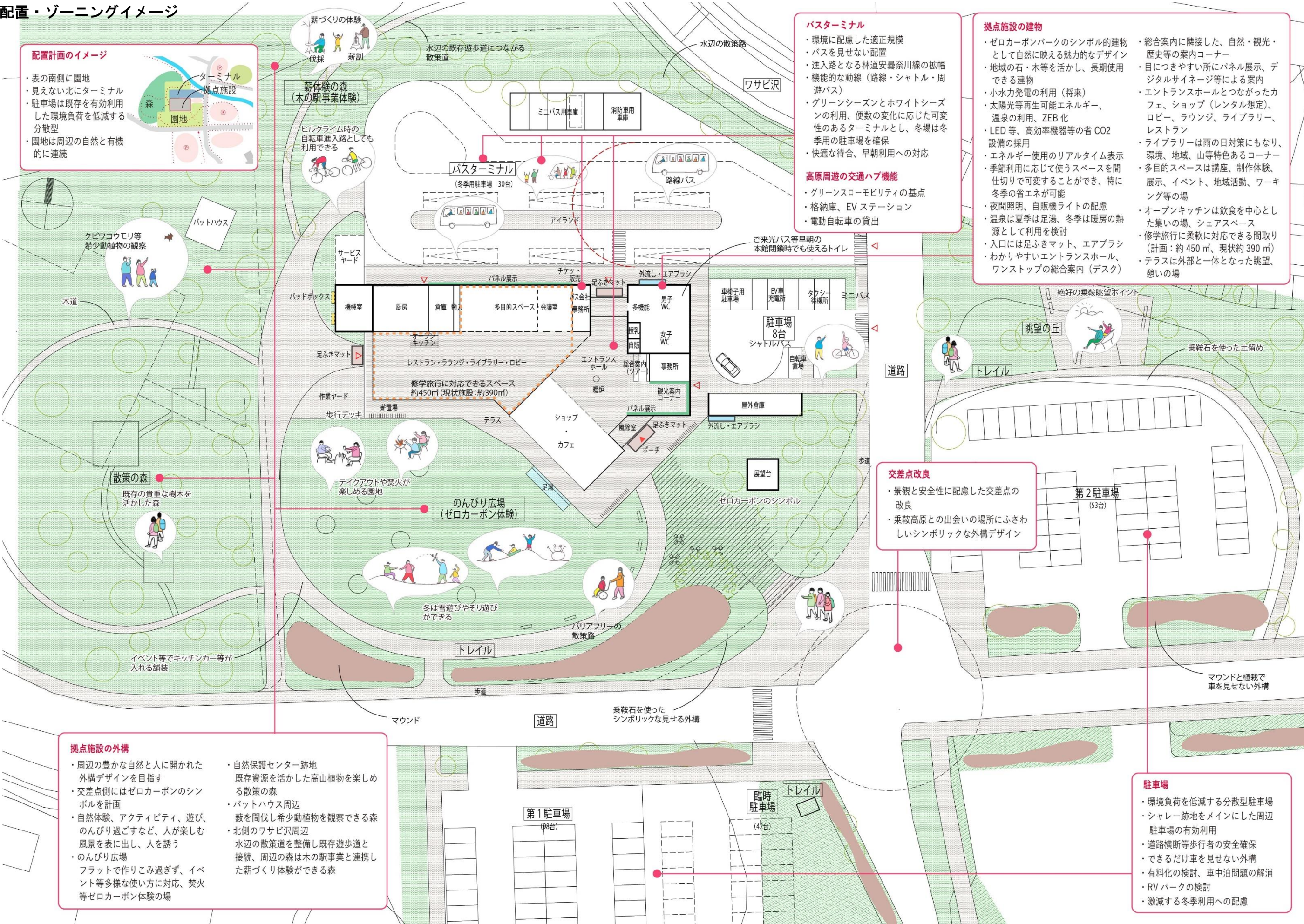
既存観光センターの建築概要
階数:2階建て(一部地下1階)
延床面積:1,540㎡

サイクリング

N

[illegible]

配置・ゾーニングイメージ



5. 観光センター及び周辺市有地の基本構想

5.1. 基本的な考え方

乗鞍高原のゲートウェイと位置づけ、これまでの調査、ヒアリング、ワークショップ、意見交換会等の結果を踏まえ、中長期的に整備する方向性について基本構想としてまとめます。

《基本構想》

- ・課題
- ・目指すべき方向性
- ・コンセプト
- ・基本方針
- ・ランドスケープを活かした拠点とその周辺の在り方
- ・拠点としての土地利用(事業地)の検討

5.2. 課題・目指すべき方向性・コンセプト

課題	1 ゼロカーボンの拠点としての整備と取組みの積極的な推進 2 乗鞍高原全体の案内・誘導拠点として総合案内・自然紹介、各所への誘導 3 滞在・交流拠点として、多様な滞在、交流ができる、人が主人公の場
----	--

目指すべき方向性	乗鞍高原の持続的な環境、暮らし、観光の循環づくりを楽しみながら実践、発信、共有する拠点としてのゲートウェイを創造し地域の活性化を図ります。
----------	---

コンセプト	「乗鞍高原の自然・魅力・活動と人をつなぐゲートウェイ」 コンセプトのダイアグラム 現状 目指すべき構造
-------	---

基本方針	コンセプトの「乗鞍高原の自然・魅力・活動と人をつなぐゲートウェイ」を具体化するための10の基本方針
ゼロカーボンの拠点づくり	1 地域の再生可能エネルギーや地域材の利用、建物の ZEB 化、ゼロカーボンの取組みの実践と発信、体験の場となる施設を目指します。 ・建物の長寿命化・ZEB化や再生可能エネルギーの導入、木・石等地域材の活用を図ります。 ・イニシャル・ランニングコストの縮減を図ります。 ・先進的な取組みの見える化等、ゼロカーボンの取組みを積極的に推進します。 ・ゼロカーボンの情報発信やライブラリーなど、取組みの理解と学びを深められる場とします。 ・薪の利用、ゴミの減量の取組み、地産地消化を推進します。
自然・観光案内拠点、誘導の拠点づくり	2 観光、自然、歴史、アクティビティ、リアルタイム情報などワンストップの総合案内・表示、高原各所への誘導の拠点とします。 ・乗鞍高原で初めに訪れる場所として、乗鞍全体の観光、自然、歴史、アクティビティ、気温、リアルタイム情報など、IT 技術等を活用した分かりやすい表示等により集約的に案内・提供を行い、乗鞍高原全体の観光活性化を図ります。 ・乗鞍高原を存分に味わうためのゲートウェイとして、自然への理解を深め、誘導できる人材の強化を図ります。 ・自然保護活動、登山道、草刈りなどの管理、保全活動を推進する場を目指します。 ・植生や動物等の生息状況や生態系の変化など、大学や専門家とも積極的に連携しながら自然情報の把握に努め、保全活動や情報発信に生かします。 ・クビワコウモリの保護等環境保全・保護活動の取組みに配慮した整備を目指します。 ・複数の道路標識、サイン類は景観に配慮し総合的なサイン計画を立てた上で改善を図っていきます。 ・持続可能な開発のための教育(ESD)活動を推進します。
滞在・交流の拠点づくり	3 マイカー駐車場や公共交通・グリーンスローモビリティのターミナルなど乗鞍高原らしい自然共生型の交通結節点を創出します。 ・乗鞍高原の交通の結節点の役割を果たし、乗鞍高原までの公共交通アクセスの利便性の向上、地域内移動の二次交通に対応する拠点とします。 ・乗鞍高原との出会いの場でもあるシンボル性の高い交通結節点とするため、長期的な視点でラウンドアバウト等の十字路改良を検討します。

- ・乗鞍岳の眺望に恵まれた場所として、バスターミナルや駐車場を表から見えないようにする配置や目隠し等細心の景観的配慮をします。
- ・バスターミナルは分かりやすく、安全な歩行者・車両動線と快適な待合機能を有します。
- ・地域内移動や二次交通のグリーンモビリティ化や、e バイクの利用に対応します。
- ・駐車場は雨水の流れや浸透に配慮し、大規模なアスファルト舗装面とならないように分割するなど環境負荷を低減できる分散型の配置とします。
- ・車中泊問題の解消や駐車場の有料化による環境保全への取り組み等を検討します。
- ・自転車の通行帯、自転車が濡れない駐輪場、着替え等、日常の自転車利用に配慮するほか、ヒルクライム大会に対応できる計画とします。

4 施設配置の工夫や周辺資源等との連携、散策路のネットワーク化などにより、人の流れや動きを創出します。

- ・鈴蘭で過ごす、散策する楽しみを作るため、車中心の場から居場所があり楽しみながら散策できる、「人が主人公の場」への転換を図ります。
 - ・未利用地を活かした駐車場の分散配置や機能配置を工夫し、歩行者空間の整備により人の流れが生まれ、周辺にも人が回遊する計画とします。
 - ・安全な行き来ができ、快適に歩ける歩行者空間を創出します。
 - ・周辺の自然資源(※)、園地、公園、各種施設等を結ぶ散策路やトレイルのネットワークを形成します。
- ※周辺の活かしたい自然資源・散策のポイントとなる要素：乗鞍岳の雄大な景色の眺望地点、樹形の綺麗な樹木や緑陰を楽しめる樹林エリア、山野草の生息地、綺麗な小川、満天の星空を眺める場、乗鞍高原ならではの火山の地形
- ・グリーンスローモビリティや e バイク等により一の瀬園地、いがやレクリエーションランド(乗鞍 BASE)、スキー場とのネットワークに配慮します。

5 自然体験、アクティビティ、遊び、のんびり過ごすなど、人が楽しむ風景を表に出し、自然の中で過ごす楽しさを共有します。

- ・人が人を誘う構造をつくるため、アクティビティや楽しむ姿が表から見えるよう、のんびり過ごせる広場を表側に配置します。
- ・広場は思い思いに自然を楽しめる場を目指し、遊具や構造物を作り込まないこととし、イベントや集まり等にもフレキシブルに対応できる場とします。
- ・建物は、くつろぐ姿が見えるデッキや大きな開口部等により内部の楽しむ人々の風景が外に可視化されるよう配慮します。

6 乗鞍岳の眺望や自然を活かしたランドスケープ等、自然を満喫できる場や雨の日の居場所をつくり滞在時間を延長します。

- ・電線、電柱等眺望を阻害している状況の改善を図り、乗鞍高原のゲートウェイにふさわしい景観形成を図ります。
- ・鈴蘭地区の地形を活かし、乗鞍岳の眺望テラス、デッキ、高い位置からの展望の場、大きな開口部のある場など、乗鞍岳の眺望や周囲の自然、星空を満喫できる、多様な「居場所空間」をつくります。
- ・利用者への飲食サービスとしてカフェ、レストラン、ゆっくりできる場としてラウンジ、ライブラリー、暖炉等、思い思いに過ごせるスペースを提供します。
- ・地産地消によるレベルの高い食の提供を目指します。
- ・雨の日でも大きな開口部で自然を眺めてゆっくり過ごせ、自由に飲食ができ、充実した時間を過ごせるライブラリー等の居場所を提供します。
- ・子どものいる家族連れも過ごせる配慮をします。
- ・心地よく自然が楽しめるよう、藪化や枝枯れの森、鬱蒼とした草地の適正な管理を行います。
- ・高木は乗鞍岳からの防風の役割もあるため、眺望を良くするための間伐等には十分配慮します。
- ・飲食や居場所など滞在空間の上質化により、目的地としての集客や滞在時間の延長化を図り、売上げの増加や雇用創出につなげます。

7 多目的スペースやラウンジ、カフェ等は、来訪者と地域の方々が共有でき、多様な交流、実験、実践等につながる場とします。

- ・ワーケーション等、仕事をするのに快適な環境や、ラウンジ、カフェ、イベント・多目的スペース等来訪者と地元の人との自然な交流を育むスペースを計画します。
- ・ラボ機能、調理工房等地域の方々が新たな事業に取り組めたり、ミーティング等地域活動が育まれ、地域の活性化につながる場を創出します。
- ・避難所や地域の大人数による会合に対応できる配慮をします。

8 四季を通じた施設利用や事業継続、当事者意識の高い適切な運営等による持続的な波及効果を目指します。

- ・管理運営者の役割は重要であるため、公益性に理解があり、持続的な波及効果を生み出せる適切な管理運営者の選定を行うとともに、持続可能な運営しやすい施設とします。

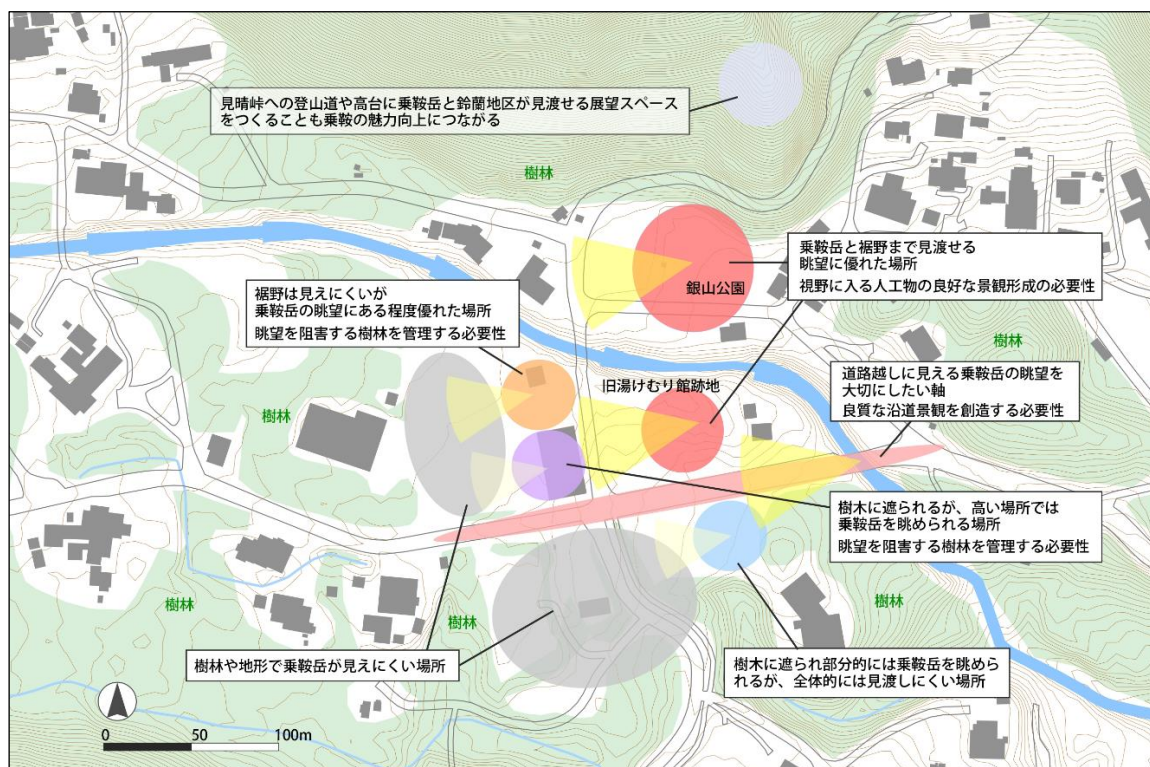
	9 自然景観に配慮した魅力的な外観、ユニバーサルデザイン等使いやすく、温かみを感じられるデザインとします。 ・乗鞍高原のゲートウェイとして分かりやすい建物とします。 ・内部空間が明るく全体が見渡せて分かりやすい建物とし、内外のユニバーサルデザインに配慮します。 ・木のぬくもりを感じられる内外装のデザインとします。 ・ナショナルパークのゲートにふさわしい質の高いユニバーサルデザインによるトイレを整備します。 ・利用者の視点に立った使いやすさに配慮します。 10 将来の湯けむり館の老朽化に伴う移転先、拠点施設の使い方の変更、季節による運営の変化等に対応できる可変性を確保します。 ・湯けむり館については将来改築の場合には乗鞍岳の眺望考慮の声が多いため、拠点施設の整備と併せ長期的視点から将来の移転先も検討します。 ・拠点施設の四季の運営形態の変化に応じて利用面積が縮小できる等、冬季に寒くない暖房に配慮します。 ・内部は柔軟な使い方ができるようにあまり仕切らず、プランの工夫により修学旅行等大人数でも使え、一方で利用者が少なくなる季節でも大空間が閑散とした感じにならないよう配慮します。 ・将来の変化に対応するため、内部の改変をしやすい躯体構造とし、間仕切りも仕切りすぎないようにします。
--	--

5.3. ランドスケープを活かした地域拠点とその周辺の在り方

■乗鞍岳と高原景観の魅力化

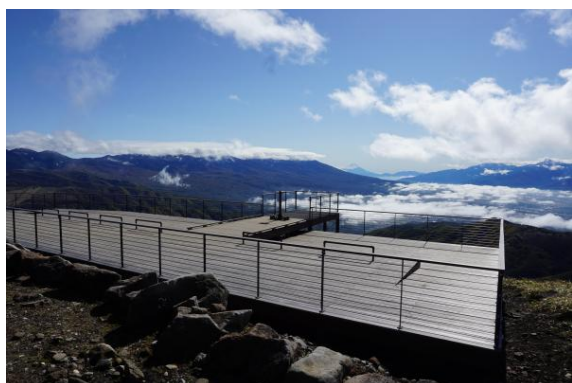
鈴蘭だからこそ見える乗鞍岳の雄大な眺望、周辺の地形や樹林といった自然景観を活かすことは新観光センターのみならず、鈴蘭や乗鞍高原の魅力向上にとって必須です。現在の観光センター周辺の乗鞍岳の眺望を分析し、地形や樹木の位置の状況から下記のことには留意します。

図 5-1 乗鞍岳の眺望分析図



- ・ 乗鞍岳の可視性が良好な旧湯けむり館跡地や银山公園の辺りは、景観形成に力を入れるべき場所です。できる限り駐車場等の配置は避ける場所とします。駐車場等交通施設を配置する場合には、景観に配慮し、なるべく見せないようにするか、見えるならばランドスケープとして写真を撮影したくなるような工夫を行います。
- ・ ワサビ沢に架かる県道の橋の東から、観光センター駐車場の入口辺りの直線道路は乗鞍岳の稜線が良く見えるため、乗鞍高原のイメージ向上を図るために沿道の良好な景観形成を行います。
- ・ 現観光センター及び駐車場エリアの北東からは乗鞍岳が望める一方、南側からは樹木に隠れて乗鞍岳の眺望があまり望めなくなっています。樹木の高さを抑える剪定を行うとある程度は眺望が開けるようになります。あるいは、高さのある展望スポットを設けることで乗鞍岳を望むことができるようになります。ただし、展望台をこのエリアに設ける場合は、银山公園周辺や旧湯けむり館跡地からの優れた乗鞍岳の眺望の視界に入るため、景観的に好ましいデザインを行う必要があります。また、現観光センター及び駐車場のエリアに新観光センター等建物や施設を設置する場合には、同様に建物の高さを抑え、ランドスケープとしても魅力ある人工物とします。
- ・ 湯けむり館を改築する場合には、現在の場所よりも乗鞍岳の眺望に優れ、露天風呂等から見る眺めの魅力を高められる银山公園、金山駐車場のエリアへの改築を検討します。

- ・ 大樋銀山付近の斜面で、新観光センターから歩いて 15 分以内の乗鞍岳の眺望と鈴蘭を見渡せるなだらかな箇所に展望台を設置することは研究課題とします。



写真出典:茅野市 HP



白馬岩岳マウンテンリゾート HP

- ・ 駐車場等見えない方が良い交通施設については、県道の南側への樹林等により景観に対する配慮を行う形で設置することを基本とします。

■沿道景観、敷地、建物、設備等

- ・ 優れた高原観光地として、建物、施設等は人工物だからこそ美しいといわれるものを創造し、風景が誇れる鈴蘭の形成を目指します。
- ・ 新観光センターや人の居場所、散策路からは駐車場が極力見えないようにします。
- ・ 擁壁や護岸等を設置する場合には、乗鞍高原の石材を使い良好な景観になるよう工夫します。
- ・ 電線、電柱類は道路上や景観的に優れた場所には設置、架線を行わないようにします。
- ・ スピーカー、火山観測カメラなどについても、景観に配慮した位置に設置します。
- ・ 土工工法の起源、淮南子の「築土構木」に習い、現地の素材を活用します。

■樹林、草地、小川等自然景観

- ・ 樹林については、間伐による樹種選抜や林床に適切な日光が届くよう高木の剪定及び枝透きを行い、清涼感のある樹林とします。
- ・ 乗鞍岳の眺望に優れる所からの見通しを確保するため、目標樹形を定めて樹木の高さを適切にコントロールするとともに、樹形の美しさにも配慮します。
- ・ 低木地や草地については、貴重な生物に配慮しながら藪化しないように管理を徹底し、来る人が心地よく眺められる清涼感のある景観を保全します。
- ・ 小川や谷地など散策にとって心地良い景観資源がある場所については、樹林や草木を適切に剪定、刈り取りをしながら散策路を設け鈴蘭散策の魅力向上につなげます。
- ・ 植生遷移を行う場合には、人為的な遷移誘導は必要最低限に留め、可能な限り自然遷移を念頭においた樹林管理を基本とします。
- ・ 外来種等が突出し他を圧迫する樹種などについては早期の制御を行います。

■広場、人の居場所、遊歩道

- ・ 歩道や施設の周囲には野生動物との遭遇を回避するための隔離帯(見通しの良い空間)の設置を検討します。
- ・ 建築物を解体した跡地はバクテリアが殆ど生息していないため、広場等に利用する場合には健

全な表土搬入を検討します。

- ・ 屋外空間の居場所において、景観的にも魅力があり移設も簡便なタープの活用を検討します。
- ・ 広場設置の場合には、添景として乗鞍石や乗鞍高原の特色ある植生の活用を検討します。
- ・ 遊歩道には間伐材を利用した不整地園路、木道設置、ウッドチップ歩道を検討します。
- ・ 湿原の木道や栈橋には防腐薬剤を使用せず間伐材の焼き丸太の利用を検討します。

■駐車場、バスターミナル

- ・ 駐車場は、居場所、施設、県道などの景観や眺望が重要な場所から見えない配慮をします。
- ・ 擁壁で周囲から駐車場やバスターミナルの視界を遮る場合には、乗鞍高原の石材を活用します。
- ・ アスファルト下へ外縁部から雨水浸透を促すことで、路盤層下の土中に生息する生物及びバクテリアへのダメージを削減でき、多少でも湿潤であれば温度上昇も緩やかに抑える事が可能なため、雨水の浸透や蒸散に配慮し、局地気候的な影響にも配慮します。

■サイン

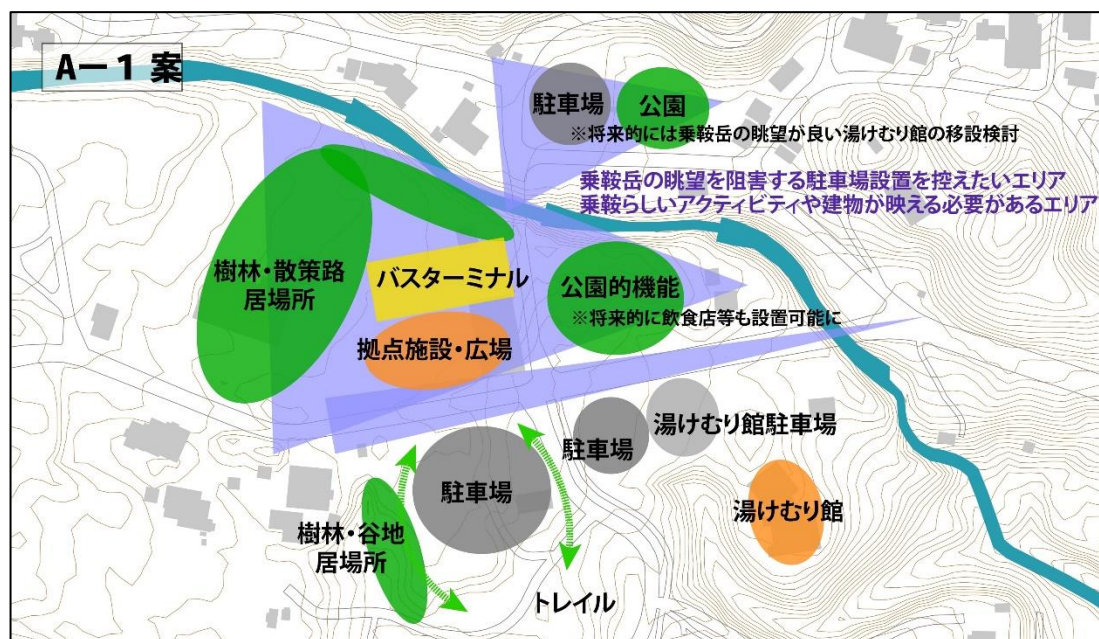
- ・ 誘導標識や案内看板等は掲示すべき内容を吟味し、分かりやすさに配慮し、全体的に統一感を持たせるよう総合的なサイン計画を行った上で、ランドスケープの添景としても魅力的になる良質なサイン設置を行います。

5.4. 拠点としての土地利用(事業用地)の検討

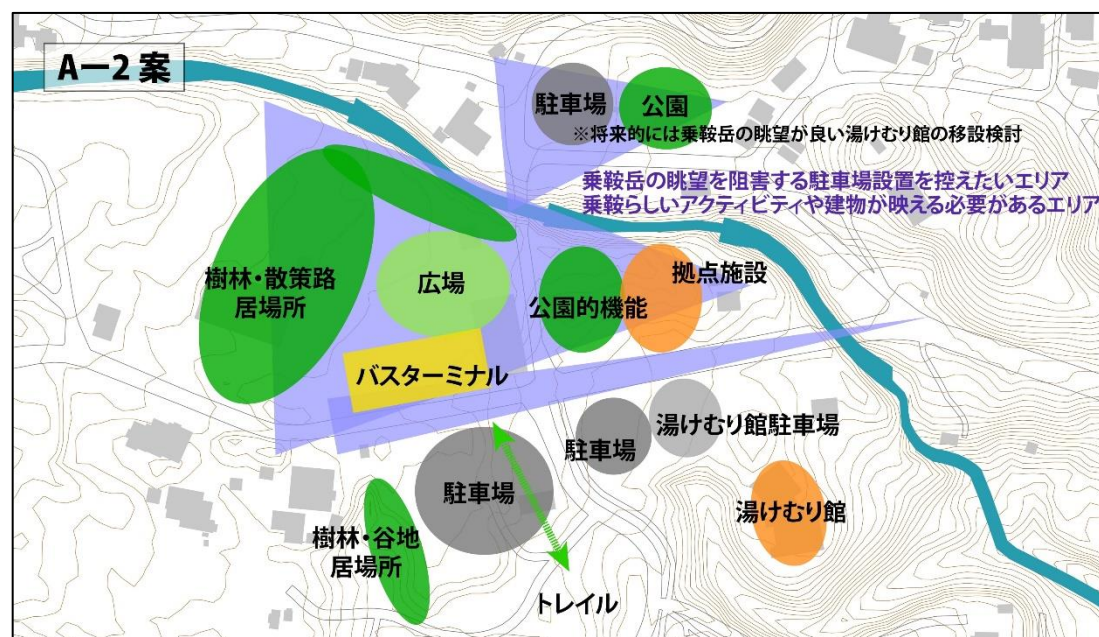
■中長期的に4か所の市有地をどう生かすかの検討

バスターミナルの配置は、全体構成を決定する鍵になります。バスターミナルを現状の敷地とするA-1、A-2案、旧シャレー乗鞍跡地のB-1案、旧湯けむり館跡地のC案、現湯けむり館のD案を比較検討しました。

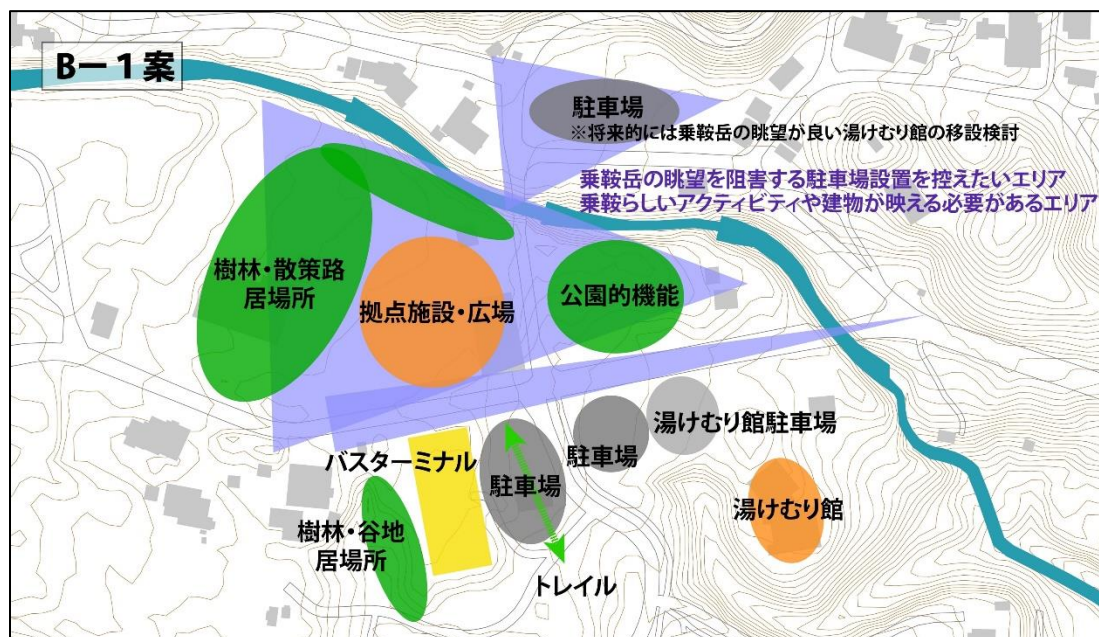
A-1案は、バスターミナルとゼロカーボン拠点施設、広場が近接して利便性、管理運営の効率性が良く、楽しむ人々の風景を表(県道側)に可視化できます。駐車場は県道を挟むため、安全な歩行者動線の確保や旧湯けむり館跡地からの眺望を魅力的にするバスターミナルの修景が課題となります。



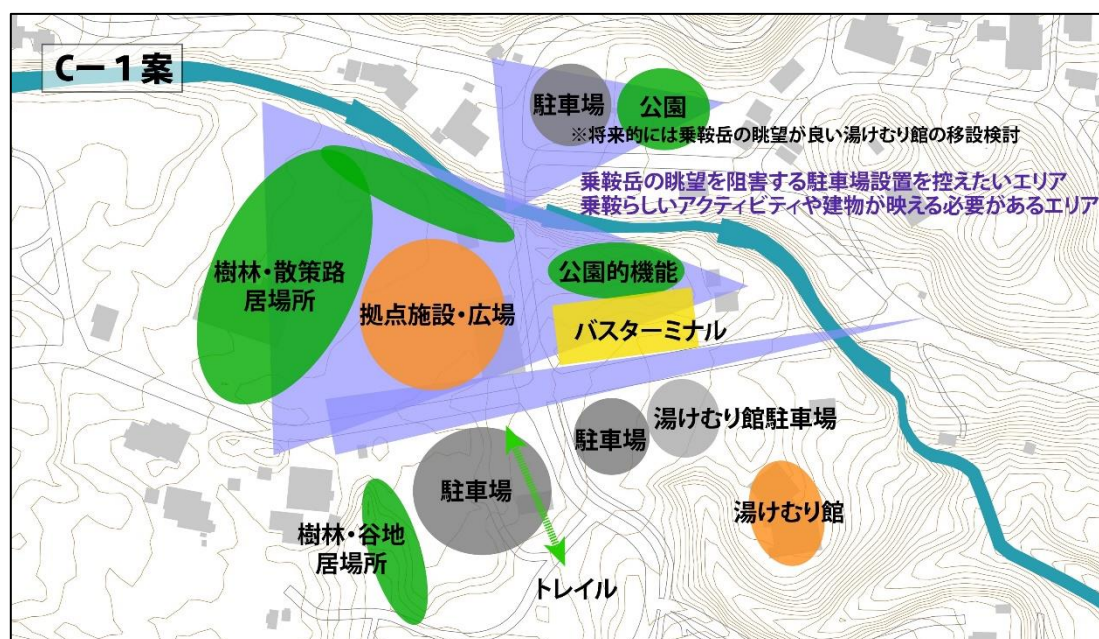
A-2案は、県道沿い北側へのバスターミナルの配置により、県道からの景観に悪影響を及ぼし、拠点施設が離れて不便となる問題があります。また、広場と拠点施設の関係性が弱くなり、バス出入口の地形差の解消等の問題も残ります。



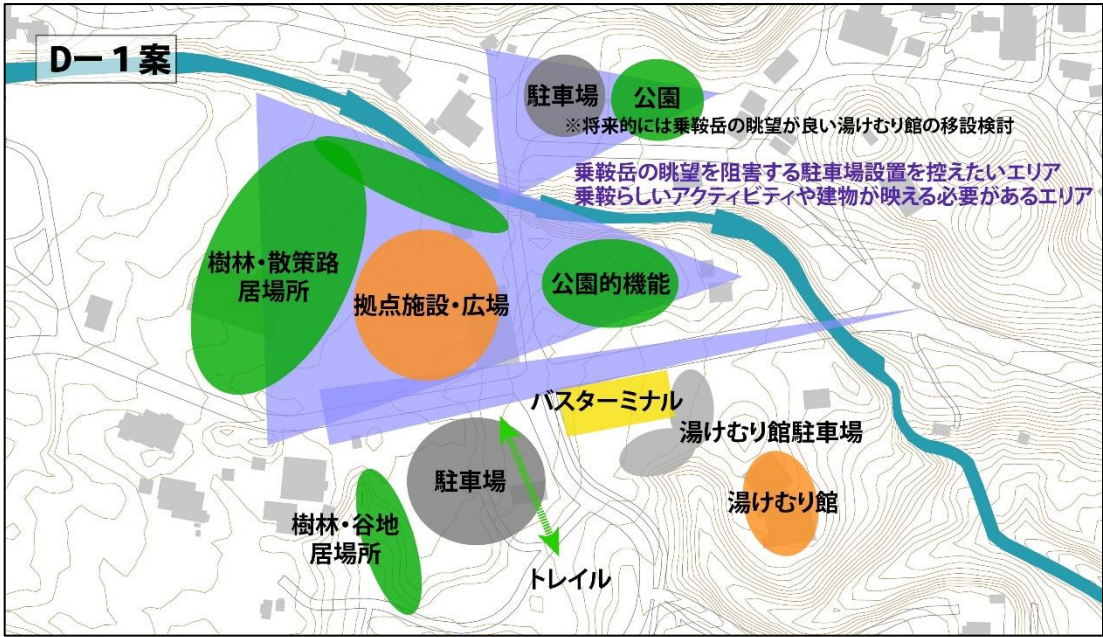
B-1 案は、バスターミナルを旧シャレー跡地の南とした場合で、バスターミナルや駐車場を南側にすべて集約できる景観的には好ましい配置ですが、駐車場台数の確保、バスターミナルと拠点施設の機能分離により利便性が低くなるという問題があります。



C-1 案は、拠点施設と広場を現在の敷地に、バスターミナルを旧湯けむり館跡地に配置した場合で、拠点施設と広場の面積が大きくとれるのは利点ですが、県道からの眺望に対する悪影響が大きく、拠点施設とバスターミナルの機能分離による利便性の低下、乗鞍岳の眺望の良い場所の公園的機能の面積が少なくなるという問題があります。



D-1 案は、拠点施設と広場を現在の敷地に、バスターミナルを現湯けむり館跡地に配置した場合で、拠点施設と広場の面積が大きくとれる利点はありますが、拠点施設とバスターミナルの距離が離れ利便性が下がり、駐車場、拠点施設、バスターミナルを結ぶ動線の関係性、県道からの景観への悪影響、駐車場台数が確保できない、湯けむり館との関係性に関して問題があります。



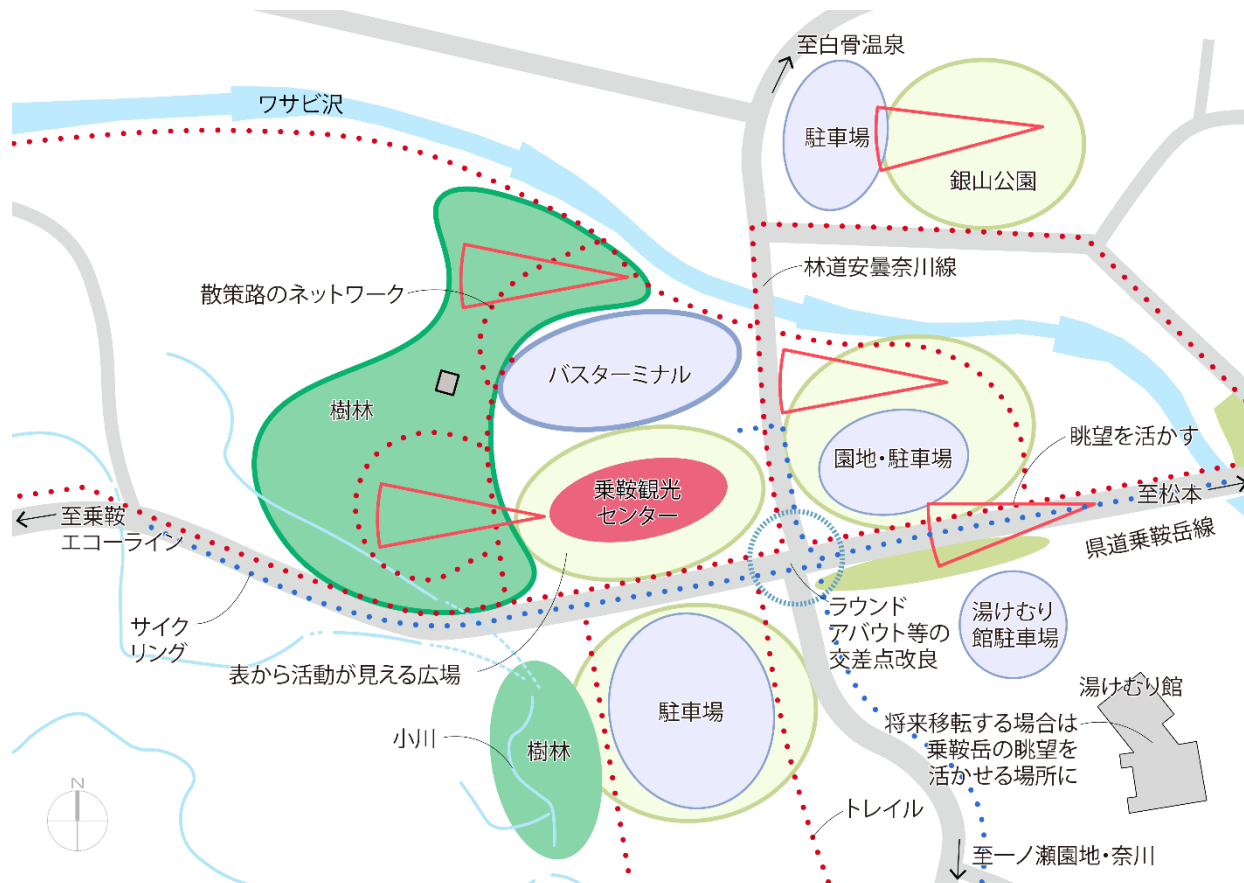
5つの配置案の評価を整理したものが下表となり、総合的な観点から A-1 案が最も優れた配置となります。

表 5-1 各配置案の評価

配置する機能	評価項目	A-1	A-2	B	C	D
バスターミナル	ゲートウェイとしての景観形成上、バスが表から見えなくなっているか	○	×	○	×	×
	旧湯けむり館からの見え方	△	×	○	×	△
駐車場	拠点施設との距離が近く利便性が高いか	○	△	△	○	○
	駐車場台数の確保	○	○	×	○	○
拠点施設	バスターミナルと一体性が確保でき利便性が高いか	○	×	×	△	×
	表から活動が見えるか	○	○	○	○	○
広場・園地	表から活動が見えるか	○	×	○	○	○

以上により、A-1案を軸に配置を検討することとします。

拠点としての機能配置のイメージ



■観光センター再整備の立地

拠点施設の立地については、現観光センターの敷地を基本とし、屋外の滞在やアクティビティができる広場的機能と合わせて整備します。

■憩いの場、滞在の場の創出

拠点施設に隣接して憩いの場、滞在の場を創出するとともに、樹林や小川、乗鞍岳の眺望に優れた場などは積極的に憩いの場、滞在の場、散策道を整備します。

■眺望の場の創出

乗鞍岳の眺望の優れた場所には、眺望を楽しめるデッキや園地等、写真を撮影するのに適する工夫を施します。

■バスターミナルの設置

バスターミナルの立地は、景観的に支障のない場所に配置することを基本としますが、利用者の利便性や建設コストや維持管理コストを考慮し、総合的な観点から立地を定めることとします。乗鞍岳の眺望が優れた場所からバスターミナルが視界に入る場合には、特にランドスケープ、景観に配慮し良好な景観となるような工夫をします。

■駐車場

駐車場は、拠点施設、憩いの場、乗鞍岳の眺望が優れる場所からの視界に入らないようにするため、樹林で隠れる県道の南側への設置を基本とし、中長期的にも県道の南側へと誘導していくこととします。県道の北側に配置する場合には、駐車場が視界に入らないよう目隠しや植栽、外構等により良好な景観形成に資するものとします。

■将来的な土地利用

湯けむり館の改築時には、乗鞍岳の眺望に優れた場所への移転等を将来の選択肢の一つとして視野に入れます。

■道路環境の向上

バスは現状でも林道安曇奈川線を利用してバスターミナルに入っていますが、ゼロカーボン拠点整備においてもこの道路がバスのアクセスに利用される場合は、林道の拡幅や拠点施設の敷地のセットバックにより歩道を確保する等、より安全な交通環境を整備することが必要です。

また、十字路についても食い違いをなくするような道路形状への改善や、長期的にはラウンドアバウトの導入等を検討することが必要です。

■電線・電柱等の景観配慮

乗鞍岳の眺望を阻害している電線・電柱等については将来、地中化等の景観対策の検討が必要です。

6. 乗鞍観光センター再整備基本計画

6.1. 基本的な考え方

基本計画では、基本構想の中で短期的に実施するもの、特に核的な施設となるゼロカーボン拠点機能を併せ持つ観光センターを具現化するための設計条件を明確にします。

《基本計画》

- ・拠点施設に導入すべき機能の検討
- ・駐車場の検討
- ・最適な環境配慮型二次交通システムの導入検討と拠点施設との関係性検討
- ・機能配置の検討
- ・施設計画の検討
- ・施設における ZEB 化導入計画
- ・コロナ禍、アフターコロナを見据えた在り方
- ・デジタル化時代(スマート化等)への対応

6.2. 拠点施設に導入すべき機能の検討

■ヒアリング・現地調査・現地実験を踏まえた導入機能

ヒアリング・現地調査及び現地実験では、乗鞍岳の眺望や自然を活かした場、雨天時にゆっくり過ごせる滞在機能、飲食・買物等の目的機能が求められています。

《ヒアリング》

- ・自然を活かし、乗鞍岳の眺望を活かす。
- ・ゆっくり過ごすことができ、雨の日でも過ごせる滞在機能
- ・飲食、買い物等目的地になる機能
- ・案内、交通、活動、交流等様々な拠点機能

《現地調査》

- ・周辺の谷の地形と小川・森等の自然資源、乗鞍岳の眺望を活かす。
- ・ゆっくり過ごせる場を創出する。
- ・駐車場、標識、電線等ゲートウェイとしての景観形成

《現地実験》

- ・眺望を活かす。
- ・藪化した森の活用
- ・ゆっくり過ごせる場づくり
- ・焚火、コーヒーなどのアクティビティ
- ・ターフによる場所の可視化

《基本計画への反映》

- ・乗鞍岳の眺望や自然を活かした場づくり
- ・ゆっくり過ごすことができる滞在機能
- ・雨天時の滞在機能
- ・飲食・買物等の目的機能
- ・案内、交通、活動、交流等様々な拠点機能
- ・ゲートウェイにふさわしい景観形成
- ・ゆっくり過ごせる場所を表に可視化

■ワークショップによる導入機能のまとめ

ワークショップでは導入機能を4つの機能として集約しました。	
«ワークショップ・意見交換会のまとめ» ・導入機能を4つに集約 ① ゼロカーボン拠点機能 ② 案内・誘導機能 ③ 交通機能 ④ 滞在・交流機能 ・自然保護センターの閉館を受けた対応	«基本計画への反映» ・4つの導入機能の具体的な内容について整理 ・自然の紹介や案内機能

4つの導入機能の内容について、以下のとおりまとめました。

6.2.1. ゼロカーボン拠点機能

ハード
«建築・設備» ・長期使用できる建物 ・ゼロカーボンパークのシンボルの整備 ・建物の ZEB 化 ・高断熱仕様の外壁、屋根、窓の採用 ・太陽光、温泉等再生可能エネルギーの利用、リアルタイムの表示 ・空調システム、照明、蓄電池の採用 ・LED、高効率機器等の省 CO2 設備の採用 ・環境省「光公害対策ガイドライン」に配慮した夜間照明、誘導灯の採用 ・夜間には照明が消える自販機ライトの配慮 ・季節利用に応じ間仕切り等による利用床を可変する工夫 ・石・木等地域材の活用
ソフト
・エコツーリズムの推進 ・脱プラ・ごみゼロエミッション等の取組みの推進・見える化 ・薪の調達等木の駅事業との連携 ・子供たちへの解説、学び ・ゼロラボ活動の拠点としての利用 ・ゼロカーボン研修の受け入れへの対応

6.2.2. 案内・誘導機能

分かりやすい案内標識・サイン
・各種案内標識・サイン等の統一
ワンストップの総合案内と誘導
・建物内部全体が見渡せるホール

- ・分かりやすい総合案内・ツアーデスクカウンター
- ・自然・観光・地域・アクティビティやイベントの案内、災害等の最新情報の提供
- ・最新技術を活用した分かりやすい案内表示、ライブカメラ等の映像
- ・事業者との連携

ビジターセンター的機能

- ・地域の自然・歴史・文化の紹介
- ・展示・発信等最新技術の活用
- ・自然観察・保護活動の拠点

6.2.3. 交通機能

乗鞍高原らしい交通結節点

- ・景観と安全に配慮した交差点改良

観光センター横の県道は直線状でスピードが出やすく、県道を渡る歩行者の安全性を確保することが課題となっています。県道に歩道橋を架橋することも考えられますが、費用、維持管理、冬場の安全性の確保など問題が多く、県道の自動車通行の速度をいかに落とすかがポイントとなります。また、歩道の設置はむやみに数を増やせるものではないため、自動車の減速を図るために交差点へのラウンドアバウトの設置が有効となります。ラウンドアバウトは、安全性の向上のみならず、乗鞍高原の景観向上にもつながるため、安全確保と景観創造を担うようにラウンドアバウトの設置を今後検討するものとします。

フランス Saint-Gervais-les-Bains 村のラウンドアバウト



写真出典：<https://www.actumontagne.com/sports/tour-de-france-2023-les-alpes-bien-servies/>

マイカー駐車場

- ・環境負荷を低減する分散型駐車場
- ・シャレー跡地をメインにした周辺駐車場の有効利用

- ・道路横断等歩行者の安全確保
- ・できるだけ車を見せない外構
- ・有料化の検討、車中泊問題の解消
- ・RV パークの検討
- ・激減する冬季利用への配慮

バスターミナル

- ・環境に配慮した適正規模
- ・バスを見せない配置
- ・林道安曇奈川線の拡幅、機能的な動線(路線・シャトル・周遊バス)
- ・快適な待合、早朝利用への対応
- ・グリーンスローモビリティの基点
- ・格納庫、EV ステーション
- ・電動自転車の貸出

6.2.4.滞在・交流機能

多様な滞在・過ごし方の創出

- ・自然を楽しむ姿やアクティビティが表から見える配置
- ・のんびり広場など乗鞍岳の眺望・自然を満喫してゆっくりできる場
- ・周辺の森や水辺を活かした自然観察、自然散策の場
- ・地域の薪を使った焚火体験、テイクアウト、自然の中で遊べる場所
- ・地産地消のカフェやレストラン
- ・アクティビティや思い出を深めるショップ(レンタル、物販等)
- ・ワーケーションの場にもなるラウンジ、ロビー、多目的ホール
- ・憩いの場となる薪ストーブのある場
- ・雨の日にも過ごせるライブラリー(環境・地域・山等)

滞在・暮らしの両方に関わる機能

- ・講座、制作体験、展示、イベント、地域活動等ができる多目的スペース
- ・子供たちの学びの場
- ・Wi-Fi、プレゼン設備等
- ・イベントへの対応

6.3. 駐車場の検討

■駐車場の現状と駐車台数の考え方

駐車場の利用状況については、繁忙期を除いて観光センター前の第 1 駐車場で収まっていますが、繁忙期の休日等は、第 2 駐車場や旧シャレー跡地臨時駐車場、第 3 駐車場も利用されています。実態調査ではお盆の時期(8/13)でも周辺駐車場には余裕がありました。またシルバーウィークでは旧シャレー跡地臨時駐車場、第2駐車場がほぼ満車、第3駐車場は20台程度の利用がありました。駐車場台数の整備の目安としては、現状程度を目安にして良いと思われます。

表6-1 お盆の時の鈴蘭周辺駐車場の利用状況 (2022.08.13)

時間	第1P	シャレー跡地P	第2P	湯けむり館P
7 時	85	8	1	3
8 時	111	8	1	6
9 時	138	8	1	14
10 時	133	7	1	26
11 時	118	6	0	35
12 時	101	5	0	41
13 時	74	5	0	25
14 時	86	5	0	19
15 時	55	5	0	16
16 時	51	4	0	18
17 時	42	7	0	22

観光センター周辺の駐車場台数の合計は、現在約 350 台であり、1台当りの平均乗車人数を 2 人とすると、一度に 700 人程度の容量があることになります。畳平行きのバスの利用者は 1000 人を超える日も年間数日あり、鈴蘭周辺だけで駐車場を確保することは困難となっており、今後も容量 400 台の第 3 駐車場や第 4～第6駐車場等の活用を行い、鈴蘭周辺の滞在の魅力向上を図るために、鈴蘭周辺の駐車場面積を増やさないこととします。

一方、駐車場の容量を現状より大きく低下させてしまうことも、乗鞍高原のゲートウェイとしての新観光センターにアクセスしにくくなり、乗鞍観光にとってマイナスに働いてしまうおそれも大きいため、本計画としては容量の現状維持又は若干の減少に留めることとします。

湯けむり館の駐車場については、現在 77 台の駐車スペースが確保されていますが、ゆとりがあるため駐車スペースの効率化も検討し、湯けむり館専用の駐車スペースを確保しながら、駐車スペースを有効利用できる方策を検討します。

また将来、湯けむり館改築等の状況の変化がある場合には、自動車による来客の変動を考慮しつつ、第 2 駐車場、銀山公園、湯けむり館跡地などの総合的な土地利用方策を検討し、景観を阻害しないような駐車場の再配置を行うことで鈴蘭地区の魅力向上に資する配置を行うものとします。

お盆の時の第1駐車場(8/12)



シルバーウィークの時の第1駐車場(9/17)



お盆の時の第2駐車場(8/13)



シルバーウィークの時の第2駐車場(9/17)



お盆の時の臨時駐車場(8/12)



シルバーウィークの時の臨時駐車場(9/17)



お盆の時の湯けむり館駐車場(8/13)



シルバーウィークの時湯けむり館駐車場(9/17)



ヒルクライム大会時には、観光センター駐車場が会場となるため周辺への誘導が行われています。旧湯けむり館跡地も臨時駐車場として使われていますが、駐車区画がないためランダムに駐車されています。

ヒルクライム大会時の旧湯けむり館跡地(8/28)



ヒルクライム時の第2駐車場(8/28)



■冬季の利用

冬季の利用

冬季の駐車場利用については、新観光センターの施設利用者のために、冬場は発着台数が少ないバスターミナルの利用等を行い施設の冬季利用の利便性に配慮します。

冬季の駐車場の様子



■駐車場の有料化

駐車場の有料化

駐車場については、鈴蘭周辺等の草刈り、樹木剪定を始めとした維持管理や駐車場維持管理費にも充当できるよう、グリーンシーズンについては有料化を検討します。

■RV パーク

RV パークについて

ゴミ捨て、生ゴミが誘因するクマ等の出没により車中泊がこれまで問題となっています。駐車場の有料化を検討する中で、既存の問題の解決方法を探り、車中泊の管理や、問題の解決に目途がついた場合には、車中泊が可能な RV パークの設置を検討します。

■イベント時の利用

イベント時の利用
乗鞍ヒルクライム等のイベント時において、現在の観光センターの駐車場が利用されていますが、新観光センターやバスターミナル、新たな駐車場においても、自転車の滞留場所や動線に配慮しイベント時にも使いやすい工夫をします。

■自転車利用への配慮

駐輪場、自転車スタンド
サイクリングのメッカとして、駐輪場や自転車スタンドも適切に設置します。

6.4. 最適な環境配慮型二次交通システムの導入検討と拠点施設との関係性検討

グリーンスローモビリティ、E-bike、EV 自動車、EV バス、車両格納庫など拠点施設を基点として使うため、拠点施設の近くに配置します。

バスレーンと一体化させ、利用者にとって利便性の高い計画とします。

グリーンスローモビリティ	
国土交通省では、グリーンスローモビリティを時速 20km 未満で公道を走ることができる排気ガスを出さない電動車を活用した小さなサービスと定義しています。略してグリスロとも呼ばれます。電動車を活用した環境に優しい移動サービスで、ゆっくりと走り景色を楽しめ、重大事故の発生リスクを抑制します。同じ定員の車両と比較して小型、開放感をもたせる、乗降しやすい等の特徴があるとされています。最高時速 20km 未満の車両は道路運送車両の保安基準により、窓ガラスやシートベルトなどの装着が免除されるという緩和項目があります。 ゆっくり走るので周囲の景色を楽しみながら、車内や沿道とのコミュニケーションが取れることも特徴です。乗鞍高原をゆっくり走り、車窓から見える景色を楽しみながら乗鞍高原の魅力ある場所を巡る、解説を聞きながら周遊する、冬は例えば現在は通行ができない一の瀬方面をグリーンスローモビリティで巡るなどの乗鞍高原ならではの楽しみを付加価値として組み合わせることで乗鞍高原滞在の魅力向上につなげることができるため、周遊ルートや付加価値サービスと合わせて導入を検討します。	
	
写真出典: http://nikko.4-seasons.jp/	写真出典: https://evm-j.com/

6.5. 配置計画の検討

■観光センター・バスターミナルの配置の検討

基本構想における土地利用の検討結果を踏まえ、ゼロカーボン拠点施設、バスターミナル、広場を現行の観光センターの敷地に整備する方向で具体的な配置計画について検討を行います。

現状は、バスターミナルが敷地の南側、観光センターは角地、駐車場が観光センターの西側にあり、車中心の環境になっています。駐車場の収容力はシャレー奥の20台を含めると最大350台程度ですが、使われる日はほとんど無いため現状の必要台数は330台程度です。

また、トレイルや散策道はネットワーク化されていません。新しい拠点施設においては車中心の場から人中心の場所へ転換するために、拠点施設の周りに園地を設けるとともに散策道のネットワークを広げ、自然とのつながりを形成できる配置計画を目指します。

現状の配置



十字路の道路構造の敷地に対して、現状以外のパターンでバスターミナルを配置する案は、県道乗鞍岳線に面する A 案、林道安曇奈川線に面する B 案、C 案が考えられます。

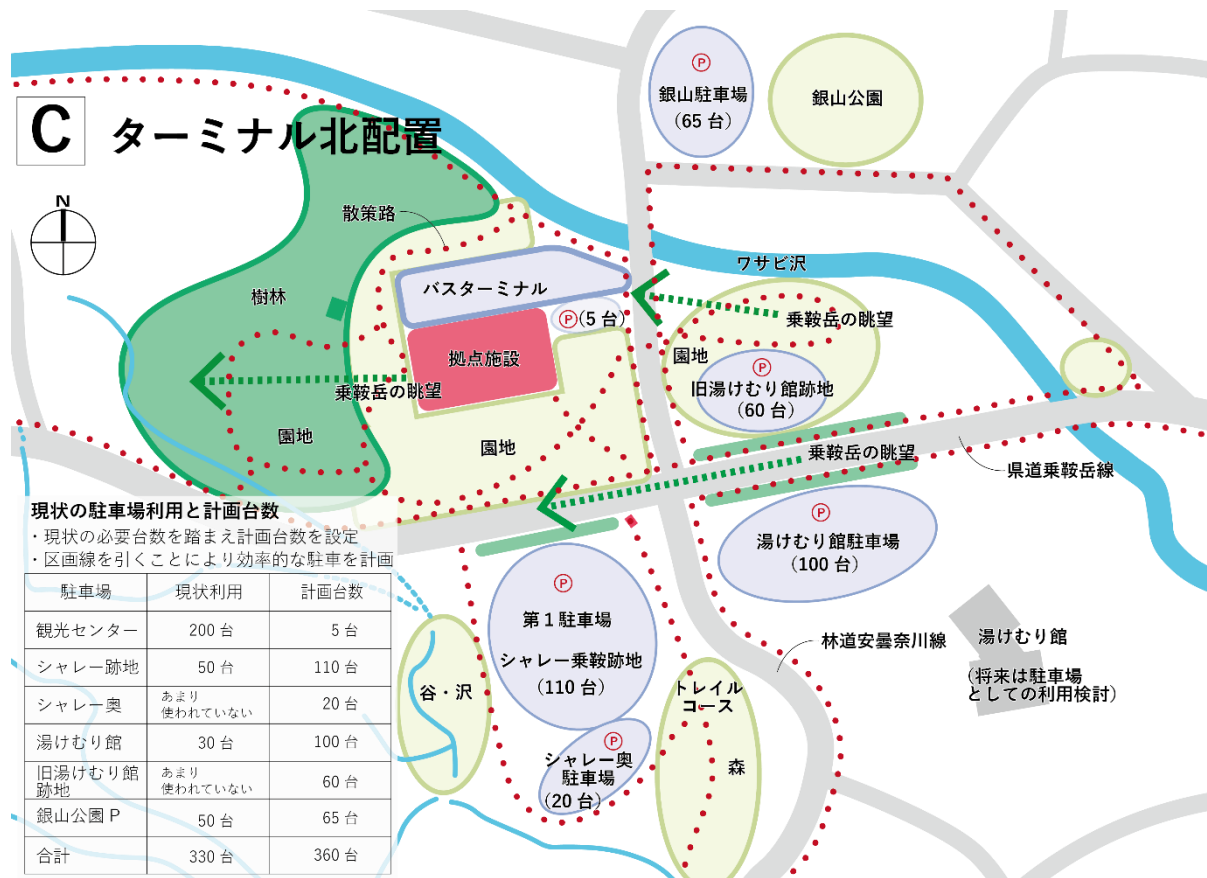
A ターミナル西配置



B 観光センター沿道配置



C 案は、拠点施設を敷地の真ん中、バスターミナルを北側、園地を南側に配置する場合で、バスは裏側で見えなくなり、園地は表に出てきて、楽しむ人の風景が可視化されます。建物の引きも取れるのでゆったりした環境を創出できます。園地や森の緑空間も全体的につながり、散策道のネットワークが形成できます。



3つの案の評価を整理したものが下表となり、機能的、景観的に C 案が優れていると考えられます。

評価項目		A	B	C
駐車場	駐車場のキャパシティ	○	○	○
	自然景観への配慮	×	○	○
バスターミナル	バスの出入りのしやすさ・円滑性	○	○ 道路拡幅必要	○ 道路拡幅必要
	乗鞍岳の眺望や自然景観に配慮した配置	△	△	○
建物	引きの距離がありパッと見てわかりやすい	○	×	○
	園地	○	×	○
園地	アクティビティ・体験・活動が表から見える	○	×	○
	回遊性・人の流れをつくる	×	△	○
	連携やイベント等周辺とのつながりを創出する	×	△	○
	ゆっくりと過ごせる場が多様で豊か	△	○	○
総合評価				○

以上により、C 案を軸に建築計画を検討することとします。

6.6. 建築計画の検討

■基本方針

◇概要

本施設はゼロカーボンパークとして国に登録された乗鞍高原の鈴蘭地区に位置しています。現観光センターは長い年月を経て老朽化が進み、利用形態の変化による機能の不便さが問題となっていることから、これらの問題を解消するため、観光案内、交流、バスターミナル機能を持つ、乗鞍高原の新たな拠点施設として計画します。

◇利用計画

施設は観光客や地域住民、事業者など、様々な人々が利用し、多様な活動や交流を通して、一年を通して活気のある場となることが求められています。そこで、誰もが使いやすく、居心地の良い場とし、災害時には地域の指定避難所としても機能するよう、自由に活動できる広い空間の設置と移動間仕切りによるフレキシブルでユニバーサルな空間を計画します。

機能的には、エントランスホールから分かりやすい位置に総合案内があり、エントランスホールと一体的になるようにロビーを計画し、多人数時の待合等に対応できるようにします。これらの共用空間からカフェ、ショップ、ラウンジ、ライブラリー、レストラン等の各スペースが緩やかにつながり、来訪者のバス待ち、観光・自然の情報収集・学び、飲食・買物・休憩、次の行動の準備等、一連の多様な行動に対して、自然に対応できる空間計画とします。また、ワーケーションや展示・講演会等のイベントにも対応できる多目的スペースと会議室をロビー空間と一体的に計画します。

内部空間は、エントランスホールやロビーから見て分かりやすい構成とするとともに、使い方の多様性や将来の機能更新に対して柔軟性を持った計画とします。

◇構造計画

構造計画では環境に配慮し、地域産材を積極的に利用した木造建築を基本とします。また、多雪地域としての対応や指定避難所として機能する強度を有する、安全で強固な建物を計画します。

◇環境計画

環境面では高气密、高断熱による外皮性能の向上と、高効率型の設備機器や未利用エネルギーを積極的に活用し、ZEB 達成を目指す計画とします。また、冬季の利用者減に伴う暖房必要空間の縮小に間仕切り等で選択的に対応できる平面計画とします。

◇外構計画

外構計画では広場や園地、植栽を配し、緑豊かで心地良い屋外空間を計画します。また、屋外での活動や各種イベントにも対応し、地域に開かれた活気のある場とします。

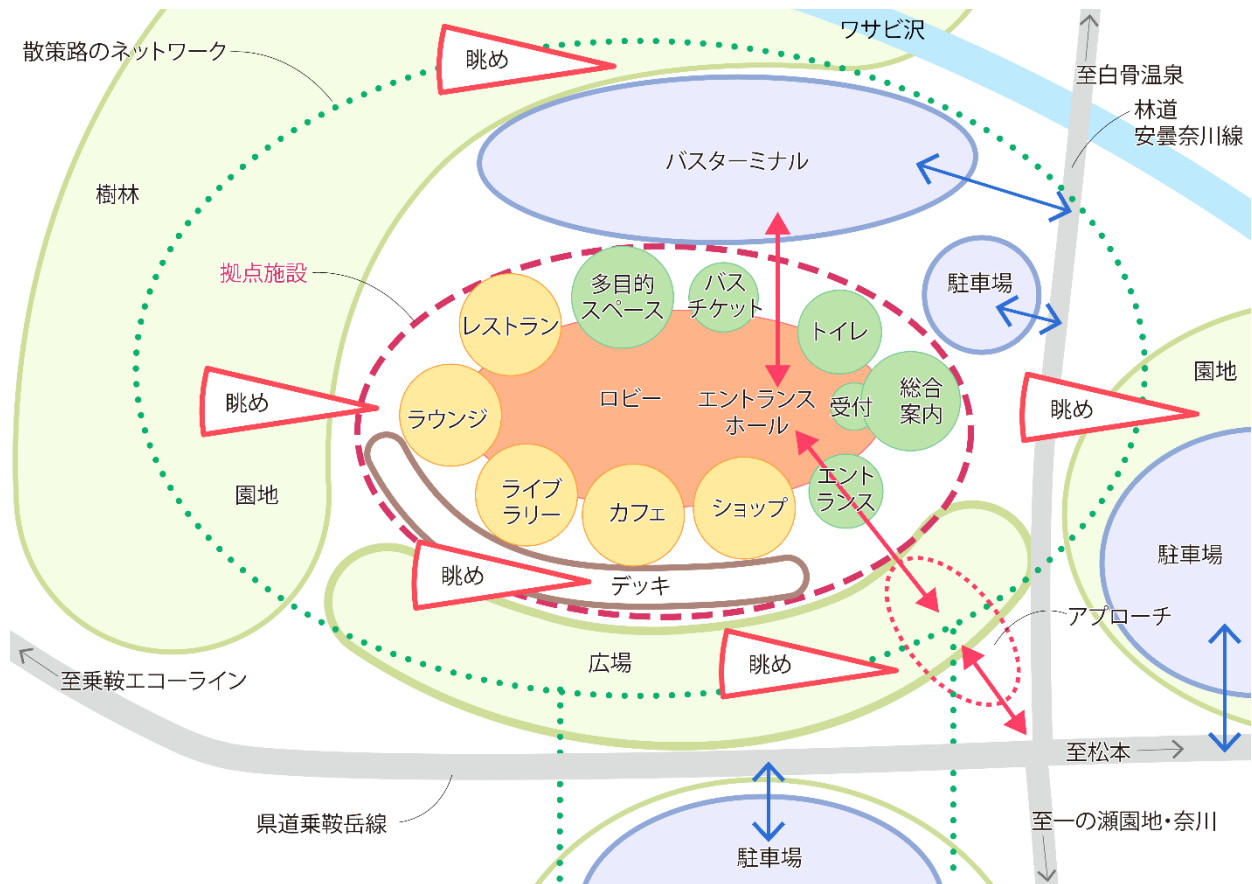
バスターミナルはシャトルバスや路線バス、グリーンスローモビリティに対応し、円滑で安全な利用ができる使いやすい計画とします。また、EV 充電スタンドや駐輪場を設置し、様々なモビリティに対応します。

駐車場を敷地外に設けて、必要な車両台数を確保し、歩車を分離して安全で環境に配慮した計画とします。

■建築計画

1.建築計画概要
1-1.共通 ・建築場所:長野県松本市安曇乗鞍地区(中部山岳国立公園乗鞍高原) ・用途地域:都市計画区域外 ・防火地域:なし ・敷地面積:約 18,000 m² 1-2.計画建物-1 拠点の核的施設 ・主要用途:観光案内・交流・バスターミナル施設 ・構造規模:木造 地上1階/地下0階 ・重要度係数:1.25 ・延床面積:約 1,200 m² 1-3.計画建物-2 ・主要用途:自動車車庫 ・構造規模:鉄骨造 地上1階/地下0階 ・延床面積:約 130 m² 1-4.計画建物-3 ・主要用途:駐輪場 ・構造規模:アルミ既製品 地上1階/地下0階 ・延床面積:約 40 m²
2.建築計画ゾーニング
2-1.エントランス・受付 ・総合案内や観光展示コーナー、バス受付を設け、利用者に必要な情報を集約 ・中央に独立式の暖炉を設置し、人々が集い、交流が育まれる暖かみのある空間を創出 2-2.総合案内・観光案内コーナー ・観光案内やツアーデスクを設け、利用者に必要な情報をワンストップで提供 ・観光に関わる様々な展示や情報をコンパクトにまとめて配置 2-3.ロビー ・自由な使い方ができる仕切りのない広いワンルーム空間とし、展示やライブラリー、ラウンジなどのコーナーを設けて、自由に利用できる様々な居場所を設置 2-4.レストラン ・周辺を眺められる見晴らしの良い客席と機能的な厨房 ・誰もが調理場として利用できる開かれたキッチン 2-5.多目的スペース ・移動間仕切りによりロビーとの一体利用も可能なフレキシブルな空間 ・会議やワークスペース、工房など様々な用途で利用できるマルチ空間 2-6.ショップ ・外部とつながり、内外を使った利用が可能 ・利用形態に応じて自由に間取りを変化できるフレキシブルな空間

建築計画ゾーニングのイメージ

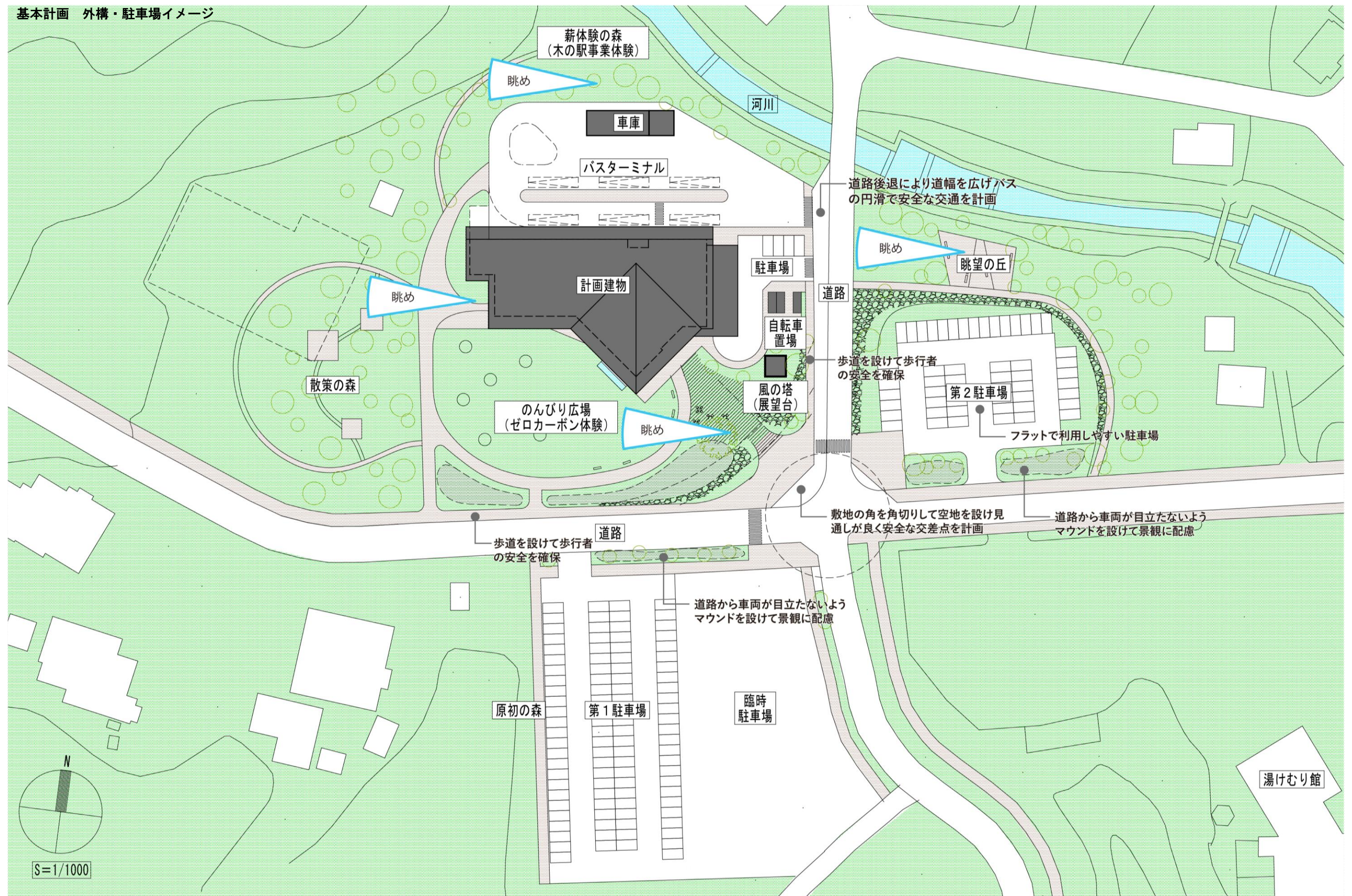


エントランスからバスターミナルへの動線上で来訪者が総合案内や情報提供のサービスを受けられ、滞在の間に自然を眺めながら館内での飲食、買い物、休憩、学び、ワーケーション、館外のデッキ、広場、散策等、快適に過ごせる一連のつながりを大事にしたゾーニングとします。

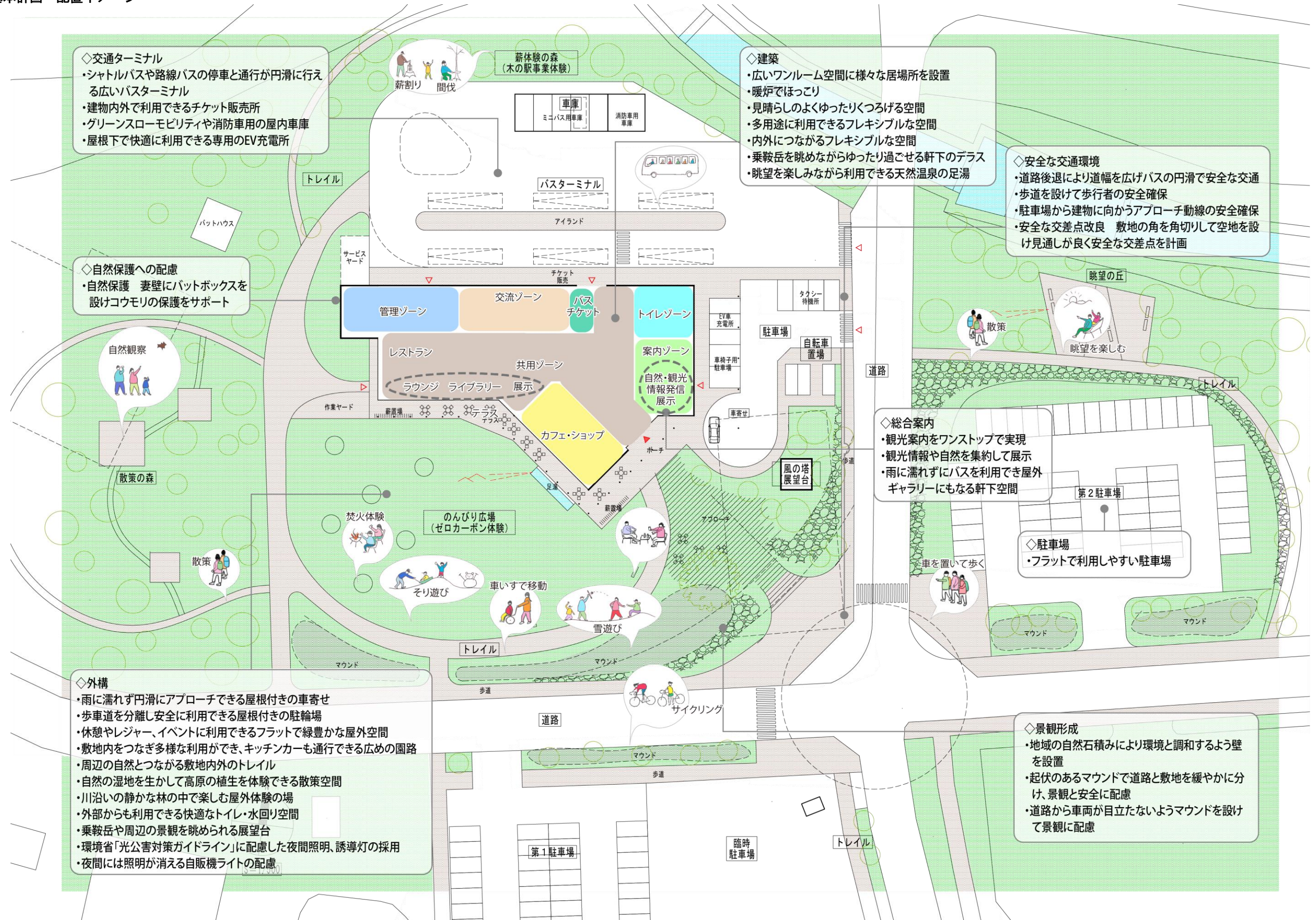
3. 仕様・仕上げ概要(例示)	
3-1. 計画建物-1 外部 ・屋根 : カラー鋼板立平葺き ・外壁 : WP+小幅板、外装厚塗材 ・テラス:再生木デッキ	☐ 内部 〈ロビー、ラウンジ〉 ・床 : UC+単層フローリング ・壁 :珪藻土仕上材 ・天井:WP+小幅板 〈多目的スペース〉 ・床 : UC+単層フローリング ・壁 :珪藻土仕上材
3-2. 計画建物-2 ☐ 外部 ・屋根 : カラー鋼板折板葺き ・外壁 : カラー鋼板スパンドレル	☐ 内部 ・床 : 防塵塗装 ・壁 : フレキシブルボード ・天井 : 表し

4.所用スペースと想定面積			
スペース	利用人数	想定面積 (㎡)	利用イメージ・仕様等
風除室(2)		40	20 ㎡×2
エントランスホール	50 人程度 の待合	180	・全体がパッと分かる視認性 ・観光情報の表示等情報収集ができる ・ゼロカーボンの取組み等の表示 ・バスの待合ができる ・チムニーを囲める
受付	客3人 スタッフ2 人	15	・ツアー、アクティビティの案内 ・カウンター、イス席、書棚
事務所	5 席程度	30	・ツアーデスクと近く対応を効率化 ・書棚
自然・観光情報コーナー		80	・自然、観光、現地、災害・危険情報 ・ビジターセンター的機能、パネル展示、デジタルサイネージ、展示
ショップ	テナント	80	・おみやげ、アウトドア、地域物産等 ・レンタル等への対応
ロビー	50 人程度 の滞留	220	・全体がパッと分かる視認性 ・ライブラリー:8 人程度が座れる ・ゆっくり過ごせるラウンジ ・多目的スペース、会議室と一体的に使え修学旅行等の多人数の利用に対応できる ・冬季の利用が少ないシーズンは区切って面積を縮小することができる
多目的スペース	40 ～ 50 人程度の会 議	90	・ワーケーション、会議、展示、イベント等多目的に使える ・大型スクリーン、プロジェクター
会議室		40	・多目的スペースと一体的に使え、50 人程度の地域の会議等に対応できる
カフェ	20 席程度	80	・眺めが良い ・現状 7 席、外 6 席、フードコート式
レストラン	36 席程度	60	
厨房		80	
オープンキッチン	5 人程度		・ロビーに含む
授乳室		4	
自動販売機置き場		4	
機械室		50	内、倉庫 30
e バイク置場		50	
便所(男子・女子)		100	
バス会社事務所		20	・早朝の閉館時でもチケットが買える
合計		約 1,200	・軒下に屋外を楽しめる開放的なデッキ

基本計画 外構・駐車場イメージ



基本計画 配置イメージ



■設備計画

1.設備計画基本方針
・省エネと創エネにより ZEB を達成します。 ・未利用エネルギーを積極的に活用し CO2 の削減に努めます。 ・指定避難所として機能する設備を計画します。
2.機械設備計画説明
2-1.設備配管計画 □給水設備 ・受水槽+加圧給水ポンプユニット(指定避難所対応) 2-2.消火設備計画 □消火器具、屋内消火栓 2-3.器具配置計画 □給湯設備 ・主給湯 : 空気熱ヒートポンプ給湯器 ・局所給湯: 電気温水器 □排水設備 ・合併処理浄化槽 ・雨水系統: 敷地内浸透(建築工事) □衛生器具 ・大便器: フラッシュタンク式、ウォシュレット、災害対策用レジリエントイレ ・小便器: 低リップ式、センサー洗浄 ・水栓類: 自動水栓 ・洗面器、手洗器: オーバーフローなし
3.空調設備計画説明
3-1.空調設備計画 □仕様 ・エントランス部: 温泉熱・空気熱ヒートポンプエアコン+冷暖房パネル ・一般部 : 電気式空冷ヒートポンプエアコン方式(寒冷地用) ・水回り : 遠赤外線パネルヒーター 3-2.換気設備計画 ・小型全熱交換器、第 3 種換気
4.電気設備計画説明
4-1.受変電設備計画 □高圧引込+屋外型キュービクル式受変電装置 4-2.非常電源設備計画 □一般非常用発電機(指定避難所対応) 4-3. 通信・情報設備計画 □構内情報通信網配線設備(LAN) □放送設備 □テレビ共聴設備 □インターホン設備 □トイレ呼出設備 □ITV監視カメラ設備 4-4.消防設備計画 □自動火災報知設備 4-5.電灯機器等照明計画 □照明

・LED照明 □コンセント 4-6.屋外設備計画 ・屋外庭園灯 ・ソーラータイマー点灯、タイマー消灯
--

5.太陽光発電設備計画
5-1.□太陽光発電装置 ・太陽光パネル:50kW 発電 ・パワコン:5.5kW9 台 ・蓄電池:20kW

■外構計画

1.エントランス-のんびり広場
十字路からのエントランスはお迎えと出会いの場として、高低差のある地形を生かし土留めに乗鞍石等を使いながらゆるやかな斜面をつくり、くつろぐ人々の姿が見えるようにするとともに、アプローチする人の高揚感を高める場とします。ゼロカーボン拠点として、乗鞍高原らしいシンボリックな設えも検討します。 のんびり広場は、拠点施設のデッキと一体的に使え、芝生の中に焚火ができる舗装を施し、くつろげる場とします。のんびり広場の周りは自転車やキッチンカー等も通れる通路とし、多様なイベントができるようにします。県道との間には地形に起伏を施すマウンドで車道と分節化し、ゆるやかな囲まれ感のある場とします。 ヒルクライム大会時には、歓迎イベント会場や、スタート時の自転車動線を考慮した仕上げや設備等の配慮をします。

2.エントランス付近のサービススペース
エントランスの近くに雨に濡れない車寄せ、身障者用駐車場、タクシー待機所、EV 充電所、自転車置き場等を設けます。

3.散策の森-薪体験の森
自然保護センターが解体された後は、既存の森やバットハウスを活かした自然散策の森とします。乗鞍岳の眺めを現状より改善するための中高木の管理については、防風林の役割とクビワコウモリの生息地であることを踏まえた適切な方法により行うこととします。また、北に続いていく森のエリアもワサビ沢の既存散策道と結ぶため一部の民有地の購入を検討し、散策・薪体験の森としての整備を行うとともに、藪化している森の適切な管理を行い、人が安心して快適に歩ける場とします。

4.バスターミナル
バスターミナルは乗鞍岳へのシャトルバス、路線バス、将来の環境配慮型二次交通が使うレーンを想定して計画します。シャトルバスは1度に最大 8 台程度出発する場合があります、混雑時でもスムーズに発着できるレーンを計画します。屋外の待合は雨に濡れないよう建物の屋根に配慮した計画とします。また、冬季や春先はシャトルバスが運行しないため、レーンを閑散期の駐車場としても利用できる配慮をします。

5.林道安曇奈川線の通行空間の向上
大型バスの通行と歩行者の安全な動線の確保に配慮し、敷地をセットバックして歩道を設け、県道乗鞍岳線側にも歩道を設けます。また、林道安曇奈川線の食い違いの交差点の改善が図れるよう交差点改良を視野に関係者と検討を行います。

6.第1駐車場(シャレー跡地)
現在の臨時駐車場を、拠点施設のメイン駐車場として整備します。県道乗鞍岳線との間には車が見えないようマウンド等による緑地帯を設け、駐車場内は舗装、区画線により効率的に駐車できる計画

とします。また、現在の EV 車用の充電機能は新しい拠点施設の敷地に移し、空いた場所を臨時駐車場として拡張し、トレイルコースとの調和に配慮してできるだけ自然に近い形で整備します。

7.第2駐車場(旧湯けむり館跡地)

現在の臨時駐車場を、拠点施設の第2駐車場として整備します。第1駐車場と同様に県道乗鞍岳線との間には車が見えないようマウント等による緑地帯を設け、駐車場内は舗装、区画線により効率的に駐車できる計画とします。高低差のある敷地のため、駐車場の路面はフラットに造成し、土留めには乗鞍石を使い景観に配慮します。上段のワサビ沢側は、散策しながら乗鞍岳が展望できる場として整備します。

8.ユニバーサルデザインへの対応

外構の歩行者空間は、段差がなく、安全に歩ける等、ユニバーサルデザインに配慮したものとします。

9.標識、サイン類

外構に設置する標識、サイン類は今後の周辺の標識やサインデザインの改善を視野に入れ調整や検討を行います。

10.電柱、電線、鉄塔、構造物類

課題となっている敷地周辺の電柱、電線、鉄塔、構造物類については、景観を改善していけるよう関係者と調整し、対応を検討します。

■施設イメージ

東エントランス側上空からの俯瞰イメージ



広場に開いた開放的な建物



十字路側からのアプローチイメージ



暖炉のあるエントランスホールから外部が見える開放的なロビー空間のイメージ



6.7. 施設における ZEB 化導入計画

施設における ZEB 化導入計画
本施設は乗鞍ゼロカーボン拠点施設にふさわしい施設として、快適な室内環境の実現とともに、一次消費エネルギーの収支をゼロにする建物の ZEB 化を目指します。その為に、建物の断熱性能や効率的な設備機器による省エネルギー化を図るとともに、再生可能エネルギーの利用を積極的に図る計画とします。 1. 計画条件 ・地域区分:3 地域 ・建物区分:集会所モデル ・対象床面積:1,200 m² 2. 建物・設備仕様 2-1. 外皮 ・断熱材:高性能断熱材 ・開口部:Low-e 複層ガラス 2-2.空調 ・温泉熱・空気熱ヒートポンプエアコン+冷暖房パネルによる輻射冷暖房 ・電気式空冷ヒートポンプエアコン(寒冷地用) 2-3.換気 ・小型全熱交換器 2-4.照明 ・低消費電力型LED照明機器 2-5.給湯 ・空気熱ヒートポンプ給湯器 2-6.太陽光 ・太陽光パネル:50kW ・蓄電池、パワコン

7. 管理運営方針の検討

7.1. 駐車場有料化の検討

■総合的な見地からの検討が必要

拠点施設の駐車場の有料化はゼロカーボンパーク推進の取組みとして検討事項の一つですが、懸念事項もあるため、総合的な見地から最も良い方法を検討していく必要があります。

問題の一つとして、駐車場の有料化に伴う路上駐車が発生が考えられます。それにより、周辺環境、交通マナーの悪化が想定されます。また、一部の駐車場を有料化した場合に他の駐車場との差が生じ、利用者に混乱を与えることも想定されるため、地域全体の問題として地元関係者と協議しながら検討する必要があります。

また、現観光センター駐車場にはシーズン中に 15,000 台程度の駐車利用があります。尾瀬国立公園の駐車料金は1台 1,000 円/回と設定されており、この駐車料金を参考に有料化した場合、15,000,000 円程度の収入が想定されます。

7.2. 車中泊問題の解消の検討

■車中泊問題を解決するための議論を進める

ゴミの廃棄や夜間の騒音等、車中泊のマナーの問題は観光センター駐車場において長年の課題です。全国的にみると近年はコロナ禍の影響で車中泊ブームが拡大し、今後も増え続けていくことが予測されます。

こうした状況の中で乗鞍高原においても、現在の禁止看板を掲示するままではこの問題を解決することは困難です。車中泊は周りに民家のない適切な場所とインフラ設備が必要なので、今回の拠点施設の整備を機に、車中泊に対応可能な場所や整備内容を共有し、問題解決の道を地域の協力を得ながら探っていくことも一つの方法と考えられます。

7.3. 拠点施設の管理運営

■管理運営

当事者意識の高い適切な運営を行う必要があることから PFI 導入も視野に検討しています。

■メンテナンスコストを抑制できる設計や機械化

将来の補修・修繕費を抑えるため、設計の段階から管理しやすい建物にする必要があります。乗鞍高原は気候が厳しいため、風雨や雪の対策としてシンプルな形状の勾配屋根と深い軒の出、耐久性のある外壁、凍害に強い外部の床、腐食しにくいデッキなど、メンテナンスコストが抑えられる形状と材料を選択する必要があります。

また、積雪量が多いため、屋根の雪が落雪した場合の安全性と建物への影響が軽減できるシンプルな建物形状、突起物がなく除雪しやすい外構等とする必要があります。

■点検

建物維持管理マニュアルを作成し、管理運営に係るスタッフが日常的に施設・設備の安全、健全性を保つために必要な点検を行います。

8. 概算事業費

項目	概算事業費
建築工事(本体・電気設備・機械設備)	約820,000千円
外構工事	約347,000千円
除却工事	約100,000千円
合計	約1,267,000千円

9. 事業スケジュール

令和9年度中に供用開始予定です。
なお、PFI導入も検討しています。

参考文献

- ・安曇村誌 第1巻 自然編（安曇村、平成10年）
- ・安曇村誌 第2巻 歴史 上（安曇村、平成10年）
- ・安曇村誌 第3巻 歴史 下（安曇村、平成10年）
- ・北アルプス乗鞍物語（福島立吉、長沢武、ほおずき書籍、昭和61年）
- ・乗鞍の歴史と民俗（長野県文化財保護協会編、昭和56年）
- ・地域地質研究報告 乗鞍地域の地質（地質調査所、平成7年）
- ・本州中部、乗鞍岳火山の最近1万年間の噴火活動（中村他、名古屋大学年代測定資料研究センター、平成9年）
- ・日本活火山総覧(第4版)52. 乗鞍岳（気象庁編、平成25年）
- ・地質調査総合センター研究資料集 no. 613 日本の主要第四紀火山の積算マグマ噴出量階段図 10 乗鞍岳火山（地質調査総合センター、平成25年）
- ・令和2年度乗鞍高原再整備基本計画策定業務報告書（令和3年3月、環境省信越自然環境事務所）
- ・観光地利用者統計調査（長野県、平成15年～令和3年）
- ・レジャー白書2022（日本生産性本部、令和4年）

10.資料編

■松本市総合計画(基本構想 2030・第 11 次基本計画)

松本市 令和 3 年 8 月策定

松本市のまちづくりの方針を定め、目指すまちの姿やまちづくりの方向性を市民の皆さんと共有するものです。キャッチフレーズは「豊かさと幸せに挑み続ける三ガク都」。重点戦略として「ゼロカーボン」の推進と「DX・デジタル化」が掲げられ、「乗鞍観光センター再整備基本構想・基本計画」に関連する主な施策として、分野 4「環境・エネルギー」、分野 7「文化・観光」があります。

松本市総合計画	基本構想・基本計画の検討事項
分野 4「環境・エネルギー」 4-1 再生可能エネルギーの導入促進 省エネルギー化や再生可能エネルギー導入を促進、温室効果ガスの排出削減を目指す ・市有施設の脱炭素化の推進(新築:ZEB 化) ・環境教育の推進、環境学習などの機会提供 4-2 3R徹底による環境負荷軽減 廃棄物の発生抑制と再利用及び再生利用を推進するなど、資源を大切に、環境に極力負荷をかけない持続可能な循環型社会を目指す ・ごみの削減 ・プラスチック対策 4-3 自然・生活環境の保全 自然の恵みを将来世代につなぐために、生物の多様性や清らかな水と大気、快適な生活環境の保全を目指す ・松本市生物多様性地域戦略の推進 ・希少野生動植物の現状を把握し保護、特定外来生物による生態系被害を防止 ・自然とのふれあいの推進 分野 7「文化・観光」 7-4 変化する時代の観光戦略 地域資源を活かした観光コンテンツを創造するとともに、人々の意識や社会の変化がもたらす新しい旅行需要を取り込み、観光の再生・発展を目指す ・自然や温泉などの質の高い観光資源の活用、アウトドア指向の高まりへの対応など、新たな観光コンテンツの創造による誘客推進 ・スマートリゾートの実現(MaaS、キャッシュレス、ワーケーション環境)	・乗鞍ゼロカーボン拠点施設の ZEB 化 ・環境教育の推進に資する方策 ・乗鞍ゼロカーボン拠点施設の建設工事における廃棄物の発生抑制、再利用 ・環境に極力負荷をかけない計画 ・運営面でゴミ、プラスチック削減を目指す ・生物多様性に配慮した計画 ・希少野生動植物に配慮した計画 ・足ふきマット等 ・自然とのふれあいの推進 ・来訪の目的地となる鈴蘭地区(現観光センターとその周辺)とする ・乗鞍ゼロカーボン拠点施設のワーケーション環境への対応

7-5 世界に冠たる山岳リゾートの実現 旅行者の満足度を高め、リピート化や滞在型に繋げるため、世界水準の観光資源を活かし、山岳リゾートの実現を目指す ・必要な山岳観光施設整備等、魅力の創出と受入環境整備 ・通信環境の整備によるデジタル化の推進、滞在型観光、ワーケーションへの取組み ・山岳情報発信の強化と環境に配慮した持続可能な観光の推進 ・地域間の連携向上に向けた交通アクセス等のインフラ整備 ・乗鞍エリア：ゼロカーボンパークとして、地元住民の意識の向上、電気自動車等の活用や地産地消等の具体的なアクションプランに取り組み、持続可能な山岳観光地の整備推進	・乗鞍ゼロカーボン拠点施設の整備 ・乗鞍ゼロカーボン拠点施設のデジタル化、滞在型観光、ワーケーションへの対応 ・山岳情報、自然情報の発信 ・公共交通の発着点となるバスターミナルの整備 ・EV 拠点の整備
--	---

■松本市ゼロカーボン実現計画

松本市 令和4年8月策定（松本市地球温暖化対策実行計画(令和4年度改訂版)）

松本市ゼロカーボン実現条例に基づき策定する計画で、市民・事業者・行政が気候危機意識を認識・共有し、再生可能エネルギーの最大限の導入など、「緩和策」とともに、気候変動により引き起こされる影響の回避・軽減を図る「適応策」を実施することにより、2050年までにゼロカーボンを実現することを目的とします。

のりくら高原「ゼロカーボンパーク」の具現化	基本構想・基本計画の検討事項
1 再生可能エネルギーの利用促進と地産地消の実現 ・公共施設への再生可能エネルギーの率先導入 2 省エネルギー対策の強化と学びの推進 ・公共施設のZEB等省エネルギー化の推進 ・ゼロカーボンにつながる学習や啓発の推進 3 脱炭素に寄与する社会基盤の構築 ・環境配慮型交通社会の構築 ・3R(リデュース・リユース・リサイクル)の推進による循環型社会の形成	・再生可能エネルギーの導入 ・乗鞍ゼロカーボン拠点施設のZEB化 ・ゼロカーボンが学べる場づくり ・環境配慮型二次交通の拠点 ・建設工事における廃棄物の削減 ・運営面でゴミ、プラスチック削減

■経済・社会をつなぐまつもと環境戦略(第4次松本市環境基本計画)

松本市 令和3年8月策定

松本市環境基本計画は、松本市総合計画の環境面での実現を支え、松本市環境基本条例(平成10年(1998年)3月制定)に基づき策定。本市の環境の保全及び創造を市民、事業者、滞在者、そして行政の協働により、総合的かつ計画的に推進していくもの

経済・社会をつなぐ まつもと環境戦略	基本構想・基本計画の検討事項
【基本理念】 1 自然環境の保全と生活環境の維持 2 持続的発展が可能な社会の構築 3 日常的な地球環境保全の取組み 【目指す環境像】清い水、深いみどりと青い空、豊かで美しい環境を次世代にひきつぐために 【計画の5つの柱】 1 ゼロカーボンに挑むまち(地球環境) 再生可能エネルギーの活用、省エネルギー、歩行者・自転車利用環境の整備 2 資源の循環で新たな価値を生み出すまち(循環型社会) 2R(リデュース・リユース)の優先的な推進 3 誰もが安全に安心して暮らせるまち(生活環境) 適正な土地利用の推進 4 豊かな自然を守り、ともに暮らすまち(自然環境) 優れた自然環境や生物多様性を守り、適正利用を図る自然公園の保護と活用 5 緑・水・文化が生み出す五感に心地良いまち(快適環境) 親しめる水辺の創出 【重点戦略】 1 豊かな地域資源を活用した環境・経済の好循環(環境×経済) ・エネルギー地産地消 ・エコツーリズムの推進 2 社会的課題解決につながる持続可能な地域づくり(環境×社会) 3 環境教育の充実と協働の推進(全ての取組みの基盤) ・ESD視点での環境教育の推進 ・環境にやさしいライフスタイルへの転換の促進	・再生可能エネルギーの活用、省エネ化 ・歩行者・自転車利用環境の整備 ・乗鞍ゼロカーボン拠点施設の建設 工事における廃棄物の削減 ・運営面でゴミ、プラスチック削減 ・既存の未利用地、使い切れていない場所の活用 ・生物多様性に配慮した計画 ・水辺を活かす計画 ・エコツーリズムの推進 ・ESD視点での環境教育の推進

■松本市生物多様性地域戦略

松本市 平成28年3月策定

すぐれた生物多様性を誇る本市の自然環境を保全するとともに、懸念されている生物多様性の損失を防ぎ、再生・創造して未来に引き継ぐため、「多様な環境に育まれた、生きものあふれる豊かな自然の維持と再生」を目指すもの

松本市生物多様性地域戦略	基本構想・基本計画の検討事項
【行動計画】 1 自然環境の保全 ・生態系に配慮した事業 ・森林利用・森林整備の推進 2 希少種の保護 ・現在行われている希少種などの保護回復事業、監視活動などの取組みに協力 3 侵略的外来生物対策 ・希少種の生息地などにおける重点的な監視・駆除 4 野生鳥獣の管理 5 生物情報の整備 ・自然環境情報を有する国や県の機関、市民団体などと情報交換をする場を設け、お互いの情報を共有 ・収集・整理した生物情報は、公共事業において生きものに配慮した方法を取るために利用 6 市民参画 ・自然観察会を市民団体などと協働で実施 7 環境学習 ・子供や市民が学ぶ機会づくり ・ナショナルパークゲートシステムなどの活用 観光客などの来訪者が生物多様性に配慮した公園利用を学習する場として、乗鞍自然保護センターを活用 8 資源としての利用 ・地域産材の利用促進 ・エコツーリズムの推進 【環境ごとの重点施策】 高山 ・外来生物対策 外から生きものを持ち込まないルールの周知徹底、非意図的な持ち込みの防止対策	・生態系に配慮した事業 ・森林整備の推進 ・希少種保護回復事業への協力 ・外来生物対策 ・事業における生物情報の共有、活用 ・自然観察会等の場 ・学ぶ場づくり ・ビジターセンター的機能 ・地域産材の利用促進 ・エコツーリズムの推進 ・非意図的な持ち込みの防止対策

■松本市観光ビジョン

松本市 平成30年4月策定

旅行目的、ニーズ、形態が多様化し、ネット社会の発展とともに市場が変貌する中で、国内外の旅行者に選んでもらうため、松本市全体の観光の「目指すべき姿」を市民や観光事業者が共有し、本市の観光の質を向上させる戦略の指標となる観光ビジョン

松本市観光ビジョン	基本構想・基本計画の検討事項
【目指す姿】 「3ガク都・松本」の磨かれた観光資源が世界に広がり、何度も訪れたくなるまち ・国内外から広く注目され、人と人とがふれ合う「国際観光都市」 ・東西にそびえる美しい山々を満喫し、雄大な自然に癒される「山岳観光都市」 ・歴史・伝統文化に触れ、学びを深め、芸術に感動する「文化観光都市」 【基本柱】 1 魅力の創出(観光資源の更なる磨き上げ) 恵まれた山岳観光資源・温泉を活用し、四季を体験できるアクティビティやヘルスツーリズムなどのコンテンツを拡充するとともに、自然と景観の保全に努める。 2 マーケティングと情報発信の強化 効果的な情報発信 3 安心して旅行を楽しめる環境づくり 二次交通の向上 4 おもてなしを磨く	・自然を活かした乗鞍ゼロカーボン拠点施設整備 ・アクティビティやヘルスツーリズムの案内デスク ・二次交通拠点の整備

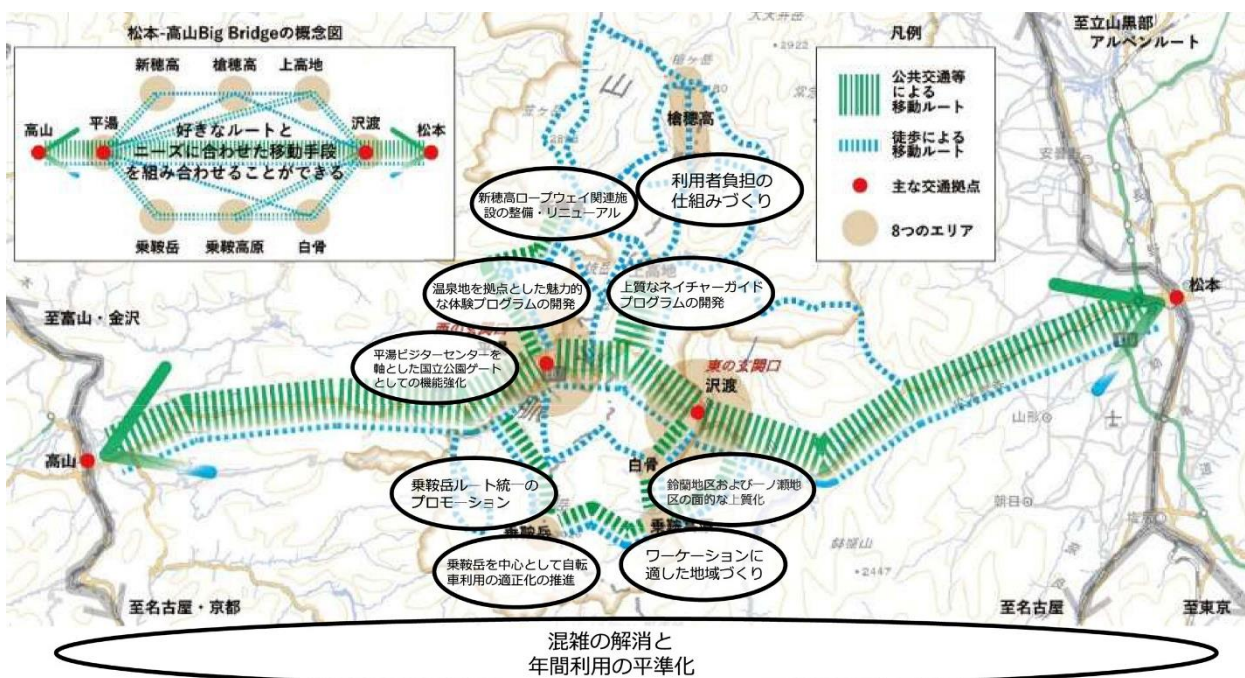
■松本高山 Big Bridge 構想実現プロジェクト

中部山岳国立公園南部地域利用促進協議会 令和3年2月から取組み

中部山岳国立公園南部地域を核として松本市街地と高山市街地を繋ぐ横断ルートを“Big Bridge(ビッグブリッジ)”と位置付け、地域関係者・行政関係者が一体となって多彩で上質な体験と滞在ができる魅力的な観光ルートに磨き上げていく構想。中部山岳国立公園を世界水準のデスティネーションとして確立させることを目指し、地域の持続可能な発展につなげる。

松本高山 Big Bridge 構想実現プロジェクト	基本構想・基本計画の検討事項
中部山岳国立公園南部地域利用推進プログラム 2025 における松本高山 Big Bridge 構想では、地域の強みを活かした Big Bridge の滞在価値の創出、保護と利用が好循環する地域の創出、上質な利用の推進と利用の平準化、国立公園外との連携という 4 つの目標が定められ、実施すべき重点項目と継続的取組項目が示されています。 観光センター周辺に関わるものとして下記の項目があります。 ・アルプス山岳郷における SDGs の取組の推進 ・ワーケーションに適した地域づくりの推進 ・上質な自然体験プログラムの充実 ・鈴蘭地区及び一の瀬地区の面的な上質化 ・乗鞍岳ルートの統一プロモーション ・乗鞍岳を中心とした自転車利用の適正化の推進	・ワーケーションへの対応 ・上質な自然体験プログラム ・鈴蘭地区の面的な上質化 ・乗鞍高原全体の観光や自然案内・自然保護に関する情報拠点 ・自転車ができる施設整備

松本高山 Big Bridge 構想実現プロジェクトの概要



■ゼロカーボンパーク指定

環境省 令和3年3月23日国内第1号登録

令和3年3月22日、地域関係者協働により地域づくりビジョンである「のりくら高原ミライズ」を策定。ゼロカーボンの推進を重要取組事項として定め、その将来性などが認められたことから、令和3年3月23日に日本初のゼロカーボンパーク(※)に登録されました。乗鞍高原におけるサステナブルな地域づくりの取組みを推進しています。

※ゼロカーボンパーク

環境省では、国立公園において先行して脱炭素化に取り組むエリアを「ゼロカーボンパーク」として推進している。電気自動車等の活用、利用施設での再生可能エネルギーの活用、地産地消等の取組を進めることで、国立公園の脱炭素化を目指すとともに、脱プラスチックも含めてサステナブルな観光地づくりを実現していくエリア

ゼロカーボンパーク指定	基本構想・基本計画の検討事項
1 地域の脱炭素化に向けた議論 ・ゼロカーボンフォーラム等でゼロカーボンの在り方について継続的に議論 ・アンケート等調査の実施 2 サステナブルツーリズムの試行的取組み ・サステナブルキャンプ、ツアーの実施 3 乗鞍高原をもっと味わうための取組み ・中部山岳国立公園パートナー企業とともにサステナブルの実現を目指す。 ・サステナブルな取組みの情報発信 ・リトリートワーケーションの推進 4 保護と利用の好循環の実現 ・ハイキング、MTB等で体験するモデルルート「NORIKURA KOGEN TRAILS」の立上げ ・トレイル協力金を活用し保護と利用の好循環 ・乗鞍高原内のカーフリー化を推進 5 脱炭素の取組みの実践 ・伐採木を利用したベンチづくり、新たなクラフト商品の企画検討 ・地域材の活用によるCO2固定化 ・信州大学が開発した給水スポットsweeを観光センターに設置 ・パートナー企業とのコラボによるマイボトル ・旅行者にも地域の脱プラを体験してもらうきっかけを創出 ・乗鞍ゼロカーボンパーク拠点施設として上質化整備 ・拠点施設やペンション等のZEB・ZEH化を目指す。	・サステナブルキャンプ、ツアーの実施に活用できる計画 ・ワーケーションスペース ・トレイルコースへの導線 ・歩行者、自転車を利用しやすい乗鞍ゼロカーボン拠点施設 ・地域材の活用 ・乗鞍ゼロカーボン拠点施設における取組みの見える化 ・鈴蘭地区周辺を乗鞍ゼロカーボン拠点施設として上質化整備 ・乗鞍ゼロカーボン拠点施設のZEB化

■のりくら高原「ゼロカーボンパーク」の具現化

松本市・大野川区・信州大学 令和4年4月26日 選定

「のりくら高原ミライズ」(令和3年3月)の実現に向けた動きを、脱炭素先行地域の取組みとして加速させることにより、ビジョンで掲げる目標の達成、更には地域課題の解決や暮らしの質の向上を図るもの。エネルギー自治、世界水準のサステナブルツーリズムの形成、地域活力の好循環を創出し持続可能な地域モデルを構築することを目指しています。

のりくら高原「ゼロカーボンパーク」の具現化	基本構想・基本計画の検討事項
観光センター(仮称・乗鞍ゼロカーボンパーク拠点施設) ・ZEB 化の実施 ・地域の交通結節点機能を有する拠点施設としての整備 EV 急速充電器設置 環境配慮型二次交通の拠点施設としての基盤整備(E-bikeやグリーンスローモビリティの配備など) 二次交通のみならず、体験型アクティビティコンテンツとしての付加価値も創出	・乗鞍ゼロカーボン拠点施設の ZEB 化 ・乗鞍ゼロカーボン拠点施設への交通結節点機能の導入

■脱炭素先行地域指定

環境省 令和4年4月26日指定

前掲の「のりくら高原『ゼロカーボンパーク』の具現化」の提案が、「脱炭素ドミノ」につながる先進性・モデル性と実現可能性、地域特性も踏まえて評価され指定されたもの

脱炭素先行地域指定	
乗鞍高原地区(ゼロカーボンパーク)の宿泊施設・飲食店等を含めた全民生需要家を、各施設の屋根等を活用した太陽光導入の他、地域主導型・地域裨益型の小水力発電施設の導入により脱炭素化を図ります。また、宿泊施設等へ EV、EV バス、木質バイオマスストーブ等を導入するとともに、観光客等が利用する E-bike やグリーンスローモビリティを導入し、環境配慮型二次交通を構築します。あわせて木材加工や供給を行う地域ビジネスの事業化を図ります。	・乗鞍ゼロカーボン拠点施設への太陽光発電の導入

■中部山岳国立公園南部地域管理計画

長野自然環境事務所 平成25年2月

中部山岳国立公園は昭和9年12月に国立公園に指定された我が国を代表する山岳国立公園で、特に南部地域はこの公園の核心部であり、我が国のアルピニズム発祥の地、山岳観光地の典型です。自動車利用適正化(マイカー規制)、登山道の管理等、古くから国、地方公共団体、地域住民、民間企業、NPO等の多様な主体が管理を行っており、より良い国立公園とするために保護と利用について管理計画で定めています。

中部山岳国立公園南部地域管理計画(乗鞍管理計画図)	基本構想・基本計画の検討事項
【目標と基本方針】 目標1 雄大な乗鞍岳の景観と多様な野生動植物を次世代(将来)に引き継ぐ。 ・乗鞍岳の景観・自然環境の素晴らしさを認識し、これを適正に保全するとともに、利用者へその魅力を伝えていきます。 ・自然環境に影響を与える要因の把握に努め、課題を関係者で共有し、改善するための方策を検討します。 目標2 人間活動と自然が作り出した高原景観を守る ・高原景観維持のため放牧地に侵入する樹林の伐採や下草刈りをします。 目標3 宿泊施設やその他の施設と自然景観が調和したまちづくりを行う ・施設の新築又は増改築の際には、自然景観や既存施設との調和を図ります。 【第2種特別地域 乗鞍高原集団施設地区】 ・乗鞍高原休憩所(松本市乗鞍観光センター) ・乗鞍高原駐車場(鈴蘭地区に位置する乗鞍岳へのアクセス拠点) ・乗鞍高原博物展示施設(自然保護センター) ・乗鞍高原公衆浴場(現湯けむり館) ・乗鞍高原園地(一の瀬園地) ・乗鞍高原野営場(一の瀬園地内:現在閉鎖) ・乗鞍高原道路(鈴蘭地区と一の瀬園地を結ぶ車道) ・乗鞍高原宿舎(温泉、自然探勝、冬季スキー等の滞在拠点)	・乗鞍ゼロカーボン拠点施設において、乗鞍岳の景観・自然環境について、利用者へ保全と魅力を伝えていく機能 ・乗鞍ゼロカーボン拠点施設の自然景観・既存施設との調和 ・乗鞍ゼロカーボン拠点施設の改築の在り方 ・乗鞍高原駐車場の在り方 ・自然保護センターの終了の対応

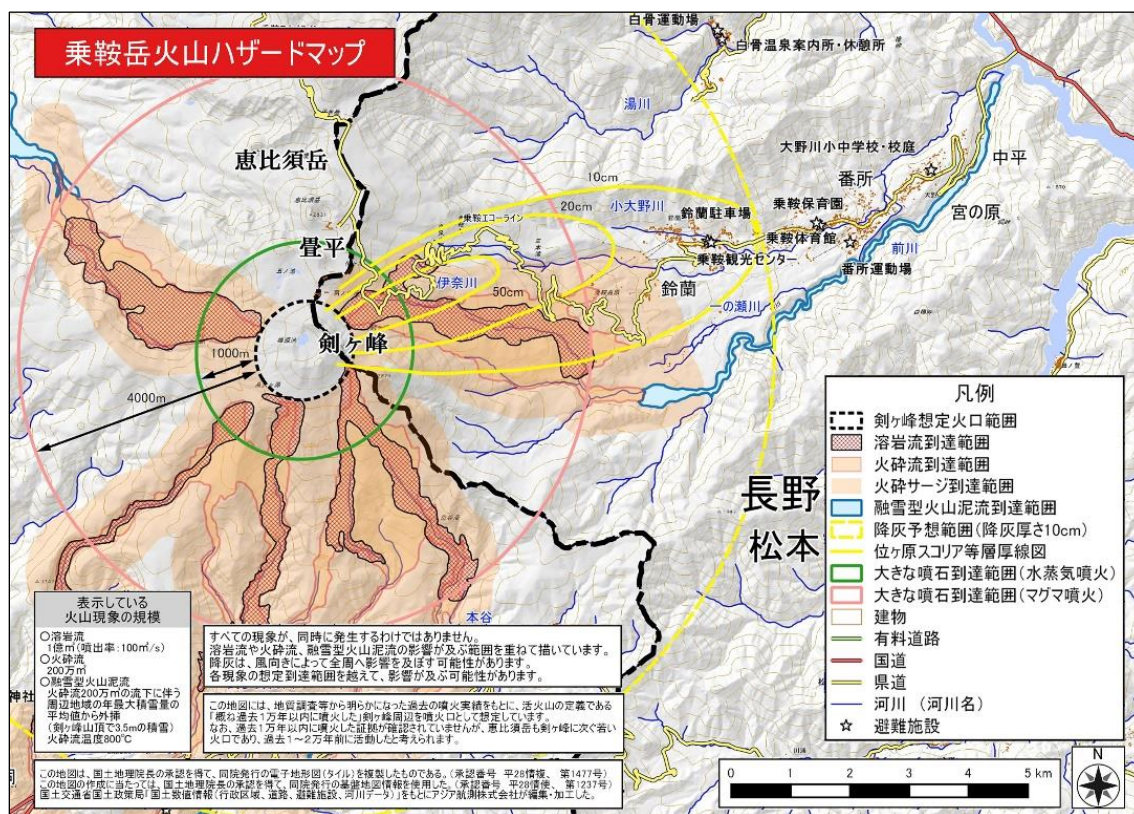
■乗鞍岳火山防災避難計画

乗鞍岳火山防災協議会 令和4年3月14日版

過去 1 万年以降の噴火の履歴を元に、防災避難計画が立てられています。噴石、溶岩流、火砕流、融雪型火山泥流、降灰について推定されています。ハザードマップをみると鈴蘭付近は噴火想定による降灰を除いた影響の範囲外となっていますが、火砕流、火砕サージについては、規模や流路が想定と異なった場合には、被災の可能性もあるとされています。

乗鞍岳火山防災避難計画	基本構想・基本計画の検討事項
乗鞍岳の噴火の警戒レベルは、5 避難、4 高齢者等避難、3 入山規制、2 火口周辺規制、1 活火山であることに留意と5段階に分類されています。噴火警戒レベル2では、火口から概ね1kmの範囲に規制がかかり、避難対象施設として頂上付近の小屋や位ヶ原山荘、冷泉小屋が指定されています。噴火警戒レベル3では、火口からおおむね4kmの範囲に規制がかかり、レベル2の施設に加えて三本滝レストハウス、スキー場も避難対象施設です。 指定緊急避難場所(一時避難所)、指定避難所には、乗鞍体育館、大野川小中学校が指定されています。	避難場所としての機能

乗鞍岳火山ハザードマップ



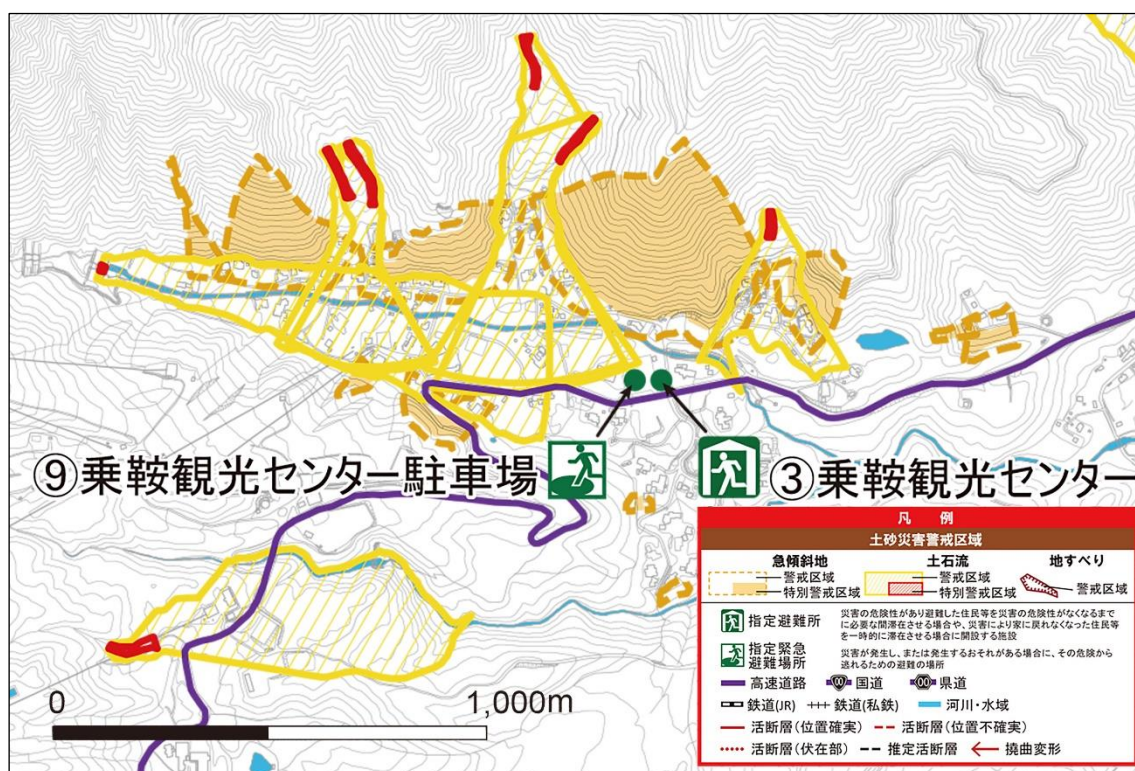
出典:長野県 HP

■ 松本市ハザードマップ

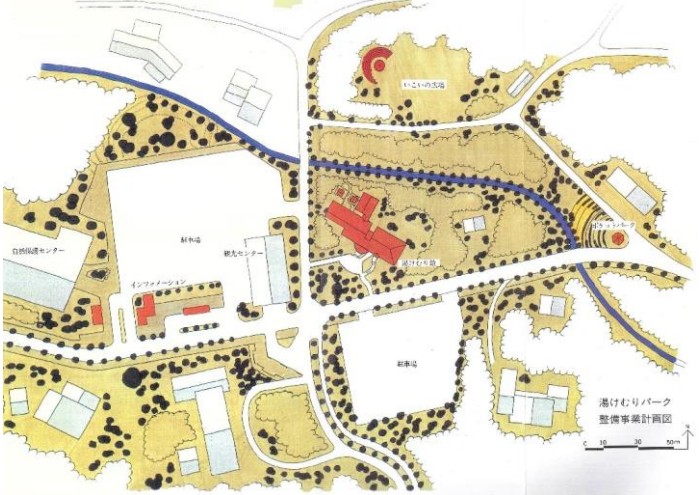
松本市のハザードマップにおいては、100年及び1,000年に一度の大雨を考慮した浸水想定並びに土砂災害警戒区域、避難所の情報が掲載されています。

松本市ハザードマップ(鈴蘭地区)	基本構想・基本計画の検討事項
鈴蘭地区周辺は浸水想定はなされていませんが、土石流の警戒区域に指定されており、乗鞍自然保護センターの一部から北西側が警戒区域に含まれています。 観光センターは指定避難所に、第1駐車場は指定緊急避難場所に指定されています。	・新施設においても、避難場所としての機能提供 ・施設は土石流警戒区域に留意

松本市ハザードマップ



■過去の行政の計画等における乗鞍高原のビジョン

計画名称・主な項目	内容
長期振興計画 安曇村 (昭和 47 年 1 月) ・道路交通網整備 ・高原温泉郷の開発 ・スキー場計画推進 ・観光開発促進 ・遊歩道整備 ・乗鞍岳の自然保護 ・自然園	日本で一番高い山の村。そこに平地はない。その地で生き抜くためには、田畑によって生業を立てることはできず、山と木と水に一切をかけてきた。 (序文より) ・人口は過疎化 ・産業就業人口は、第一次から逐次第二次、第三次産業に移行 ・観光上の地形的な面に優れた特性を保有、これらを活かした地元産業と観光産業の育成 ・観光開発及びルートの整備(県道乗鞍岳線の拡幅改良要望) ・湯川上流の温泉を乗鞍高原に引湯した高原温泉郷の開発 ・国有地を活用した大スキー場群の計画推進 ・乗鞍高原東半より宮の原、大花戸に至る開発、野麦峠に至る開発促進 ・学生村、民宿の助長のため、付帯施設充実と遊歩道整備 ・乗鞍岳周辺の自然保護を最重視、岐阜県とタイアップし環境整備 ・指定を受けた乗鞍岳中腹の自然園を憩いの場として充実
第 3 次安曇村総合計画 安曇村 (平成 2 年 3 月) 平成 2 年～11 年 ・リゾート開発計画 ・ロープウェイ構想 ・沢渡の開発計画 ・スキー場周辺開発	村域の 57%が中部山岳国立公園に指定される名実ともに自然の村として、豊富な水資源を利用した「発電の村」から「観光の村」へと着実な発展を遂げてきました。社会の多様化、高速交通時代を迎える中で 21 世紀に向けた 10 年間の将来像として、観光面では、日帰りの増加や通過地への懸念から足止め対策、滞在型観光地としての開発の必要性を掲げていました。 ・乗鞍高原は、通年型観光地として年間約延べ 100 万人を受け入れ ・更に誘客の必要があり、地理的条件からリゾート開発を推進 1 乗鞍リゾート開発計画の策定 2 乗鞍ロープウェイ新設の検討 3 沢渡・白骨地区の総合的な開発計画を策定 4 猪谷スキー場周辺の開発推進(いがやレクリエーションランド) 5 乗鞍高原スキー場と猪谷スキー場のツアーコース整備 6 各地新資源の発掘と観光への結び付け検討…等々 湯けむりパーク整備事業計画  第3次安曇村総合計画より

第4次安曇村総合計画 安曇村 (平成12年3月) 平成12年～21年 ・道路網の整備 ・マイカー規制 ・エコツーリズム ・遊休地の有効活用 ・新たな観光施設 ・スキー場の見直し	地球環境問題の顕在化、少子・高齢化の進行、高度情報化、価値観の多様化、ライフスタイルの変化等により観光需要の動向は厳しく、観光客の減少が著しい地区も見られることから、さらなる観光基盤の強化を掲げていました。 ・中部縦貫自動車道沢渡インターの設置早期決定、道路網の整備 ・上高地新輸送システムの早期実現 ・乗鞍スカイラインのマイカー乗り入れ規制 ・乗鞍高原へのエコツーリズム導入、体験型・環境学習型観光の推進 ・鈴蘭駐車場周辺の遊休地の有効活用 ・エコツーリズムの考え方を取り入れた観光施設整備の検討 ・いがやレクリエーションランドの低迷、民間委託を検討
平成13年度乗鞍高原 集団施設地区再整備基本計画 環境省中部地区自然 保護事務所 (平成12年3月) ・ビジターセンター ・温泉地 ・バックカントリーコース ・トイレ整備 ・オートキャンプ場 ・MTB	近年のスキー場利用者の減少、県道乗鞍岳線のマイカー規制問題など、乗鞍高原を取り巻く状況は大きく変化していることを踏まえ、乗鞍高原集団施設地区の再整備の基本構想を策定したものです。 ・乗鞍高原の歩道(登山道を含む)の再整備 ・一の瀬を中心にした乗鞍高原の景観維持目標、保全計画の設定 ・二次的な自然環境を自然学習に繋げるために必要な施設整備(標識、歩等) ・ビジターセンターの整備 ・国民保養温泉地の指定 ・様々なタイプのバックカントリースキー(スノーシュー含む。)コースの整備 ・冬場の利用施設の整備(トイレ、案内・解説標識等) ・オートキャンプ場の整備 ・自転車(MTB含む。)利用のための施設の整備
平成18年度乗鞍地域まちづくり基本計画 松本市 (平成19年3月)	乗鞍地域は、近年のスキー人口の激減によりスキー場経営が悪化し、地域の観光産業にも早急な対策が必要なことから、自然、温泉、築き上げた観光施設を有機的に結び付け、通年利用・滞在型の観光地への再生を目指しています。 「自然にひたり、温泉につかる、癒しのテーマパークをつくる」 基本方針 1 合理的な土地利用 自然の保護と活用を目指す 2 人が主役のリゾート 車に邪魔されることなくゆっくり自然満喫 3 豊富な活動メニュー 大自然を楽しむサービスの提供 4 的確な情報 来訪者が分かりやすく、活動しやすい地域 5 美しいまち並み 心が癒される美しいリゾート